

760
170



* 0053712000 *

3

0053712-000

760-170

中華万華鏡

井上紅梅・著

改造社

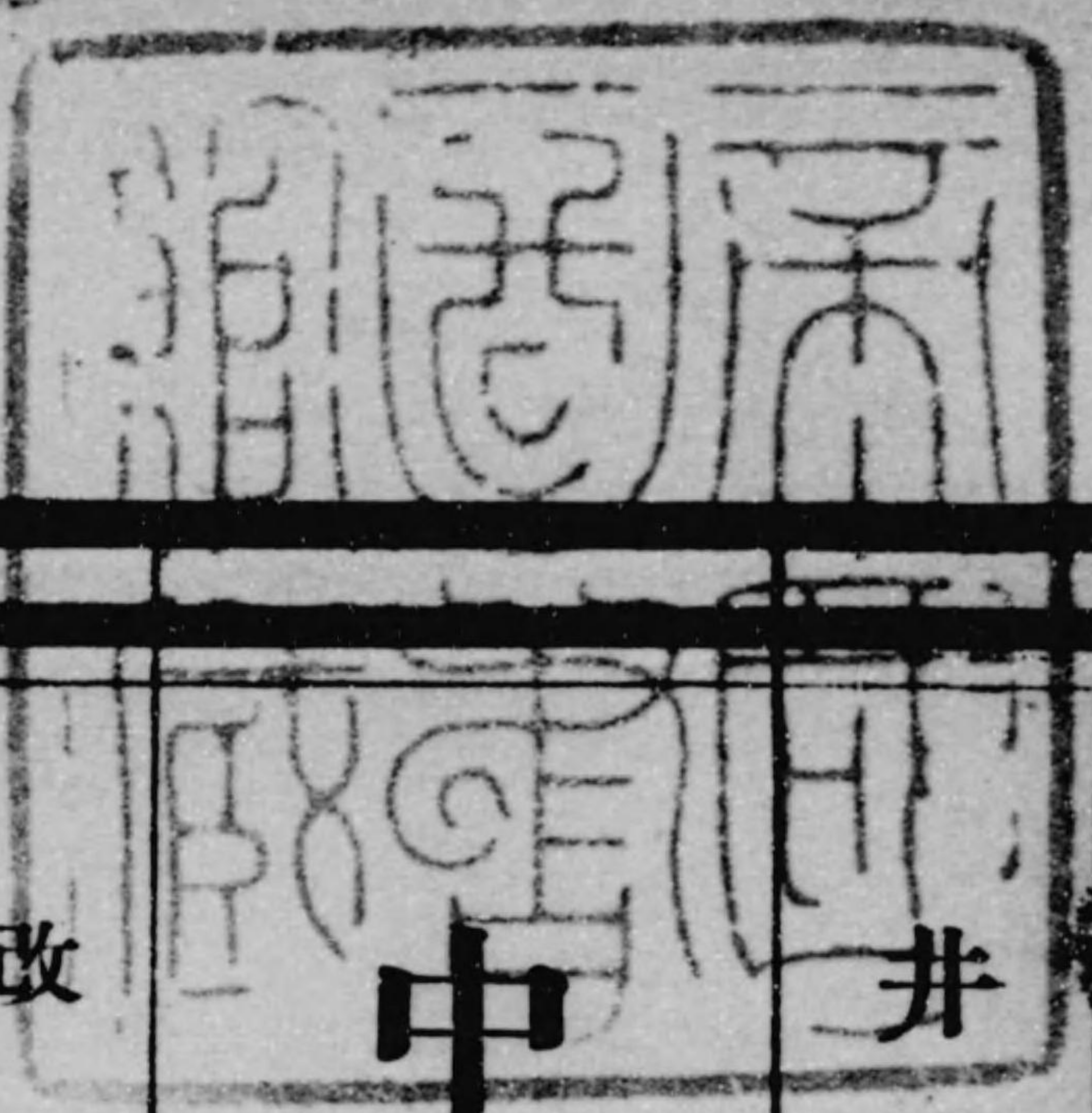
昭13

AIA

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年5月15日
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです

33.2. 3

2495



改

中

井

造

華

上

社

萬

紅

發

華

梅

行

鏡

著



760
170

序

今度ほど多数の日本人が支那に入込んだことはない、従て日本人の頭腦に支那が常識化されることは、すでに目前にあるのである。支那には從來甚だ奇異に感ぜられることが多い、しかも大抵闇黒方面である。その光明方面に至ては、我々の祖先が千年以來これを學び盡して、すでに我日本の血となり肉と化してゐるので、これに對して何等の奇異を感ずるものではない。支那の知識人中、殊に日本歴史を講ずる人士の間には、日本は過去に於て、悉く支那文化を模倣したが、所詮本元の雄大に及ばず、今日日本の慢る國粹も支那文化の一支流に過ぎない。といふ者が甚だ多い。しかし我々の祖先は、聖賢の言葉でも取捨撰擇して善きを探り悪しきを捨て、漫然これに盲從したのではない。況んや、宦官、纏足、節婦坊、科擧試験の如き愚學は、彼等が數千年間、歴朝これを繰返してゐるに拘らず、我等は一度もこれを眞似たことはない。我等の祖先は賢くも良種を摘出してこれを

用ゐた。近來歐米文化に對しても、國民の總意は矢張りこれと同様の方向にむかつて進んでゐるのである。然るに日本に留學する支那人は多くはこれを悟らず、日本はたゞ歐米文化の受賣をなすものであるから、直接歐米に學ぶに如かずとなし、單に費用の點から便宜上日本に留學するのである。これが抑も排日侮日の起る眞因で、清濁併せ呑み、良莠共に榮える彼等の特大精神の缺點であらう。

本書は支那に對して奇異に感ぜらるゝ方面を多く採つた。從て闇黒面が多い。これは何も支那の醜惡を罵るのではない。要はその眞相を觀んとするのである。

昭和十三年十月六日

著者識

目次

序	一
老酒	三
猫魚	二
螃蟹	三
火腿	一七
澤國の水果	二
田螺	二四
大刀會	二七
茶館	二八
ちしはし	三〇

寶塚	：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：	：四一
纏足	：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：	：四七
○ 骨董珍談	：：：：：：：：：：：：：：：	：五
美人鑑定	：：：：：：：：：：：：：：：	：五
○ 寢室	：：：：：：：：：：：：：：：	：七〇
○ 全家福	：：：：：：：：：：：：：：：	：八一
○ 雨花台の風	：：：：：：：：：：：：：：：	：八三
○ 郭公	：：：：：：：：：：：：：：：	：八五
大佛待の芝居	：：：：：：：：：：：：：：：	：八九
○ 南京の名物	：：：：：：：：：：：：：：：	：九三
明太祖の悔	：：：：：：：：：：：：：：：	：九六
尋妻廣告	：：：：：：：：：：：：：：：	：九六

典妻	：：：：：：：：：：：：：：：	：一〇一
靈藥	：：：：：：：：：：：：：：：	：一〇四
○ 毒物販賣業	：：：：：：：：：：：：：：：	：一一〇
吃賭嫖戲	：：：：：：：：：：：：：：：	：一二四
○ 四大社會惡	：：：：：：：：：：：：：：：	：一三一
有産乞巧	：：：：：：：：：：：：：：：	：一三六
○ 金瓶梅と紅樓夢	：：：：：：：：：：：：：：：	：一四六
夜來香	：：：：：：：：：：：：：：：	：一五一
人質強盜	：：：：～：：：：～：：：～	：一六六
○ 青紅幫	：：：：～：：：～：：：～	：一八二
京劇概念	：：：～：：～：：～	：二〇三
寄席概観	：：～：：～：：～	：二一七

中華萬華鏡

說書……………三二
灘黃……………三六
徐氏の講話……………三五
寶卷……………三五

老 酒

日本の支那會席では、老酒に氷砂糖を入れて飲まねばならぬことになつてゐるが、あれは甚だ馬鹿な話だ。日本酒に氷砂糖を入れて飲んだら、下々の下戸として誰れでも笑ふだらう。支那にもいろいろ酒はあるが、老酒は日本の難にも匹敵すべきものである。東京人は大阪人と較べると、清酒を飲み分ける者が甚だ少い。それと同じやうに支那でも北方人は老酒の味を知る者が少い。だから悪い地酒は氷砂糖を入れて飲んでゐるのである。此風習をそのまま日本に傳へて、一流の會席が金科玉條として之を守り、可成の老酒を出しながら、自ら悪酒を標榜するに至ては、實に不見識極まることではある。茲に老酒に就て聊か説明しよう。

支那は國が廣く氣候風土の關係上、酒は地方に依て皆違つてゐるが、大別すると、醱酵酒と蒸溜酒の二種である。

老酒は絲狀菌醱酵酒の一種であるが、色の方面から見て之を黄酒と通稱し、地酒と銘酒を區別して紹興酒といふ。紹興酒は日本の灘といふ言葉に當て嵌り、「正宗」「白鷹」に對するやうな銘柄が非常に多い。即ち「花雕」「元紅」「竹葉青」「京莊」「本色」などである。

花雕 は罈に龍鳳等の芽出度き繪模様を描き、紅綠墨胡粉を以て彩色してあるところから其名が出たのである。通例小賣店では之を二種に分け、大花雕、小花雕と稱し、瓶詰（二斤入約四合強）のレツテルには「真正遠年二十年大花雕」或は「真正遠年加飯大花雕」などと記してある。右の遠年といふ言葉は舊藏の意味で十年以上の古酒をいふ。加飯は醸造法で、醸酔後更に飯を加へたものである。此二十年酒を證明するため、四馬路言茂源の瓶詰の裏側には、次の如き口上書が貼附してある。「本棧は上海に店を出してから已に百六十餘年を経過し、一時臺灣に向け、良酒を多く移出したが、日清戦争後、同島が日本の有に歸してから、販路が急に止り、當時の在庫品が今も猶ほ残つてゐる。此瓶には特にその在庫品を詰めたのであるから、二十年の古酒に間違ひないのである」云々と。

臺北の教育博物館には清將劉求福の愛用したといふ燭酒の器具が陳列されてある。瓷製の角土瓶に瓶子がイレコになり、蓋が猪口になつてゐる。之を見ると清時代臺灣では随分老酒を飲んだものらしく、こんな廣告文にも日本が引合ひに出されてゐるのだから仇日の起りも中々一朝一夕ではない。言茂源は斗り賣では極めて良い物を賣つてゐたが、現在支店が大新街と愛多亞路に残つてゐるが、最早昔日の良酒が無い。曾て四馬路の陳賢良は「本色」を以て有名であつたが、火災に遭つてから酒の品位が急に落ち、同時に客足も落ちて閉店するに至つた。だから言茂源の廣告文も宣傳には違ひなからうが、丸切嘘の話でもないやうである。十年二十年の古酒は一朝一夕に蓄積されるものではない。毎年次から次へと新品を添へ、古い物から賣りこなしてゐるので、之を俄に醸造元に註文しても

品物が揃ひにくく、たとひ無理に揃へても値段が非常に高くなるから、店賣として他店と競争するところが出来ない。だから老酒は老舗ほどいいのである。

罈の模様を彩色することは「女兒紅」から出たのであらう。江南地方の工面の好い百姓家では女の兒が生れると、酒を澤山作つて罈に詰め、密封して陂の底に埋め置き、其兒が成長して嫁に行く時、取出して一部を婿方に贈り、一部を自宅に残して置き、婚禮の祝酒にする。之を「女兒紅」と稱し、少くも十五年以上経過したものである。さういふ祝物だから、罈の外部を龍鳳で裝飾したのであるが、商人は酒の古きを證するため、此女兒紅の體裁を借來つて婚禮品の剩物のやうに見せ掛け、少しづつ賣つたのが段々擴まつて、遂に「花雕」の銘柄が出来たのである。女兒紅の名は男の出世、狀元紅に映發してゐる。

狀元紅 は狀元紅の省略で此語は竹葉青と對句をなしてゐる。即ち狀元は清時文官最高試験第一等の當選者で、紅は映えある意味を示し、赤い簪を挿して祝つたものである。勿論其時には盛大なる酒宴を催し、豪家では貯への古酒を開いてふるまつたものであらう。故に此名は最上級を意味し、色も文字通り極めて濃厚で殆んど醬油色に近い。それは醸造法の加飯に依て色が出で、歲月の經つほど濃厚になるのであるが、近來此種の酒には色附の擬がひ物が多く、白罈の下部に【狀元紅】と印し、酒屋の店頭には山の如く積んであるが、良好のものは極めて少ない。

竹葉青 は竹の葉を加へて醸造したもので、其製法は唐代から傳はり、色は青味を帯び口に入

れてや、酸っぱく、西洋のシエリー酒に似てゐる。此酒はコクがないから常用としては少し飽氣ないが、花雕の口直しに好い。風邪を引いてどんな良い酒でも不味く感じる時、先づ此酒を一本取つて飲み、其後で花雕を飲むと味覺が恢復する。筆者は曾て陳賢良のボーイから此方法を教はり、口不味い時にはいつも飲み直しをしてゐるが、酸性とアルカリ性の交替であるかのやうに思はれる。

●京莊　むかし蘇の酒を船に積んで江戸に運んで來ると、酒がこなれて非常に好くなると云つてゐる。日本酒は樽の杉脂が浸出して蒸りも好くなるが、老酒を運搬すると底の灰が舞上つて混濁し、一ヶ月ほども静置しなければならぬが、それにも拘らず味が好くなる。老酒は北京官話と同じく、遠く行けば行くほど美しくなり、紹興シヨウシヤンから北京に輸送して貯藏したものを京莊と稱し、尤も味が良いといはれてゐるが、實は此酒は三等酒で花雕よりも遙に落ちる。花柳小説「九尾龜」の中に、方幼憚といふ田舎大盡が初めて上海に出て友達に遇ひ、一緒に料理屋に行つて食事をする時、先づ「京莊」を注文することが書いてあるが、之は作者の用意のあるところを示したもので、北方人は京莊を一番良い酒だと思つてゐる。

●本色　は老酒本來の色といふ意味で、花雕と比べると色薄く、日本の地酒の色に好く似てゐる。通例黄酒は皆此色であるところから、色の薄いのを一概に悪いやうに云ふ人もあるが、決してそんなことはない。「本色」の上等品になると、花雕よりも腰が強く、而もあつさりした風味を持ち、値段も花雕より高いものがある。併し此の場合本色といはず、矢張り花彫の名で賣つてゐる。言茂源、陳

賢良などでは罇の都合で好くさういふ薄手の上等品を飲ませたものである。

以上の銘柄は地方分店が顧客に分賣する時の名稱で、酒屋者自身は罇の大小を以て區別する。

二

老酒の醸造法は淋飯リンパン、攤飯タンパン、加飯カパン等の三種に分れてゐる。

●淋飯法　は濁酒の製法と同じく、粥に麥麴を加へて醱酵せしめ、後ち絹袋に入れて二三回搾り、灰を加へて沈澱せしめたもので所謂田舎酒の製法である。同じ浙江省でも寧波では此方法で作るゆゑ、一名寧作と稱してゐる。上海では之を醬油屋、酒行等で賣つてゐるが、色淺く一見「本色」のやうに見え、口に入れても格別變りがないやうに感じるが、一合ほど飲むうちに喉が急辛くなり、迎も多く飲むことが出来ない、と言つて、アルコール量が多いのではない。アクが多いのである。普通各地で作る老酒即ち黄酒は皆此醸造法を用ゐる、北方では黍粥、南方では米粥を原料とし、麴は麥麴である。黄酒は又王酒と稱するが、酒の王といふ意味ではない、黄字の南方音が王であるからである。寧ろ王八酒といつてもいい位のものである。

●攤飯法　は俗に紹作といひ、紹興に於て専ら行はるゝ方法で、日本の清酒醸造法に甚だよく類似してゐる。恐らく日本の清酒法も紹興あたりから傳つたものであらう。醸造技師を日本では杜氏トウジといつてゐるが、支那古代清酒の發明家杜康の姓を取つてゐるところを見ると、清酒の製法は支那傳來

に違ひない。大體に於て甚だよく類似してゐるが、只少し異なる點は、日本の米糶に對して支那は麥麴を用ゐ、日本の硬米に對して支那は糯米を用ゐる事と、醗を作る作業にも多少の出入がある。

支那酒の製法は先づ小麥粉で麴を作る。大麥粉を交ぜる時には大二小八の割合である。粉は先づ水を加へて捏ね、櫃の中に移し、席を掛けて足で踏みならし、充分踏み固めた上、之を出して藁に包み、麴室にねかし、三週間の後ち之を取り出して藁を剥ぎ取ると、黄白色の麴菌が成熟してゐるので溫度宜しき別の室に移して置く、之が所謂大麴ダイカクと稱する麥麴である。

一方精米を一晝夜水に浸してよく洗ひ、蒸熟後、篋を裝置した桶の中に入れて清水を掛けて攝氏三十度の溫度に冷まし、之を缸の中に入れて酒藥サウヤ（日本のモヤシに當る）を加へて好く交ぜ、中凹にして置くと、一二晝夜して中間に液體を生じゐる。此液體を「漿凹酒」といつて、日本の醗に當るのである。

そこで三石入の缸の中に、漿凹酒を移し、蒸米と麥麴と水を適當に加へ、酒把サウバ（糶）を以て力一杯に攪拌した後、藁蓋をして醗酵室を密閉し、蒸米が水分を吸収して膨起した頃合を見計らつて、長柄の酒把を以て攪拌しながら、飯粒をよく摺りつぶして醗酵作用を促し、毎日缸内の高低に依て攪拌の度數を加減し、かくして一週間の間に醗酵終り、之を八十日放置してから搾るのである。

攤飯法は上記の如く醗の仕込みだけするのであるが、

◻加飯法 は日本の清酒のやうに、中添、留添シヨウレンへなどするので、紹興酒中シヨウヘンでも最上級に位し、所

謂遠年トウエン一二等品になるのである。

色は元紅最も濃く、花雕京莊ケイテイ之に次ぎ、本色は極めて薄い。色の濃くなるわけは、麥草を加へるせゐであらう。新酒は此麥草が充分こなれてゐないので、一寸癖があつて酔心が好くない。常州の蘭陵酒も此加飯法を用ゐてゐるらしい。

老酒の醗造期は降霜前から着手し、麴の製造から何もかも入れて百日にして完成する。

完成後は精濾にして灰を加へて沈澱し、更に上澄みを汲み取つて火入をなし、大小の罈ヒヤンに詰めて密封する。

罈の形は腰高提灯型で口窄り、蓋に素焼のかわらけを置き、一文錢を一つ入れ、年號屋號を記せる藍紙で封じ、其上に竹の皮を覆ふて括り、更に其上に泥土を塗付け、土耳其帽狀に盛り上げ、頗る分厚な蓋を作る、罈の外部は竹片を網目に編んで包み、左右の肩に把手を作り、持運びに便す。

新酒は六月及九月の雨期を經過して用ゐるのであるが、市場に出すものは、少くとも二三年貯藏したものである。

其の仕向先は上海、杭州、寧波等で此處から更に福州、廣東、北支那方面に轉送され、製造高の約一割は原地に残り、其他は他地方で消費され、所謂路莊酒ロウテイウとなるのである。取引の方法は、紹興から上海までの運送を元方で引受け、買手は先づ半額拂込み、着荷の上殘金を支拂ふのである。罈は開封して検査すると腐れ易いから、密封のまゝ受取り、腐敗酒に對しては元方が、百罈に付五罈の責任保

證をなし、それだけ値引をしてゐるのであるが、實は二三罈あるかなしで、其腐敗酒も小賣屋では石灰を交せて攪拌沈澱し、良酒に交せて賣るのである。

三

紹興市は越王勾踐「臥薪嘗膽」で有名な會稽山を後ろに控え、附近には王羲之の蘭亭や禹廟があり、所謂山陰會稽の間水清しで、梁武帝時代已に名酒を出し、此邊一帶は日本の灘七郷にも似て酒の醸造に最も適してゐる。七賢橋下の水や春浦の水も有名であるが、中にも鑑湖の水は最も廣く愛用され、附近の小市東浦、阮社、柯橋の如きは、全市悉く酒造家で、之に用ゐらるゝ酒罈は、蕭山から紹興までの路の兩側に堆積され、緑の山脈と起伏を争ひ、蜿々數十里に涉り、頗る偉觀を呈してゐる。

紹興城内には大小の小賣屋の外に、露店が到處に設けられ、爛酒を井に入れて注ぎ賣りしてゐるが、此土地の人は十人が十人も酒好で、どんな貧乏人でも朝晩は勿論、一仕事終るとすぐに一杯飲むといふ調子で、他地方のお茶と同様であるが、値段が安いので少しも苦にならず、酒が好いので身體にも障らないといふ誠に飲酒家の樂天地である。

上海の酒屋は酒行と酒棧の二種類に分かれてゐる。

酒行 は天津系の燒酎屋で、高粱燒酒、白玫瑰、五加皮等を主に扱ひ、老酒はほんの片手間で、北方産の黄酒や擬がひ物の元紅などを賣つてゐる。此種の元紅は砂糖を焼いて色付したものであるか

ら、勿論良からう筈はなく、値段も亦極めて安く、一斤(約二合)僅に八仙位である。其外、醬油屋でも老酒を賣つてゐるが、それは上海近郊の地酒で贅澤な上海人は殆ど之を飲む者なく、専ら料理の味附に用ゐられてゐる。

酒棧 は本場物を賣る紹興系の酒店で、即ち上記の路莊酒家である。

酒家の軒先には酒行も酒棧も一樣に金箔塗の吊り看板を並列し、「遠年花雕」「京莊紹酒」「玫瑰露酒」「高粱燒酒」などと四字づゝ書いてある。又正面の大黒柱には「太白遺風」「劉李停車」等、極めて風流な大看板を見るが之は酒行の方に多く、酒棧は寧ろ率直に、店の屋號を明示し、「王寶和酒棧」「高長興酒棧」等々と大書してある。風流な看板を掛ける者が凡酒を賣り、然らざるものが却て良酒を賣つてゐるのは、店の名前に自信を持つからで上海の酒棧は、各自紹興釀造元の名前を名乗り、日本でいへば、花木甚左衛門とか加納治郎右衛門とかいふやうなものである。

猫 魚

江南一帶の城市では「賣猫魚」といつて猫の食料を賣り歩く者がある。

その魚は鮎に似て長さ二寸位、淡黒い中に赤味をさし、青翠色の斑點を覆ひ、腹下に三條の白線がある、といふ體裁は中々いいが、實質上からいふと小骨が多く、肉は瘦せ、逆も人間の口に合ふもの

でないから、猫に食はせるのである。値段は十疋一錢位である。

この魚は本名鱒鮓マスといひ、昔は青衣魚又は婢妾魚と稱した。それは三尾揃つて水中に游泳し、一つは先きに、一つは後に跟いてゆく有様は、宛かも婢妾が本妻のお供して歩くに異らずといふのである。

此まづい魚が大きくなると、天下第一のうまい魚になるのだから驚く。むかし太湖の漁夫が三年がかりで、重さ四十餘斤の大鱒鮓を獲た話がある。

太湖の中の漁船には、海洋の汽船にも劣らぬ巨大な船がある。上に二層三層と樓を重ね、内外に二重三重の門を設け、一切の設備は陸上の大家と變りはない、舟子は代々同棲して子孫を滿載してゐるが、きのふは東、けふは西と浮び歩く水上生活では子孫の教育ができないので、或時一人の先生を招聘して讀み書きを授けて貰つた。

先生は非常に優遇された。夜具蒲團でも寢臺でも善美を盡したもので、三度の食事も鶏や鵪や豚や羊や陸上の果實野菜はみな備はつてゐたが、たゞ一つ魚がない。魚は彼等としてはありふれたものだ。客を敬ふ意味にならない。それでわざ／＼陸のものを出すのだらうと想つて、一年ほどの間は遠慮してゐたが、先生は魚が欲しくてたまらない。遂に一日主人に向つて

「毎日いろ／＼珍しいものを頂戴して有難いが、わたしは本來口が奢らない方ですから、わざ／＼陸の物を買つて下さるには及びません。こゝで捕れる魚で結構です。餘計な金を使つて下さるな。」

といふと、主人は答へて

「先生に粗末な物を差上げては罰が當ります。わたしは魚を差上げたいと思つてゐますが、いい魚が無いので閉口してをります。此湖水の中に素敵にうまい魚がありますが、いづれそのうち捕れるでせうから、其時には十分御賞美をねがひます。」と言つて退いた。

それから先生は毎日魚を待つてゐたが、なか／＼魚の料理が出て來ない。さうして又一年ほど過ぎた。或日食膳にむかふと魚が出てゐた。先生は箸で摘んで一口食べてみると驚いた。

「こんなうまいものは生れて初めて食べましたが、何といふものでせう」と先生は主人にたづねた。

「ごくありふれたもので、お話すると馬鹿々々しくなりますが、猫に食はせるあの鱒鮓です。」

「へゝえ、鱒鮓はこんなうまいものですかね。」

「この魚は年數が経てば経つほど旨いのです。何しろ四十斤以上ですから、何年たつたか見當が付きません。これは三年前に見たものですが、やうやくけふ捕獲することができました。」

「なるほど、それでは旨い筈だ。」

先生は一度この旨味を知つてから、他の魚に箸を起す氣がなくなつた。

鱒 蟹

蟹は仲秋前から市場に現はれるが、本統に油の乗つて来るのは菊の花の盛り頃だ。

蟹は百味の會と言つて、凡ての物の味はひがみなその中に含まれ、食べる時にはかんばしいけれど、あとの移り香が甚だよくない。好くしたもので、菊の葉をむしつて手に揉みつけると、すつかりそれが取れてしまふ。

酒屋では蟹を一つ／＼縄で十文字にからけて置く。蟹の腹には蘇州碼子（南京符牒）で値段づけがしてある。客は二つ三つ適宜に撰り出してポイに渡すと、ポイは縄で括つたまゝ蒸籠に掛ける。蒸す間多少暇が掛るから、何か他の物は要らないか、と訊く。取るも取らぬも客の勝手だが、その間、小豆びか筍でも食べてるればいい。何を食べても、蟹の味に勝つものはないのだ。蟹は最後の大詰めがいい。

蟹を撰むには先づ眼玉を見ることである。眼玉は黒いのがいい。黒いのが普通で、どうかすると赤いがある。これは決して食べてはならぬ。中毒を起す惧れがある。

次に腹を見る。腹は白磁のやうに白いのがいい。青づんだ黒點の多いのは好くない。これは産地の關係で、清水に棲むものは、外形も清く腹内も清潔である。汚水に棲むものは、外形が青黒く腹内に泥を含んぢヤリ／＼してゐる。

次に雌雄を見分ける。雌は丸い腹當てがある。雄は尖狀の腹當がある。日本ではこれを「ふんどしを掛けてゐる」といつてゐるが、支那ではこれを臍といふ。卵黄は丸い臍のものに多く、尖つた方に

は少い。新曆十月が雌の盛で、十一月が雄の盛である。それから先きはどちらもまづくなる。

蟹は日本と同じく醋生姜醤油をつけて食ふ。又胡麻油を少し加へる。蟹と酒はよく合ふもので、いかなるまづい酒も蟹と一緒に食ふと旨くなる。だが支那の蟹は矢張り支那の酒がいい。而かも焼酒はいけない。老酒に限る。花雕の美酒、洋澄湖（羊腸河）の蟹は、江南第一の美味である。

洋澄湖は河蟹の産地として、量に於ても質に於ても、恐らく支那第一であらう。従て値段も高い。上海の小賣相場で一つが大洋三角から五角六角位までである。かういふものは四馬路、大馬路の一流どころの酒屋若しくは料理屋で買ふに限る。北四川路の往來や虹口マケツで賣つてゐるものは、目方が軽く身が少く、小洋一角位であるが、場ちがひものだから旨くない。

洋澄湖は蘇州の手前の唯亭驛から東北にひろがる細長い湖水で、萬頃一碧の周圍には、白楊の矮樹が彫刻浮彫のやうに葉を逆立て、遠く常熟の山々が雲霧の間に屏顔をほの見せ、平面式の風景は、日本の濱名湖に似てゐるが、あれよりもすつと落ちついて、いつ見ても漣一つ立たない。

ヤンザンウーは洋澄湖、羊腸河の外に、陽城湖、又陽澄湖とも書く。酒屋の看板には、「眞々洋澄湖螃蟹」或は「眞正羊腸河〇」などとある。〇は蟹の畫である。一は水色を形容し、一は地形を形容してゐる。

蟹は上海語ではヘイ若しくはハーといひ、蝦をホーといふ。一は平たいから口を開け、一は細長いから、口を窄めるのであらう。

單語の時には螃蟹（イは軽くいふ）である。出抜けにヘイだのヘーだのといつても、いろんな意味のヘーがあるから螃蟹を上につけないと解らない。しかし料理をしたものには、連接語があるから蟹の一字を加へればいい。醋溜蟹、木犀蟹、芙蓉蟹、蟹羹、蟹粉菜心、白切蟹などである。

蟹粉は蟹の身を集めたものである。ゆるに饅頭の場合には蟹粉包子といふ。卵黄は蟹黄といふ。酒屋へ行つて蟹を注文する場合には螃蟹といへばいい。まるごと蒸して来るからである。これを四つに切らせると、白切蟹になる。

福建では蟳といふ。蟳は海蟹である。上海ではこれを青蟹といつて寧波料理屋にあるが、甚だ少い。一般にみな河蟹である。

醉蟹は酒漬の蟹である。酒は焼酒及老酒を用ゆるが、老酒製の方がいい。

醉蟹の製法は、蟹を三日乃至一週間位、鐵網の中に入れ置き、すつかりあぶくを吐かせて後ち、酒六分醤油四分を程よく煮て缸の中に入れ、密閉し、三週間の後ち出來上る。

蟹はウンと腹の空いてゐるところへ、酒醤油の御馳走になつて、陶然として缸の中に永眠してゐる。醉蟹に用ゆる酒は、普通の煮物に使ふ黄酒で充分である。花雕のやうな上物を使ふ必要はない。蟹は中形以下を用ひ、小蟹が尤もいい。調味料として唐辛子を加へることもある。出來上りは、卵黄は紅色になり、卵白は黒色になる。その黒色のものが一種鹽辛のやうな味がして中々うまいものである。此邊では鎮江が名物である。

支那には随分蟹の好きな人があつて、出盛りになると、蟹食ひ競争が初まる。彼等は銀製の耳の垢取のやうな七つ道具を用意して、入り組んだ骨組の中から、キレイに身を弾き出し、瞬くまに十や二十平けてしまふ。なるべく身を残さずに早く食べるのが勝ちである。清の遺老清道人李梅庵は蟹が大好物で、愛而近路の小有天で、一時に百の蟹を平けて百蟹仙人の仇名を取つた。小有天は其後三馬路に移り、氏の揮毫は今も其看板に残つて、軒頭に高く掲示してあるが、あのやうに書體の顛えてゐるのは、恐らく蟹の中毒ではなからうかといはれてゐる。

火 腿

火腿は支那のハムである。普通カチ／＼に固まつてゐるから、熱湯で表面の汚れをよく洗ひおとし、これを適宜の大きさに切つて皿の上に載せ、蒸籠に掛けてよく蒸す。蒸し上つたら、薄く切つて客膳に出し酒の肴とする。これは保ちのいいもので一旦蒸したものでも、切らずに置けば、盛夏の頃でも中々變質しない。

火腿は又調味料として日本の饅節のやうな使ひ方をして、ソツプのダシを取つたり、他の物と一緒に交ぜて煮たり、或は花かつをのやうに細かくして菜の上にかけて出す。

生豚や雞、家鴨のソツプには、おの／＼固有のなまぐさみがあるが、火腿を加へると其癖を抑へ、

一種引締まつた味はひとなる。年久しくて火腿松栢の味あり、といふのは其種の味である。

火腿は昔火脯と稱し、火田以來追々工夫した肉類貯蔵法の一種であるが、後ちには製法が變つて來てぢか火に掛けず、天日に曝すやうになつた。

それで現在火の字を用ゐてゐるのが疑問になり、色が赤いから火腿と稱するのであるといふ説もあるが、矢張り火脯の火の字を残し傳へたと見る方がよからう。

火腿は祝儀、無祝儀、或は神前の供物として缺くべからざるものである。

二三人の男が田舎路に猪の片脚と酒壺提けて、遙に廟を見渡したところなどが、俠盜傳の挿繪にあるが、これは彼等が神前に義を結ぶ場面で、その猪の片脚が火腿である。

或貧乏人が始終菜ツ葉や骨ばかり舐ぶつてゐるが、人前に出る時にはいつも火腿の油を手を擦り付けて行きうまいものを食べてゐる風を装つたといふ。あの油臭いあたぢけない匂ひも、支那人に取つては、珍味佳肴の富貴の薫りである。まつたく、長く支那にゐると、火腿の匂ひは親しむべきもので、此匂ひがないと、料理を食べても、なんだかもの足りない。

火腿はこれほど支那人にこびりついてゐる歴史的嗜好物だ。支那婦人の足の匂ひや頭の匂ひも、よく嗅ぎわけてゐると、火腿趣味だ。顔を洗つた洗面器の水も、猪のあぶらの泡沫が泛ぶ。何しろ子供のところからのべつに豚を食つてゐるので、肉體が豚だか人だか解らなくなつてしまつた。

火腿は北方では江蘇の如阜、南方では浙江の金華が名産地で、これを北腿、南腿といふ。一般に北

腿は毛が黒く、南腿は毛が白いので、一目見てもわかる筈だが、實際は北腿にも白いものがあるので、素人には見分けが付かない。しかし食べてみると、南腿は鹹い中に甘味を含み、身が締り、舌ざわりがすべすべして、一種蘭のやうな香氣がほのめく。北腿はこれに反して、いやに仇鹽辛く、咬むと滓がのこり、香氣も味もない。

金華は集散地であるから有名であるが、あながち金華ばかりではない、その附近の蘭溪、義烏、東陽から出るものはみな好い。こゝらの農民は貧富に拘らず、みな猪を飼つて、火腿製造を副業とする。猪の飼料は普通豆腐殻、酒渣、米糠、麥麩等であるが、火腿用の猪は米の煮汁を以て飼養する。おもゆは消化し易く榮養に富み、これを飲ませると、肉が軟くめき／＼と肥えて來る。

火腿の製法は、猪を屠殺して毛を去り、後足を腿の上から切り取り、長方形の缸の中に一かわづゝ入れては食鹽をふりかけ、だん／＼詰め込んで、一缸に凡そ百個ばかり入れて押漬けにする。缸底には必ず狗腿を一つ入れて置く。狗腿がないと味が出ない。さうして缸を密閉し二年を経過して初めて蓋を開ける。でないと普通の鹽漬豚と變りがない。又必ず寒中に出すのである。それでないと、長く保存することができない。

蓋を開けた後は皆取出して日に曝して十分干し固める。乾燥が終ると、腿の上部を半圓形に削り、市中の火腿の體裁にする。此削り屑は修腿肉と稱し、味も好く値段も安く腸詰の中味には持つて來いであるが、附近の人はこれを買つて多く煮出しにする。

南腿には茶腿といふものがある。これは茶の油を塗り付けてあるので、一層いい香味がする。又變質を防ぐためにもなる。

火腿は腿ばかり取るのであるから、其餘の肉はみな剩る。それが季節には非常な分量になり、一時に捌くことができないから、鹽漬にして干固める。これを風肉又は家郷肉といふ。紹興人が紹酒を呼んで老酒といふやうに、自ら愛する意味もある。又謙遜の意味もある。

金華の火腿を省略して金腿といふが、金腿でも上蔣の産が尤もい。上蔣は極々小さな村落で、此村の人は火腿製造に就て特別の秘訣を心得てゐる。其製品は色と香と味と三拍子揃つてゐるので、一般にこれを蔣腿と尊めてゐるが、残念ながら品物が少くて中々手に入れ難い。そこで蔣腿の商標を偽造する者があつて素人には眞偽の見分けが甚だ困難である。しかし印の押し方を注目すればよく解る。「上蔣」の横印の墨が深く沁み込んでゐるので、一寸見るとあるかないか、殆ど分らないが、よく見ると、ほのかに印があつて、拭つても削つてもなか／＼取れない。偽物は印刷が鮮明であるが、雑巾でこするとすぐ消えてしまふ。

南腿、北腿の外に、雲南の宣威腿（牛腿）及野猪腿がある。

野猪腿は色が眞黒であるが、味は中々上等である。しかし産額が少いから上海などへは減多に出て來ない。幸ひ色が黒くて賣れ口が少いから丁度間に合つてゆく。上海には大馬路の北萬有にこの野猪腿がある。

火腿は胃の薬だといふ。爪の部分は尤も效能があるといふので、かゝる廢物を喜んで買ふ者がある。値段も安く一元で三斤あまりもある。たゞ骨が多く肉が少いから、氣永に、しやぶらなければならぬ。骨までしやぶるとは驚くべき執著だ。日本で鯉節の尻尾を噛ぢる類であらう。

南腿は近頃外國にも出るやうになつた。もと／＼ハムに近いものだから、西洋人の嗜好に適するものであらう。輸出向は表面の煤けた部分をキレイに削り、足の爪を去り、紅緑の商標を貼つて油紙や錦紗に包んである。

澤國の水果

春から夏、夏から秋に掛けて日本であまり常食にされないものが、支那では盛んに販賣される。

先づ柿を單衣に更える頃には地栗が出る、地栗はくりではない、莖薺である。黒くわると和讀みにしてゐるが蕪蕪ではない。併し形はくわるに似て皮は剥がれ易く、水氣がたつぷりしてほの甘い。さく／＼として滓は残るが、喉の渴きを止める。黒い皮を剥ぐと眞白な身が出る。其身を四つ五つ串刺しにして青い菜ツ葉の上に並べて賣る。丁度黒服を脱いだ白服の人が青葉の中を散歩してゐるやうな氣分だ。

オー、チーカデリオ、ナンデ、デリオ、デリリオ、デリオ、

いかにも音楽的な賣聲である。

支那では蓮根を藕ゴウといひ、生で食べることが多い。皮を剥くと色が眞白で、美人の腕などにたとふ。これもさくくしてほの甘い。藕色といふのは、蓮根の皮の色で、女の夏の著物にふさはしいものである。

菱の實は青いのと紅いのとある。紅いのは女の纏足の鞋の形によく似てゐる。これを紅菱角オシラシゴといひ、年中かこつてある。菱の實を食ふと尻が盛んに出る。其尻はカーバイトのやうな匂いで、栗や芋の尻と全然匂がちがふ。火をつけたら燃えるかもしれない。そのほか甘蔗の莖を咬み、或は搾つて汁をのむので、大道商人でも木製の壓搾器などをなへて置く。

以上は江南澤國の産で、菱を除いてはいつれも喉の渴き止めである。

秋になると自然と山の物が出て来る。浙江の銀杏に初まつて河北の栗、福建の橄欖で畢る。

銀杏は年の數だけ食べるもので、それ以上食べると毒になるといふ。鮑の貝殻でかきまぜてゐるが、毒消しの意味があるらしい。とにかく一種の亢奮性があるので、熱白果實は、「食べて御覽、赤ん坊ができる。」などと賣聲を上げて女中をからかふのである。

山楂子などは日本では食べる者もないが、支那では串に刺して蜜をぬつて食つてゐる。南京の清涼山は舊曆七月末、地藏菩薩の誕生日とか言つて、老若男女が參詣する。おみやげは山楂子の珠數と青いイガ栗である。その頃から栗がそろく出初めるのだ。

栗は昔から河北が本場で、陸羽の茶經に引いてある傳巷七誨に「蒲桃、宛奈、齊柿、燕栗、恒陽黃梨、巫山朱橘、南中茶子、西極石蜜」などと並べてある。

上海の栗は「天津良郷」といふ看板を掛けてあるのを見ると、矢張り燕栗にちがひなからう、と思ふのが至當であらう。出初めは軟くて旨くもないが、中秋頃からだんくよくなる。砂の中に砂糖を入れて焼く。かうするとカラくになつて、澁皮がよく剥がれる。日本でも甘栗といつて今は珍しくもないが、あれはやつぱり支那でなければ氣分が出ぬ。

秋風が吹くと砂糖の焦ける匂がする。さうして蓄音機の悲哀な聲が聞える。それまで晝間は太陽を食ひ、夜は月を食つてゐる素寒貧も地栗のやうな裸一貫ではゐられなくなり、どうしても甘栗のやうな厚い著物を著なければならぬ。その著物は算盤勘定の高いおぢさんの高い壁の中に藏まつてある。これが即ち上海の諺「糖炒栗子、難過日子」だんさりーつ、ねーくーいーつである。秋の悲哀、彼等の本音を吹いたものである。併し世間はそんな悲哀な者ばかりではない。

その頃から街の電燈はだんく光つて来て、百貨店にかやかしい旗が揚がる。何の苦勞も知らぬ小姐、太々は自動車を横付けにして秋の仕度に急がしい。中にも月餅ユエピンはこゝ數日間に非常な勢で轉々する。それもその筈、夏から秋にかけて單一に味ははれた果物は、みんなこの月餅の中に藏まひ込まれてあるのだ。月餅は果物の總會である。封神演義である。紅樓夢である。その複雑な味は、迎も日本人に解るわけではない、たゞのあんこと思つた中には冬瓜の砂糖づけがある。西瓜の仁がある。杏子

の仁がある。胡桃がある。龍眼がある。棗のすりみがある。橄欖のすりみがある。玫瑰の花がある。其他ハム、家鴨、雞、豚肉を入れたものさへある。さうして油でよく炒りつけてあるから、いつまでも保つのである。油、砂糖、鹽は單なる味付けではなく、保存のために利用されてゐるのである。

橄欖は澁い、かういふ澁いものを子供が喜んで食べるのだから不思議だ。けれど咬んでゐる中にはんのり甘味がさす、その甘味を得るために、前の澁味を辛棒する點は、中々進んだものだ。色は深綠色、いかにも福建の山奥を想像する、生のほかに鹽漬、砂糖漬もある。茶の相手にいい。これは一層寒くなつてから出るので、前の太陽を食つてゐる先生も、もう度胸を据えた頃だ。

種は上下尖がり非常に固いので小姑などの邪魔物にたとへる。しかし其形が元寶に似てゐるので、正月、茶の中に入れ、縁喜を取つて元寶茶といふ。

橄欖は喉の薬になるといふ。喘息の薬は前の地栗と白茶の汁を搾つて冬至の日に飲んでゐたのを見た。

田螺

田螺は支那語で螺螄ボウイといふ。螺螄は觀音様の化身であるといふので、佛菩薩の信仰者は決してこれを食べない。これには左のやうな傳説がある。

むかし貧乏の百姓があつて成年に達しても妻を迎へることができず、毎日田を耕して家に歸つて自分で飯を炊いてゐた。或時いつもの通り歸宅して飯を炊かうとすると、鍋の中にチャンと御飯が出来てゐた。彼は不審に思ひながら飯を濟まし、屹度誰かの悪戯だらうと、格別氣にも留めず、午後から又仕事に出た。ところが二日も三日も同じやうに飯が出来てゐるので、彼はいよく不思議に思ひ、或日仕事中途で歸り、家の側に隠れて様子を見てゐると、臺所から煙が上つて美しい少女が立ち働いてゐる。丁度飯が出来た頃に、少女は水缸の邊でふと姿を消した。そこで彼は何けなく表から這入つて、水缸の蓋を開けてみると、底に一つの大田螺が沈んでゐた。彼は思ひ當るところがあり、次の日炊事の煙があがると、すぐに馳け付け、水缸の中から田螺の殻をつまみ出して匿した。少女はお宿を失つて閉口しそのまま彼の妻女となつた。幾年か過ぎて一人の子供が生れた。又幾年か過ぎてその子供は父の手助けをするやうになつた。父は機嫌のいい時にはいつも歌を唱つて田を耕した。

「田螺嬢、田螺嬢、田螺が子を生んで田が出来た。」と。

子供は或晩そのことを母に語つた。母親は笑つて父親に向ひ、

「あの田螺の殻を此子に見せておやんなさい」と言つた。

父は仕方なしに殻を出して見せた。母親はそれを取つて急に水缸の中に投げ込み、自分もその中

に跳び込んで姿を消した。それから永久に現はれない。

此傳説は浙江の永嘉地方で行はれてゐるが、述異記に類似の話がある。

「晋安郡（福建閩侯縣）に謝端といふ書生があつた。性來潔癖家で女色に馴染まなかつた。或時海岸へ行つて波濤の起伏を見てゐると、一つの大榮螺が打上けられた。大きさは一石の米が這入るほどであつたが、これを割つてみると、中から一人の美女が現はれ、

「わたしは天漢あまのかはの中の白水素女といふ者ですが、天帝がおんみの純正をあはれみ、わたしをおんみの妻におつかはしになつたんです。」と言つた。

端はこれを妖怪變化の者と思ひ込み、急に叱つて退けた。女は嘆息して雲に上つて立去つた。

田螺も榮螺も殼の形が觀音様の髻に似てゐる。ゆゑにこれを觀音様の化身と稱し、子が欲しい女は食はない。觀音様は性の神様である。

貝殼の中に赤い腹掛をかけた美人の像は、無錫人形にも、新粉細工にも、色刷の版畫にもある。さうして天地開闢などといふ古代の神佛が數々現はれる芝居には、女形の役者が、宛らエンゼルの如く、大きな貝殼を背負つて半裸體で現はれる。何のことが解らぬが莫迦に濃艶な神様だとおもつた。これが

が海岸地方から起つた傳説、性の神様の本體であつた。

大 刀 會

かつて江蘇の溧陽縣下を荒し廻つた大刀會は、一種宗教的迷信があつて符咒を吞むと、鐵砲玉が當らぬといふ。彼等は討伐隊の銃列の前に大鉞のやうな大刀を振り廻し、遮二無二突進する。討伐隊は一齊射撃をする。彼等の手足や胸にドシ／＼弾が當る。あたりまへなら將棋倒しになる筈だが、彼等の身體は鐵石のやうで、いくつ弾を受けてもすん／＼進んで来る。討伐隊は呆氣に取られて見てゐると、其時もう鉞のやうな大刀が討伐隊の頭の上に来てゐるのである。

實に不思議！ 神の力だ！

討伐隊は鐵砲かついて總退却。

これが即ち符咒の靈驗である。

かういふ不思議な符咒は、どこから授けられたのであらう。恐らくは天上の鐵拐仙人でなければ、發明することができないだらうと想はれるが、やはり人間の發明で、しかも凍死しかゝつた或乞食の偶然の發見であつた。

寒國の乞食は飢餓と寒氣のために往々凍死することがある。彼等は一時凌ぎに硫黃湯を飲むが、こ

れは命の惜しい人間のすること、命の惜しくない人間が或時、紅砒を飲んで自殺を計つた。彼は一度嘗めてから急に命が惜しくなつた。この飢ゑとこの寒さは眞實つらいことではあるが、それでも未だ死ぬより増しだと思つた。さう想ふと悲しくなつてわー／＼泣き出した。泣いても追つ付かない。一旦服んだ上は、命が助かるわけがない。ところが不思議や死ぬかと想つたその體は非常に元氣付き、寒さにめけず働けるやうになつた。彼はいいことを知つたとばかりで、いつも元氣の衰へた時には此藥を嘗め、仙人になつたやうな氣持がした。或時張天師の護符を見て俄におもひつき、この藥を溶いて、えたいのしれぬ文字を書き、病人に服ませた。それが本統によく利いたので、彼は忽ち活神様になつた。活神様の許には、やがて大勢の宗徒が集つた。宗徒は此の活神を奉じて大刀を振廻した。さうして村から村へ行つて、病氣に罹らぬことや、鐵砲玉を怖れぬことを吹聴した。信者はますます多くなつた。さうして遂に大望を起した。これが大刀會の本相である。一説には初め小刀會といつてゐたが、保衛團がこれを防ぐために大刀會と稱して對抗した。即ち大は小を壓するといふ意味で、迷信に對する迷信であつた。又紅槍會といふのは、彼等の領袖が紅纒の附いた槍を持つてゐるからである。その紅纒は處女の經血で染めたものであるといふ。恐らく陰陽轉換説を固執してゐるのであらう。

茶 館

朝、目を覺ますと顔も洗はずに茶館にゆく。茶給仕は洗面器の中に、熱いお湯を入れて、タオルとシヤポンを添えて出す。顔を洗つてゐるうちに、顔馴染が集つて来る。彼等はいつともきまつた席に著いて、町の噂や世間の取沙汰をする。新聞の無い時分には、こゝが一種の通信機關で、随分遠方の話までも迅速に聞き傳へて来る。もとより無責任のお喋りではあるが、火の無いところに煙はあがらず、針小棒大や、とんちんかんの中に慥かな事實も含まれてゐる。茶館は謠言の發生所として政治談を嚴禁した時代もあつた。彼等は茶館にゆけば何かしらニウスがあるので、われ／＼が今日新聞を見ずにはゐられないやうに、彼等は茶館に行かすにはゐられなかつた。顔馴染の者に對しては、自分の妻よりも昵懇であつた。妻のない者は、茶館を家庭同様に思つて、睡眠以外はたいい此處で暮した。茶館は又商人の取引所に用ひられた。地方から買出し又は賣込みに來た人などは、其道筋の茶館に行つて、見本を出したり、見本を見たりする。値段はいくらだ。これ／＼だ。茶館は日本の貸席同様のものであるが、出入が自由で、席料が要らないから、大へん便利である。取引所のやうな仕事はたいてい午前中に片付けて、午後から一般遊覽客の足溜りとなり、焼麥、饅頭のやうなお茶受を備へ、或は講談、琵琶、音曲のやうな催しものがある、その頃から女も交じつて、晩になるとますます／＼増加し、露骨に客を啣へてゆく者さへある。

茶館は又裁判所にもなる。もちろんわたくしのことではあるが、何かいさかひ事があると、茶館へ行つて善惡をきめる。これは必ずしも善を助けるのではなく、寧ろ惡を助けるのであるが、見す／＼

やられるとは知りながら、公義の下に批判して貰ふとおもふ量見があるから、いやおうなしに出てゆく。これを講茶といふ。理窟に負けた方は、其場に居合せた客の茶代を全部負擔する。或はこれをキツカケに斬つたり張つたりする。そんなことをする前に警察に訴え出たらよささうなものだが、それをなし得ないのは、人民は人民だけで治めるといふ腹があるのである。表沙汰にすると、非常に手數がかゝつて暇をつぶす。又お上みのお役人の判きも甚だあてにならぬからである。

茶館は右のやうにいろいろのことに利用されてゐるが、その場所に依つて集る人の職業がちがふ。たとへば船着場の茶館は船頭や輕子などが多く、又旅客の足溜りにもなる。

市場の茶館は田舎から野菜や雞を運んで來た者が休んでゆく。市を畢れば市場の若者などが集つて無駄話をしてゐる。又開市中には買物に來たコツクなどが、先づ此處で悠々お茶を飲みながら、主人の讒訴などを交換して、それから買ひ出しをする。彼等の中にも各々派別があつて、支那公館派とか外國公館派とか、いふやうな仲間が自然出來て、それ相應の交際ひをしてゐる。上海のボーイや阿媽が一般に金使ひの荒いのは、みなかういふ所で棒先きを切るからである。

遊覽地の茶館は自然旅の人が多い。支那の宿屋は構造が窮屈で風通しが悪く、晝間陰鬱で不愉快であるから、目が覺めるとすぐに外へ飛び出して茶館にゆく。そこで簡単な茶食で朝飯をすまし、愚圖愚圖してゐる中に、附近のゴロツキや遊野郎が集つて來る。小雜貨、菓子煙草の賣子も來る。床屋もゐる。人相見もゐる。新聞を貸す者や、煙草の火をつけることを仕事にしてゐる者さへある。

蘇州の玄妙觀は淺草の觀音堂に似てゐる。その境内の或茶館では土地の者は一定の桌を占め、先祖代々同じ位置に坐つて茶を飲む者がある。さういふ者は鳥籠など提げて來て、茶館の軒に掛け茶を飲みながら鳥の聲を聴く。親が子孫に遺言して代々あすこで茶を飲んで呉れといふのである。この種の茶館はたいして市井の雜踏の中で、經營者は土地の顔役などである。

名所古蹟にある茶館は、寺廟の道僧などが僧衣を脱して茶給仕をする。位置は景勝を利用して見晴し好く、茶館としては尤もこのものものである。南京の鷄鳴寺、清冷山、無錫の惠山、蘇州の天平山、杭州の吳山などは此種のものである。

取引に利用さるゝ茶館は、一時上海、漢口、香港などで極めて隆盛であつたが、今は極めて稀れである。

野鷄が客引に出る茶館は、以前は上海の四馬路に軒を並べてゐたが、近來、人は遊戯場の方に足を向け、それに應じて彼女等も自然その方面に進出する。

茶館は地方によつて多少の相違がある。廣東の茶館は桌上に菓子を滿載し、なほそのうへにも蟹餃(蟹肉入りのお柏) 燒麥、饅頭などを賣りに來る。

饅頭は豆沙包子(赤豆餡入) 糖包子(砂糖、南京豆の粉末、或は白胡麻の餡入) 猪肉包子(ぶた饅頭) 大包(火燒、煤で玉子、筍、椎茸などを餡に詰めた大饅頭)

とにかく菓子の種類の多いことは廣東が第一で、菓子屋の二階がたいして茶館になつてゐる。(菓

ヤマト

子は在來の支那菓子もあるが、西洋菓子の影響を受けたものが甚だ多い。恐らく亞米利加移民などが製法を傳來したのだらう。

お茶は福建産の紅茶、武夷、烏龍及花を加へた包種などを用ゐる、綠茶は矢張龍井であるが、これにも香氣の高い花朵を多く加へる。そのほか古鎮遠と稱する眞黒な茶もある。貴州鎮遠産である。香港、廣東では晝飯を用ひず、茶館へ行つて菓子類を食ふ。

上海の茶館は廣東派を除いては、西瓜子、南瓜子以外にあまり多く食べものを出さない。お茶も安徽の六安、浙江の龍井などであるが、雨前以下の下等品である。

鎮江、南京では餃子（肉入のお柏）包子（肉入饅頭）の外に乾絲を賣る。乾絲は豆腐の皮をほそく切つてソツプで味をつけたものである。上海でも鎮江料理屋老半齋などでは朝の内臨時に茶館を開き、此乾絲を出す。これは本來その料理屋に馴染の客が集るのであるが、誰が行つても斷ることはない。南京でも秦淮には此風が行はれてゐた。（又上海の廣東料理屋でも午前中茶館を開く家が二三軒あつたから、これは地方的の風習でなく、店の得意に對する便宜上行はれるのであらう。）

別項で述べた通り、北京の茶館では、茶の葉も急須も持参してゆき、たゞお湯だけさして貰ふ。もとく茶館は會合所、休憩所であるから、たつた一杯のお茶を取つて一日坐つてゐても文句はない。それが日本では迎もできないことである。サイダーはいかゞです。ビールも御座います。お鮓、蜜柑のやうなものも取揃へて御座います、と待機の姿勢で見つてゐられたら、うるさくたまらない。支那の茶

館はそのものを食べても食べなくともいい。又よそから買つて來たものをそこで食べても差支えない。ポ―イは急須に湯をさすのと、顔拭きを出すのが役目で、場合によつたらお使までして呉れる。

支那人が東京へ來て一番困るのは、茶館のないことだ。或留學生が神田から上野の方へ散歩して立寄る所がなく、又元の神田に引返して知合の支那料理屋に行つて茶を飲まして貰つた、といふ話が或雑誌に出てゐた。その時分には東京に未だ茶房といふものがなかつたが、よしあつても茶房は茶館のやうに安上りでなく、間取も密室的で開放的のところがなく、かつ給仕が別嬪であるなどは、彼等をして何となく居づらからしめ、いつまでもポカンとしてゐられないのであらう。日本では公園のベンチ以外には何處へ行つても落着いてゐられないと支那人は言つてゐる。これほど人口の多い東京が上海よりも淋しく感じるのは、内を外にしてゐる人が割合に少いからであらう。

茶館は明代の市井小説には少しも出てゐない。茶館で好きさうな場面が居酒屋になつてゐる。

儒林外史には吳山の茶館、南京の茶館などが記されてゐるが、いかにも小規模で、今のやうな大集會所ではない。茶館取引がいつ頃から初まつたか知らぬが、恐らく道光以後のことであらう。さうして茶館の全盛期は阿片が租界で盛んに行はれた光緒年間で、茶館が煙館を兼ねた時代である。その頃は大廣間の周圍に多數の榻を設け、阿片をのみたい者はそこに轉つてのみ、お茶をのみたいものは眞中に並べてあるテーブルの前に懸掛けて茶を飲んだ。阿片を禁じた後にも青蓮閣などはその設備が残つてゐた。

そのほか雅座といつて、美しい彫琢の格子で別々に部屋をしきり、一月或は二月と買切りにして、毎月そこに來て、お茶をのみ阿片を吸ひ、枕元に紙幣束を置いて商取引をした。しかし歐戦後上海に取引所ができてから、茶館での商取引はだん／＼少くなり、今は殆どなくなつた。さうして茶館は専ら遊覽客の足溜りとなり、だん／＼百貨店の屋上などに移つてゆく。

ちーはー

ちーはー、といふものは、わたしの子供の時分に東京横濱で随分流行つたものだが、何しろ人體の各部に三十七の人名を割當て、宛ら舊醫學の急所圖説のやうなものや、或は十二支まがひの動物や方位に割當てた解説書があり、一見甚だ玄妙不可思議の感を起すものである。

ちーはーを買ふ者はゆうべの夢見によつて、蛇だの鼠だの田螺だの、といふことを考へる。女が恥も外聞も忘れて、ゆうべ×××の中に蛇が這入りましたから、「太平」を買ひましたなどといふ。丸いものが二つ見えましたから「元貴」だらうと思ひますなどといふ。「元貴」は男の隠しどころである。其外、見徳などといふことを始終注意してゐる。今あすこに鼠を見たから「必得」を買ひませうといふ。かういふものに凝り初めると、始終變な夢ばかり見てゐるらしい。釣の好き人は人の顔が鮎に見えたり、鯊に見えたりするさうだが、ちーはーの好きな人は、日常の銷事を何もかもちーはーに割當

て考へる。だん／＼それが亢じて來ると、荒野に曝してある新佛の棺桶の前へ行つて寝たり、或は死人の頭を蒸して拜したり、或は人間の生血で練り固めた人形を作つたり、いろ／＼恐ろしいことが行はれる。況して女は迷ひの深いもので、夫の金を使ひ込み、或は無理な借金をして子供を質に入れたりする。さうして結果は、毒藥自殺など企てるのが往々ある。

上海ではすつと前から取締つてゐるが、これは他の博奕とちがつて迷信を加味してゐるからなかなか根強い。一寸斷つて置くが、ちーはー、といふのは日本人が用ゆる言葉で、支那人はこれを花會といふ。

花會の堂元は大筒ダイドンと稱し、毎日二回當り籤を發表する。即ち午前中火官カウカン(鶏)が出れば午後は安土アソト(狐狸)を出すなどといふことである。これは一地方必ず一つの堂元に限られてゐるから、火官が出れば上海全市みな火官と知れ渡るのである。

此大筒は多大の資本金を擁し、要所々々に附届けがしてあるから、其筋の手入れもなく、社會の底に深く根を張つてゐるので、なかなか潰れつこはない。ところが爰に聽筒テイドンなるものが現れ、株ののみや仲買と同じやうな行動をして親元を食ふ。だいたい日蔭の仕事だから、堂元もこれに對して何ともいふことができない。そこで双方の間に種々の權謀術數が行はれるのであるが、結局資本の少い聽筒は其筋の手入があつたり、いろ／＼のことで大筒の勢力に壓迫されてしまふ。

ちーはーの教科書「致富全書」を見ると、一番最初に觀音會クワンカイが出てゐる。これはあとで添えたもの



らしく、迷信をそゝるため、観音様を表看板に立てたのである。次に蟒袍を着た王様の繪姿がある。定國林、太平、名は地、又の名帯、會稽の人、梁武帝の曾孫、家大に富み、日本國王に封ぜられ、太平と號す。在位三十五年、先づ賊首となり、後ち花會に歸し神となる云々と。

帝の上に艸冠を加へ、それが日本國王に封ぜられることも妙なことである。恐らく明末の遺臣が軍費調達のため、かういふ變なものを案出したのかもしれない。

ち一は一の起原に就ては、左のやうな傳説がある。

むかし河南の洛陽に橋がなかつた。兩岸の人民は非常に不便を感じ、何卒こゝに一つの橋あれかし、と祈願をこめた。玉皇大帝は憐れに思し召され、觀世音菩薩を呼んで橋の建造を命じた。觀音様は經費の出所がないので大に閉口し、いろ／＼考へた末、自分の美貌を利用して船に乗り、誰でも銀錢を投げて我身に打當てたものがあれば、其人の妻になるといひふらした。何しろ三十二相も揃つてゐる觀音様が美装を凝らして船に立つてゐるのだから、人民は出来る限りの工面をして、我れも／＼と投げつけたがな／＼思ふやうに當らない。其時一人の乞食道士が現はれ、薄ぎたない胴巻の中から、たつた一つの銀錢を取出し、觀音様を目蒐けて、ゑゝやつとばかり投げ付けると、それが上でもなく下でもなく、丁度胸の中程に當つた。觀音様は不思議におもつて乞食道士をよく見ると、それは誰れあらふ、道教の祖師呂洞賓であつた。觀音様は眞赤になつて腹を立て、

「わたしが人民のためにかういふ方便をしてゐるのに、お前が邪魔すれば仕方がない。わたしは潔く身を引くから、萬事引受けて下さい」といふまゝ姿を消した。

呂洞賓はしまつたとおもつたが、もう追付かない。かうなると責任がある。いやでも應でも橋を造らなければならぬ。そこでありたけの智慧を搾つて、ち一は一を案出し、當籤が三十倍の割戻しといふことで賣り出した。これは前の銀錢とちがつて、銅貨一枚でも賭けられるので、所の老若男女は朝に晩に、お金の出來次第買ひ取り、瞬くまに莫大の金が集つて、さしもの架橋工事も容易に完成した。

この話は佛教に對する道教の手前味噌であるが、有産よりも無産を覗つてゐるところに道教の強味があるのである。

ち一は一は初め、三十四名の古人の名を連ね、これを三十四門と稱し、一門を買つて當つた者には三十倍の割戻を添えた。道光年間浙江の黃巖地方で行はれたのは、それであつたが、今、上海、福建、廣東地方で行はるゝものは、總數三十六門、その門名は、稗史中の人物を焼きなほしたやうなもので、それ／＼荒唐無稽の傳記を有し、それ／＼官位、階級、職業を有し、それ／＼鳥獸蟲魚の性質を有し、それ／＼十二支及人體中の部位を有してゐる。

觀音會 (別格、佛、額、)	子	林太平 (皇帝、飛龍の精、額)	子
張萬金 (乞食、金持、蛇精、左右掌)	子	林良玉 (皇女、胡蝶の精、額)	丑
陳吉品 (宰相、綿羊精、左右下膊、)	丑	李日寶 (探花、啞瞽、龜の精、胸、)	丑
陳攀桂 (榜眼、田螺の精、左耳、)	寅	李漢雲 (將軍、牛の精、胸、)	寅
吳占魁 (狀元、白鰲精、左右股、)	寅	陳逢春 (狀元、喜鵲の精、左耳、)	卯
李明珠 (道姑、蛤蜊の精、胸、)	卯	朱光明 (軍師、馬の精、左右脛、)	卯
陳人生 (探花、白鵝精、左右上膊、)	辰	鄭天龍 (僧、石の精、左右肩、)	辰
翁有利 (漁父、眼疾、象精、左手指、)	辰	陳安士 (尼、狐狸精、頰、)	巳
劉井利 (道士、龜の精、左手指、)	巳	鄭必得 (將軍、驕夫、鶴精、左右肩、)	巳
陳日山 (乞食、鴨の精、左耳、)	午	雙合同 (妓女、白鴿精、左右上膊、)	午
黃坤山 (將軍、虎の精、跟、)	午	張三槐 (元帥、鬼、白猴精、右耳、)	未
羅只得 (屠夫、小犬精、左右足甲、)	未	宋正順 (皇帝、猪の精、下腹、)	未
張九官 (癩疾、赤犬精、右耳、)	申	周青雲 (轎夫、鶴の精、右手指、)	申
馬上超 (一品夫人、飛燕精、左右股、)	申	田福榮 (和尚、犬の精、下腹、)	酉
蘇青元 (狀元、鰲魚の精、右手指、)	酉	張火官 (員外、火雞の精、左右掌、)	酉
王志高 (國王、蚯蚓の精、左右脛、)	戌	方茂林 (和尚、蜂の精、下腹、)	戌

張元吉 (宰相、乞食、鹿の精、右耳、)	戌	張合海 (奴僕、蝦蟆精、左右下膊、)	亥
趙天申 (漁父、金猫精、跟、)	亥	龍江祠 (龍神、蜈蚣精、臍、)	亥
徐元貴 (乞食、海老精、左右足甲、)	中央		

右の内、觀音會は加へず、ゆゑに三十六門である。觀音會といふのは、觀音様が考案した無盡といふ意義で、前記の傳説を證明するものである。

三十六門中、二門は毎日午前の開卷前に衆人に示し、その日の棄て籤とする。これを門將といふ。門將は何を出さうとも堂元の勝手だが、通例、前二日間の當り籤を用ゆる。同じ籤の續出を嫌ふのであらう。そこで三十四門の中から買手は随意に一門を選出し、當れば二十八倍の割戻しを受く。

この賭博は麻雀のやうに智力を用ゆるのでもなく、牌九のやうに度胸ためしをするのでもなく、ひたすら迷信に踏み迷つて、夢見判断や見徳及むしの知らせに依頼し、チビリく〜と搾り取られ、つひに賭博中毒症に陥り、その弊害の及ぼすところ、阿片によく似てゐる。全く世界に類例のない奇妙な賭博である。

なほ致富全書には左の如なことが記してある。

林太平、號豐年、飛龍の精、太液蓮。

夢に太歳に撞る。兩本の旗竿。六十四鐘。玉子を食べて鏡を見る。兩肩に刀傷きり。五穀豊登。刀槍庫に歸す。馬を南山に放つ。夜戸を閉ぢず。城門大に開く。海波をあけず。萬國來朝。暗龍天に上る。平口の花瓶。平洋の樹木、船蛇盤山。久しく旱して雨に逢ふ。麒麟出現。秦叔、寶馬を買ふ。人、褲を穿いて仰ぎ睡る。勝を得て銀錢甚だ多し。女將軍天下を平らぐ、富貴太平鐘。放尿。犬あり、廣野平洋に走る。兵あり、凱歌して朝に回る。田中稻生ず。兩頤饅頭を食ふ。牡丹花。蒼龍。花瓶。傘。蕃王。女王。柿を食ふ。家鴨の玉子。平野。

以上は夢又は見徳を説いてゐるので、かういふものを見たら、太平と判じ、その門名を買ふべしと教へてゐるのである。

巫山雲雨、陳安士、名は蓮、又の名は達、玉山の人、元貴の妻、半男にして女三分、容貌好し。豆腐店を開き、九官に強姦され、攀桂代つて冤を伸べ、九官を打殺す。後ち出家して尼となる。

陳安士、號隱者、狐狸の精、學士蘭。

夢に齋堂を作る。烏雲黑暗。地に背して計算をなす。暗の内に交情あり。白豆を磨く。尼姑喜捨を求む。婦女が帽子をかぶる。男鞋を穿く女。男ならず女ならず。吉字、口を除く。名士聚會、女人、精を洩らす。三姑六婆。男女分たず。家内安全。女あり、斗笠を戴く。兒童、關を過ぐ。男孕

む。佛堂に經を念す。男装の女。婦女相逢ふ。子を抱いて頭を剃る。人の強淫に遇ふ。蓮花、水を出す。死を吊する道姑。髪を剃つて尼となる。奉祝香火。人、暗路を行く。庵堂に隱居す。乞食婆。尼姑庵。水流れず。笠を戴く。豆腐。蓮花。道姑。太監。平肢(幼女の×)蓮の實。強姦。その他は略す。

寶 塚

昭和三年八月頃のことであつた。西太后の墓が兵匪によつてあばかれ、西瓜が出たといふ電報を見た時、私は何のことだか、サツパリ解らなかつた。其後詳報が這入つて、其西瓜は極めて上等の翡翠製であつて、時價何億といふ貴重品であることが傳へられた。さういふ寶物が國外に流出するのは、惜しいことだ。草を分けても搜し出し、是非とも國內の博物館に陳列して置きたいといふのが、當時沸騰した議論であつた。ところがこゝに西太后の棺桶の中には、西瓜に劣らぬ寶物が尙ほ澤山詰めてあつたことを確證する者が出た。

その人は李蓮英(西太后の最も寵愛せる有名の宦官)の甥の子に當る李營舟といふ人で、父の著書「愛月軒筆記」の中から、殉葬の寶物記録をめつけ出し、北京の北平朝報に投書した。此記録は李蓮英の手になる西太后殉葬寶物控帳から書きうつしたもので、尤も儲かものなさうな。

總體の價格は埋葬當時五千餘萬兩と算せられた。その内容は左のやうなものであつた。棺桶の底には珠寶を以てふちどつた金絲製の擦り箔の錦の褥があつた。厚さ七寸位。その上に、ぬひとりの花模様の絹の褥が一枚。

又その上に眞珠の褥が一枚あつて、佛像のぬひとりがしてあつた。

西太后の遺骸は其上に置かれ、頭は翡翠の蓮の葉に、足は玉製の蓮花の上に置かれた。

遺骸の衣装は、金絲に眞珠を綴つた五色の刺繡の禮服の上に、眞珠花模様の打掛けを着て、眞珠の帯を九重に巻いてゐた。又臀には眞珠貝の佛像十八個を置く。

以上は私人の手向けであるから、公けの帳面には載せてない。

さてこれからが大變なものだ。先づ身體の上には、陀羅尼經の覆ひを掛け、あたまには珠の冠を載せ、側には黄金佛、翡翠佛、寶玉佛、百八個並べ、足の左右には翡翠製の西瓜一つづゝ置き、其外甜瓜二つ、桃、李、杏、棗等の寶玉が大小二百個詰めてあり、又身體の左には玉製の蓮根が一本あつて、上に蓮の葉と花が出てゐる。右には珊瑚樹が一本あつて、其隙き間に寶石が一杯詰め込んである。さうしてその上に眞珠綴の網を張つて棺桶の蓋を仕掛けた時、何某公主が盒を持つて馳せ付け、眞珠の網を取脱つして玉製の八駿馬と十八玉羅漢を遺骸の左右に置き、そこで初めて蓋を閉ぢ殮が畢つた。愛月軒筆記の著者は、宣統元年中、此目錄を古物收藏家馬氏に示して値踏みをさせ、當時五千萬兩と計上されたが、今は何百倍になつてゐるかしかない。實に稀世の寶物揃ひで、西太后の遺骸は實に寶

浸しになつてゐたのである。

西太后の身邊には生前すでに莫大な寶物が集中した。それは太后の壽誕の日に、各省の總督巡撫が次々に参内し、宦官を通じて、ありとあらゆる珍珠至寶を献上した。しかし西太后は寶石何升とか眞珠何斛とかいふやうな平凡なものは、いかに高價に上つても眼にとめなかつた。彼女は官人に命じてそのまゝ封も切らず、藏まつて置かせた。或時某地の總督が寶石を纏めた衣裳を献上した。これには大分心を動されて一度手を通して喜んでゐられたが、それも二度と著なかつた。何しろ日清戦争後、海軍再建のため工面した二千萬兩を造園にふり向けて萬壽山を作つた位の贅澤屋だから、ちつとやつものものでは氣に入るわけではない。翡翠の西瓜は、彼女が夏日足のうらを冷やすために用ゐたものださうな。左に棺柩に入れた諸物件の値段表を記す。

第一號

宮中葬禮品帳簿には、此種の物は、いづれも第一號に列してゐる。

一、金絲錦被 製價八萬四千兩

これに綴ぢつけてある珠玉寶石類。

八分珠百粒、三分珠三百四粒、一分珠五百粒、六厘珠千二百粒。米珠一萬五百粒。

紅藍寶石四匁大塊十八個、小塊六十七個。

紫母綠石目方五分のもの二塊。

碧璽白玉二百三塊。

右珠玉寶石價格合計八十五萬四千二百兩。

一、敷物に用ゐた眞珠の簾。

目方五分の眞圓眞珠二千四百個、價格三十二萬兩。

繡の佛隊に眞珠を綴つた褥、製價二萬二千兩。

所用の眞珠は千三百二十粒。價格二萬二千二百兩。

一、枕として用ゐられた翡翠の蓮の葉。重さ二百二十五匁四分。價格八十五萬兩。(管舟云ふ。これは粵海道から進貢したもので縁の色つややかなる葉の上に、天然に生長した筋が現はれ、彫刻したものではない。今恐らく倍額出しても、手に入れることはできない。)

一、脚臺に用ゐられた碧璽の蓮花。重さ三百六十八匁、價格七十五萬兩。(管舟云ふ、近來碧璽の値段は非常に低落したが、それでもかういふ大きなものは、中々あるわけのものではない。捨賣にしても、十匁七百元。三百六十八匁で二萬五千七百六十元の値打がある。)

一、遺骸の身につけてゐる珠を綴つた打掛。ぬひとりの工賃八千兩。

所要の眞珠は大珠四百二十粒。中珠千粒。重さ一分の小珠四千五百粒。寶石大小合せて千三十五塊。價格合計百二十萬兩。

一、遺骸の頸に掛けてある大きな珠數(即ち朝珠)三掛け。内二掛は眞珠。一掛は紅寶石。價格合計二百四十五萬兩。

一、遺骸の身に著けてゐる玉石象篋十八子の珠鏡。

所用の珠は八百粒、寶石三十五塊、價格合計十九萬兩。

一、陀羅尼經の被。

綴ぢつけてある珠が八百二十粒。價格十六萬兩。(管舟云ふ。此被は某活佛(大喇嘛)の進貢したものの。)

一、珠冠。細工料五萬五十兩。

重さ四十匁の大眞珠一粒。價格千萬兩。(管舟云ふ。此珠は鷄卵大のもので、乾隆二十年、或官女が圓明園で拾つたもの。又一説には某國の進貢物といふが、後説の方が正しいやうに想はる。)

一、身旁にある佛像。

重さ八十匁の金佛二十七個。重さ六十匁の翡翠佛二十七個。重さ六十匁の玉佛二十七個。重さ三十五匁の紅寶石佛二十七個。價格合計六十二萬兩。

一、足の左右に一つづゝ置かれたる翡翠の西瓜。

青い皮、紅色の身、白い種、黒いすじなどがあつて、價格二百二十萬兩。

一、翡翠の甜瓜四個。

内二つは白い皮、黄色の種、桃色の身。他の二つは、青い皮、白い種、黄色の身である。價格六十萬兩。(營舟云ふ。此四つの甜瓜は絶品と稱せられ、今何十萬元出してもあるものではない。)

一、翡翠の桃十個(營舟云ふ、全體が桃青色で尖つたところが淡紅色)黄寶石の李百個。紅黄寶石の杏六十個。紅寶石の棗四十個。價格合計九萬五千兩。(營舟云ふ、尙ほ外に二つの白菜を添えてある。緑の葉、白い芯で、芯の上に一つの蛙が附いてゐる。葉の側には黄色の蜂が二つ附いてゐる。これは或王公の寄進物で帳面には載せてない。)

一、遺骸の左側には玉の蓮根が三本添えてある。表面には泥に模した灰色の汚點あり、蓮根から緑の蓮の葉と白い蓮の花が出て、黒莖薺一つ添えてある。價格百萬兩。

一、右側に珊瑚珠が一本添えてある。價格五十三萬兩(營舟云ふ、此珊瑚珠は紅色のもので、樹上に一條の櫻桃を繞らし、青い根、緑の葉、紅い菓實があつて、枝の上に一羽の翠鳥がとまつてゐる。これも天然の寶物である。)

一、其他隙き間に詰め込んだ寶珠の數は實に夥しい數に上り、重さ八分の大眞珠五百粒。六分の珠千粒。三分の珠二千二百粒。紅藍寶石二千二百塊。價格合計二百二十三萬兩。

一、覆ひの珠網に綴つた眞珠は、重さ二分のもの六千粒。價格二十二萬八千兩。

一、佛像四十八體、價格五萬二千兩(營舟云ふ。佛像は高さ二寸未滿のもので白玉製である。佛身佛足は白色、それに黄色の鞋を穿き、紅衣を着て、手に一枝の紅蓮花を持つてゐる。)

纏 足

纏足は上海では今見ることも出来ないが、奥地では未だなく盛んなもので、當局はこれが根絶法に就て一方ならぬ苦心をしてゐる。中にも山西の大同では亮脚會リヤンキョウカイといふことが行はれ、春から夏にかけて、或一定の日に女は美装して門口に立ち、裙はかまの下から纖々たる一對の鈎をほの見せ、浮氣男の鑑賞に供してゐる。鈎は纏足婦人の着用する先きの尖つた鞋を形容したのである。

亮脚會は初めは針仕事に勞かれた女が氣晴しのため門口にたち、己の足の纖少を誇つたものだが、いつしか、それが聯絡して一大團體となり、某太太審査の下に嚴密なる足の検査が行はれ、顔や姿は偕て措いて、足の小さな美しい者を美人とした。

これを聞いた當局は慌て、某太太の家長を喚び出し、懇々説諭の上罰金刑を申付けたが何が偕て、いかに法律が取締つても、これを美しいと想ひ込んだ女の心はなかく改まるものではない。あとからあとから纖々たる小脚の後繼者が現はれるので、當局も匙を投げ、しばらく取締りの手をゆるめて、むかし梁啓超が用ゐた天足會の規則を今様に改め、「纏足の女を娶らず」といふ標語を作り、各學校に命じて、男學生の胸の上に其徽章を佩用せしめた。又河南、陝西、甘肅地方では、尙ほ一層大袈裟な禁止法が行はれ、三省の民政廳長は放足處長を兼任し、處長の下に副處長、一二三科員といふ役人を

置いて、纏足の女を見付け次第、片端からお役所へ引きずり出し、脚布（縋帯形のもの）を解かせて大きな鞋をあてがった。これで下層民の方はどうやら片附けたが、深閨の奥に潜んでゐるお嬢さんや奥さん方に至つては、なかく手のつけやうもない。そこで芝居歌と太鼓五更調を作つて舞臺に掛け、一般に流行らせた。これは厳格な法律よりも餘程利き目があつたらしい。何しろ、朝から晩までうるさいほど諺はれて四面楚歌の聲を聞いてみれば、いかに纏足を好む女も積年の陋習を改めざるを得ない。

纏足禁止歌（京劇四郎探母替歌）

纏足の女は庭うちに坐つて考へてゐた。想へばこんな淺ましいことはない。わたしは籠の中の鳥だ。翅を展ばすことが出来ない。わたしは囚屋の中の人だ。縄目の辱を受けてゐる、わたしは南から來た雁だ。身うちに彈を受けてゐる。わたしは水を離れた魚だ。身動きもできない。想へば初め纏足の災害を受けた時、血は流れ骨は曲り、原の形を失ひ、二つの脚は瘦せ細り爛れ腐れた。何だつてお母さんは、あんな酷いことをして、可哀さうに抵抗することも出来ない子供の足を責め虐げ、片輪になることを納得させるのだらう。見れば見るほき情けない。……妾の生れつきの足は其纏足を取り除いても元のやうにはならない。——河南民政廳長薛篤弼作

纏足禁止五更調

一更の頃、月は東に昇つた。閨の中で溜息の聲が聞えた。女は小さな脚を抑へて母親を怨んだ。お母さんはむごたらしく、わたしの一生を傷けた。

二更の頃、月は明るくなつた。想ひ出してもぞつとする。四つ五つの幼い頃から、ずっと今まで、朝に晩に丈八の脚帯を締めつけ、涙の出るほど痛い思ひしつくした。

三更の頃、月は天のまん中にあつた。脚を包んだ女は全く役に立たない。歩くことも馳け出すことも、手桶を持つことも、仕事をすることもできない。強盜が來ても逃げ出すことが出来ない。

四更の頃、月は傾いた。思へば思へば腹が立つ。媒人の話では嫁入口はお断り、足が臭くて人前に出せないといふ。

五更の頃、月は西に落ちた。臭氣紛々たる足帯を一巻き 巻きほどいてみると、天の與へた美しい足は、今や菱の實のやうにひねかたまり、骨が歪んで畸形になつた。——陝西廳長鄧長耀作

纏足の禁令は清初すでに行はれたが、その目的は風俗の變更であつて、實質そのものの弊害を認めただけではなかつた。清は申すまでもなく、異種族の侵入者であるから、大多數の漢人を制御する必要上、風俗の變更に意を注ぎ、民心を一變させるため、男子に辮髪を強ひ、滿洲服の着用を強ひた。ゆるに清最初の嚴令は、「生降、死不降。老降、少不降。男降、女不降。」であつた。即ち元服以後の男

子は凡て滿洲風俗に従はねばならぬが、女子供は舊風俗でも差支えないといふことである。さはいへ女の足に至つては、餘りに相異が甚だしいので、康熙元年詔を發して、女子の纏足を嚴禁し、違反するものは其父母家長を罰した。當時の大官中に、「先づ臣の妻から放足して大きな足に致します。」と上疏する者があつて、世間の物笑ひとなつたのは、纏足をあたりまへのことだ、と思つてゐたからである。世間一般がさういふ風だから、皇帝の力も遂に施しやうがなく、康熙七年王熙の上奏を容れて解禁したが、其後滿洲族の間にも行はれて來たので、乾隆年間たび／＼嚴令を下してやうやく滿洲人のみをくひとめた。此時も纏足の醜惡や弊害を感じたのではなく、征服者が被征服者の風俗を眞似ることは、朝廷の威信に關するとおもつたからである。

纏足の弊害を認めたのは、西洋人が初めだ。道光二十二年の南京條約以後、彼等は内地に入込み教會を建て學校を設け、纏足を譏諷し、續いて基督教徒の間に種々の運動が行はれ、新教育を受けた支那人は、やうやく纏足の弊害を自覺するやうになつた。

光緒八年康有爲が廣東で不纏足會の設立を計り、其弟廣仁によつて初めて天足會が成立つた。これが自覺的放足運動の初まりであつた。上海の放足運動は、日清戰爭の刺戟によつて、女子教育の必要を感じ、梁啓超は其著「變法通論」に「纏足をやめなければ、中國の女子教育は絶望である」と説き、「纏足は誰れしも好きこのんでする者ではないが、これをしないと嫁入することが出来ないからである。」と察し、光緒二十二年天足會を設け、一種の結婚會員を組織した。その會則を見ると、「入會者

は今後出産の女兒に一切纏足せしめず、又出産の男兒は決して纏足の女兒を娶らず、但し會員の子女にして現在成年に達した者は暫く舊慣に従ひ、次の代を待つ。」とあつた。

當時滿人以外の女は皆纏足してゐたので、其成功を待つのは、恰も植木の苗を植ゑるが如く、隨分氣永のことであつた。現在山西、河南、陝西、甘肅、寧夏、青海地方で同じことが繰返されてゐるのを見ると纏足の陋習もなかなか根強いものである。

なぜそんなに根強いかといふに、最初の出發點が美を求むるためであつた。纏足の起原は、諸説の一致するところに據ると、

南唐の頃、李後主の宮中に宵娘といふ舞の上手な女があつた。李後主は彼女の舞を見るために、高さ六尺の金蓮を作らせ、珍寶を飾り纓絡を懸け、その中に紫の瑞蓮を設けた。宵娘は帛を足に巻いて新月狀に反らし、白い襪を穿いて蓮の中で舞つた。その姿がいかにも華奢で美しく雲を凌ぐやうでもあつた。

これを見た宮女はみな宵娘の足の小さいのを羨んだにちがひない。そこで上流社會の間にも流行したが、宋元までは未だ全般に行はれなかつた。元の伊世珍の瑯嬛記に、

本壽その母に問ふて曰く「富貴の家の女子は、必ず纏足するは何ぞや」その母曰く「われ之れを聞く。聖人、女を重んじ、これを輕擧せしめざる也。それゆゑに足を包み、居るところ、閨闈の内
に過ぎず、出でんと欲すれば帷車の載あり、足をつかふことなきなり。

この説明を見ると、纏足は富貴の家の婦女に限られ、女子訓戒の目的を以て行はれたことになつて
るが、これは人情を知らぬ儒者の目違ひで、元時すでに女の鞋の中に盃を置いて飲んだ者さへあつ
てみれば、纏足は女の足を華奢にしてその人柄を高く見せたのが始まりで、これに對する男の嗜好は、
遂に視覚を飛び離れて握覺、嗅覺にまで及んだのである。さうしてこれが全盛期は明末及清朝であつ
た。

清朝は支那文化の棚ざらひ時代で、それまで貴族が獨占してゐたいろ／＼の贅澤が一般人民にゆき
渡つた。文化といへば體裁がいいが、實は平民が僭上して貴族の墮落を眞似たのである。ゆゑに支那
の本統の爛熟期は唐でも宋でもなく明でもなく、實に清朝であつた。

さういふ時代だから纏足の鑑賞も微に入り細に渡り、李笠翁の如きは、其著李翁偶集に纏足の美を
擧げ、晝は「憐惜」にあり、夜は「撫摩」にありとなし、専ら視覚と觸覺に訴えた。彼は説く、

選足の一事は單に窄小を求むるだけなら、一目見てもわかることだが、もしこれを嚴密に穿鑿す

ると、小さい足のために煩らひを感じず、それが却て役に立つのが、何よりの理想で、かういふ實貴
な脚は偶然以外には搜しても無いものである。その煩らひになるといふのは、足が小さくて歩けぬ
ことと、足が爛れて臭氣を發することである。その役に立つといふのは、殆ど形のないほど瘦せ細
つて、見れば見るほど、いとほしくなることと、骨も無いかと思はれるほど軟かで、握れば握るほ
ど氣持のいいことである、云々と。

上記の如く李笠翁は纏足の不便と臭氣を嫌つてゐたが、同時代の方綺といふ人は、その匂ひを耽美
した。彼は元人の「妓鞋行酒」を再興し、藝妓の鞋の中に杯を置いて酒を賭けて飲み、「采蓮船」と
いふ歌を作つて唱つた。

春秋の佳日、月花の良宵、

木履を倒すあるじあり、

裙を曳く上客をまねき、

いみじき宴けをもうけ、

ぬひとり幕低く垂る、

みどりの酒の泡、

紅るのもすそを絶ちて履を踏み、
まわす酒杯のほのかなる匂ひ。

方絢は古今第一の纏足崇拜者で、熱心の研究家であつた。彼は張功父の「梅品」に倣つて「香蓮品藻」といふ一書を著はし、纏足を品評し、「宜稱」「榮寵」「憎疾」「屈辱」等五十八ヶ條を擧げ、更に三貴を論じ、五式十八種の形體を説き、品類を九品に分け、位地を九ヶ所に置き、四忌の戒しめをなした。

三貴は一は肥、二は軟、三は秀、その説明に曰く、

瘦せたるは寒し、強ひて俗を矯めれば、遂に醫やすべきところ無し、ゆるゑに肥えたるは腴潤、軟きは柔媚、秀なるものは都雅なり、しかも肥えたるは肉にあらず、軟きは纏に在らず、秀なるは履に在らず、且つ肥えて軟きは、或は求形すべきも、秀は神遇なり云々と。

彼は香蓮（纏足）の最高標準を肥、軟、秀の三點に置き、肥軟は作り出すこともできないことはないが、秀に至つては、全く神の授けものであるといひ、秀を纏足の理想境とした。さうして纏足の形式を五種に大別し、更に十八種に細別した。あの畸形に作り上げた婦人の足にかくの如き區別がある

とは、眞に驚くべきことである。そのみならず、更に美醜を九等に分けて一々華麗の詞句を以て品評した。たとへば神品上上、妙品上中などで、それが下下までである。

又纏足の所在位置を撰擇して三上、三中、三下とした。

三上は、掌上、肩上、千秋板上である。即ち掌上は纏足を手の上に載せて觀賞すること、肩は閨中の秘事、千秋板上は死して棺桶の中にあること。

三中は被中、燈中、雪中である。

三下は簾下、屏下、籬下である。

かうなると、纏足は全く繪畫趣味である。

兎に角、あのやうな畸形の足を、このやうに美化して呉れる男があつてみると、女と生れて纏足せずにはゐられない。當時女は何よりも足を氣にして、いやが上にも小さく見せるため、附添ひの女中に纏足をゆるさぬ家さへあつた。その女中の當りまへの足を黄魚と貶なしてゐた。黄魚は日本の石首魚である。偕てその足の小さな女が、やがて母親となつて女の兒を生むと、先づ何よりも足に注意し、四つ五つ頃から寸法を見て、恰度三寸位に達した時、長さ一丈八尺の帛を横に巻き、だんだん生長すると、今度は縦に巻いて指を裏に折込み、恰度握り拳のやうな具合になるので、足の裏はへの字に壓迫され、骨傷を起すこともあらうし、又空気が入らぬから、皮膚が爛れることもあらう。何も知らぬ子供は、母親がなぜこんな亂暴なことをするのか、と悲鳴を上げて泣くが、我子を美人にしたい一心

に親は心を鬼にして強く巻きつける。さうして出来上つた足は、時候の變り目に、痛くもなるし、痒くもなる。一人歩きの出来ぬ立派な片輪者になる。それが代々重なつて、南唐以來、九百九十年間も繼續したのだから驚く。

今こそ纏足は臭い汚い醜いものと笑つてゐるが、僅か二三十年前には、金蓮、香蓮と稱するほど匂ひのいい美しいものであつた。實質上何の變りもないものを、見方によつて、これほどまでに相違するかと又驚く。

もと／＼貴族の好尚を平民が眞似たのだから、そこに手入れの行届かぬ臭氣がある。鑑賞の錯誤がある。さうして極端に小さなものを喜ぶやうになつたのは、詩人の美辭に誤られたのであらう。

骨董珍談

支那では骨董を古玩といふ。古玩の中には金石(銅器、陶器をも含む)瓷器、瑠璃、書畫、毯毯、木器、盆景、玉器等種々のものを包括し、その内玉器だけは種類が多いので、専門の店を設けてゐるが、之等の店を凡て古玩行と稱してゐる。

古玩行は各大都市の中心點には必ず軒を並べてあるものだが、北京には殊に此種の店が多く、部門も更に分化して、金石専門店や書畫専門店、瓷器専門其他雜品などに分かれ、更に外人向、内地人向

といふやうな區別もある。例へば炭兎胡同は金石多く東西四牌樓、前門大街、瑠璃廠、烟袋針街、東安門大街、玉府井大街等は、瓷器、瑠璃書畫、毯毯、木器の類を多く賣り、又東安門、王府井大街、炭兒胡同、廊房二條、花市四條等は外人向で、瑠璃廠一帶は内地人向であつたが、近頃は不景氣のため何處も彼處も外人を歓迎する。

北京城内に古玩行の多い原因は、前清時代各省進貢の貴寶が皆皇室に集ること、乾隆以來代々の帝王が華奢を好み、國內に名工輩出し、少からざる精巧品が集中し、それが段々親王大官に下賜されたが、革命後滿洲貴族の生活難に依て續々賣出されたので、北京の市場には俄かに貴寶が多くなつた。

其外、河南の開封、洛陽、陝西の長安などの地下發掘物も皆北京に集中する。之等の古都にはそれぞれ發掘の専門家があつて毎日午後から、金棒引いて畑の中をほちくり廻し、佛像の首や古瓦や、翡翠の帶扣や鈕扣、磁器や古鏡等いろ／＼のものを掘り出し、翌日闇いうちから市に持出し、大抵其場で捌いて仕舞ふ。買手は所の骨董屋であるが、各省の者も入り交じり、中にも北京の古玩行は尤も優勢で、幾日も幾日も宿屋に滞在し、佳い物を選び出して相當の高に達してから北京に引上げる。

玉器類は種類が非常に多く、眞珠、瑪瑙、翡翠、白玉、墨玉、水晶、茶晶、藍晶、珊瑚、岫岩石、髮晶、髮晶、鶏血石、田黃、干黃、壽山、萊石等の玉物や細工物などである。

眞珠は支那には産出しないが、元明以來波斯から輸入され、即ち歴代帝王の朝貢物に依て其高は莫

大に達し、民國初期頃には支那が天然眞珠の輸出國として世界有数のものになつてゐた。

翡翠の産地は、北は陝西、南は雲南の邊疆地方であるが、北の翡翠は早くも断え、南は緬甸國境に掛けて鑛脈は豊富であるが、交通不便のため、未だ多く發掘されない。

翡翠は唐宋時代に服飾儀制として鈕扣、帶扣に多く用ひたので、其遺物が今も盛んに出る。鈕扣は形が鍵形になつてゐるので筆架に利用される。

翡翠玉は扇子の墜子などに用ひられたのであらう。大小不揃ひであるから、日本の根掛などにしやうとするには、氣永に買ひ集めて粒を揃えなければならぬ。

玉器は漢代に至て祭具に使用したので琢磨彫刻の技術が進み、石器の最も進歩した形式である。銅器は商代から初まり周が極盛で、漢に入つて衰落した。併し鏡は漢代がいゝ。

瓷器の發明は、玉の産出が少くなり、玉器に代る祭具を作らんとするのが目的らしかつた。だから唐代には陶器の方が多く、越州の白瓷などがやうやく出來初めたのである。瓷器は宋代に至つて大成し、官窯、哥窯の青瓷は其時代の産物として餘りにも有名で、又古今獨歩の逸品である。

硯は唐代から端溪及歙石を發見し、宋初まで盛んに採掘されたが、宋の渡南後、明の末葉まで暫く休止し、萬曆以後、清の乾隆嘉慶に及んで再掘されたが、道光に至つて坑口崩れ、現在も仍ほそのままになつてゐるのは惜しむべきことだ。近代土木技術の進歩を以てすれば、こんなものを掘り出すことはわけもないことだらうが、併し之れは普通の物と違つて、細工が藝術的でなければならぬし、古

來有名の文人墨客の持古したものに興味を感ずるのであるから、今掘出したからとて技巧とさういふ文人の風格が伴はなければ値打が少い。そこが古玩の古玩たる所以であらう。

同目録を参照

骨董の眞價に就ては日本でも支那でも随分頭を悩ますものである。何しろ支那は古い國で斯道の數奇者が多く、骨董の如きは自分自身が古人にも劣らぬ技量を持つてゐる者も少くないから、眞物を多く秘藏してゐる者も少くない。之は何處の國でも同じであるが、金持の最後の遺業は骨董集めで、殊に成金にはこの傾向が甚だ多い。かういふ人は骨董品に就ては殆ど皆開き替者で、其上掘出物をしようといふのだから随分蟲のいゝ話である。そこで彼等が骨董品買入に就て、どういふ方法を取るかといふことは興味ある問題である。

北京の王といふ人の話では、骨董屋の持つて來るものゝ中で、心になつたものがあれば必ず一つは直を付ける。勿論ウンと直切り倒すのだから負ければ必ず買ふ。かうして澤山見てゐるうちに、眞價は兎に角良品と悪品との區別は自らついて來るので數百本に一本位の眞物が手に入る。かう云ふ風に死馬の骨式にやらないと眞物が中々出て來ないといふのである。サアさうしたら駄物が殖えて困るだらうと訊くと、いや決してそんな心配はない。ハケロがいくらもある。例へば支那には三年に一遍位は二千三千といふ大口の義捐金の申込があつて金持としてはのつびきならぬことである。此際自分の本統の欲しいものだけを除いて置いて、其他の物は良品悪品を突き交せて一口五元位の會を作り、

抽籤で分配する。かうして二百本も売れば千元位の金は即時に纏る。だから普段廣く交際して成丈け多くの友達を作つて置く必要があるといふのである。

支那でも眞に骨董美術を愛好する者は、決して儲けづくで買取るのではない。自分は誰某れに私淑してゐる。誰某れの風格を愛するのである。だから其人の書いたものは血肉はおろか、骨の髄までよく承知してゐるので、傑作に對して千金萬金を惜しまぬのが當然であらう。古來翰墨の家には先祖傳來の名品があり、又集藏家として有名な人もある。さういふ集藏家が故人になり遺族が窮して賣立てをすることが往々ある。例へば清末の集藏家端方の賣立や、近くは葉德輝、袁寒雲の賣立などがあつたが、かういふ品物は甚だ確かであるが、値段が高いので、外人に皆喋はれて仕舞ふ。だから前記の方法に依て、ポツ／＼買集めるのが賢いとしてある。

贋物の無いのは書籍である。之は素人にも解り易く、明版を宋版と間違へることはどんなことをしてもない筈である。値段も宋版なら一丁何元で取引され、相場も略ほ一定してゐる。書籍は古玩行では扱はないが、矢張り骨董の部に入るべきであらう。



贋物製造に就ては、日本では下谷物と稱して時の流行物に對して下谷邊で盛んに製造する。例へば竹田、華山が流行れば、竹田、華山の偽物専門家が幾枚も書いて鑑しを掛けて賣出す。臨風博士が意

識無意識の中に一杯食はされたのも此下谷物であつた。近來此種の物は極めて速成で、買手の手に移るとすぐ襤褸が剥け掛かる物ばかりである。

支那の贋物製造は中々念の入つたもので親の代から計畫して、子供を立派な贋物製造家に仕上げる。たとへば王羲之ならば、三つ子の中から王羲之ばかり習はせる。勿論手筋を見て、いけなければ他の物に更えるのであるが、兎に角それ一筋を習はせるのであるから、成年に達すれば自然王羲之になつて仕舞ふ。勿論王羲之の作品などはさうザラに残つてゐるわけではないから、かういふ大物をかつき出しては不利だ。そこで眞物も可成り多く残つてゐる明時代の作品、例へば董其昌とか文徵明とか唐寅とか仇英といふやうな物の中、一色を習はせる、そして假りに董其昌を習熟したとすれば、絹や紙や筆墨朱肉も明代の物を用ひ書き上げた後は竹筒の中に入れて、臺所の竈の上に何年となく掛けて置く。支那では竈に枯蘆を焚くので烟がやんわりして非常に具合がいい。さうして賣りに出す時には極めて用心深く立廻り、先づ骨董屋を漁り歩いて、買ひもしないのに、わざと董其昌ばかり捜し求め、大概の物は贋物だからいけないといつて突撥ねる。よし、眞物であつても、之は初期の物だとか、或は又晩年の物だとか云つて難癖をつける。最後に彼は眞に氣に入つたものが、偶然よそから手に入つたから、もう要らないと斷る。その眞に氣に入つたものといふのは、董其昌の傑作中の傑作「何々圖」であることはいふまでもない。そこで自然あすこには董其昌の「何々圖」があるといふ噂が立つ。數奇者は聞傳へて其寶物を是非一度見たいと思つて訪問する。併し中々見せない。最後に引掛るのは、

萬金を惜しまぬ人だ。此人なら鉅萬の富と多少の批評眼があると見たらば、其人に見せる。遂に多少の批評眼があるために反つて瞞されるわけになるのである。併しかういふ品物だつたら瞞されても決して損はしない。贗物でも時に依ると眞物以上の出来映えがある。

文人畫は本來人格を慕ふのあまり、現實以上に好く見せることがある。いくら腕があつても人格が低くければ駄目だ。書畫の妙味は書畫の技術であるとは支那人は想はない。神韻漂渺たる迷信が其處に絡み付いてゐるので、かういふ遠慮深謀の贗物が役立つのである。併し大抵の贗物はこれほどの段階に達してゐない。矢張り日本と同じ速成品であるから、少し眼の肥えた人の前に出るとすぐに馬脚を露はすのである。

この迷信的鑑賞家が迎もおもしろいユーモアを作り出すことが住々ある。

天津の或る金持の旦那様が老るて古玩に凝り出し、毎日々々、それこそ雨が降つても槍が降つても、必ず一度は古玩行を見て廻らなければ蟲が納まらぬといふやうな状態になつた。そこで人の悪い骨董屋が一策を案出し、此爺さんから、遂に何萬元といふ大金を占めたことがある。それは「仲秋賞月圖」といふ畫題で平凡他奇なきものであるが、此爺さんの眼で見ると、實に珍中の珍、奇中の奇寶であつた。なぜなれば其畫は朔日に見ると新月であるが、日數を重ねるに従つて段々満ちて来る、さうして十五日には満月になる。其後はだん／＼虧けて行つて、晦日には遂に歿して仕舞ふ。ハテナと思つ

て、其次の月に行つて見ると、やつぱり同じことだ。

「之れは一體、誰の作かネ」

「落款はありませんが、王羲之ださうです。實は或る高家の預り物で、値段は篋棒に高いのですが、永年此商賣をしてゐる私どもにも一向解らないので、先代からの義理合でお取次をするのですが、實は厄介物で困つてをります」

「で値段はいくらなんだえ」

「二萬元が僅一文缺けても賣らないといふので、こんな畫が二萬元ぢやあんまり酷いと思ふのですが、何しろ、先き様がさう被仰るし、大事なお得意でもあるから斷るわけにも行かないのです」

爺さんはフ、ムといつて考へ込んで仕舞つた。さうして歸つてから一晚中考へてみたが、どうしても不思議だ。新月が満月になり、満月が無月になる。これこそ王羲之の靈驗が現はれて、私のやうな古玩熱愛家の眼に映じるのであらう。矢張り神品に違ひない。

さう思つてとう／＼二萬元奮發して、此不思議の「仲秋觀月圖」を買取つた。そこで親戚故舊を集めて、神品入手の大祝宴を開いた。祝宴は一日だけでは靈驗が見えないといふので、一ヶ月ぶつ續けて行はれた。何が借て、手に入れた最初から闇の晩續きで、少しも月が現はれない。二日三日經つと少々不審になり、

「一體王羲之の畫なんて聞いたこともない」

といふ人もある。

「さうさ、それだから不思議を現はすのだ。今に見給へ。月がまん丸と出て来る。何しろ場所を変えたから、出そびれてゐるのだらう。之は密室に掛けて置いて、獨り靜かに眺むるものであらう」と勝手に判断して、密室に掛けて香を焚いて黙禱したが、中々月は現はれない。

廣間の方では、月が出ようが出まいが、そんなことはどうでもいいのだ。大勢の客人は飲めや唱へで大騒ぎだ。併し十日たつても二十日経つても月は更に出て来ない。とうとう爺さんも匙を投げて、前の骨董屋に行つて見ると、晦日に買ったその明るる日の朔日の日から店を締めて貸家札が貼つてある始末。

「こいつ、一杯食つたわえ」

と段々様子を探つてみると、朔日から満月、満月から晦日までの賞月圖、人物背景等寸分相違のないものを三十枚作つて、毎日一つづつ掛け變えてゐたのだ。かういふ甘手の詐欺に乗る人も乗る人だが、支那人の書畫に對する迷信の一端をよく示してゐる。

書畫ばかりではない。凡て古玩に就ては日本人の想像の及ばぬ念入の贗物が作られる。例へば端溪の眼を作るには、鼈を硯の正中の上に吊して小便を垂れさせると、新しい鼈を同じ位置に吊して置いて、二年も三年も掛つて眼を作る。

又鶏血石の贗物を作るには、日本では雞血を以て石を煮るのであるが、支那では新しい雞血を毎日々々入れ換えて、十年二十年と浸して置く。だからじりじり沁み込んで中々剝けない。銅器の如きは小便眷に入れたり、土の中に埋め込んだり、苦心慘膽して商周時代の古色を出す。古鏡などには最も此種のものが多い。だから古玩行から掘出し物をしようとするのは、全く無理な話である。公館のボーイの盗み出したものや古墳の發掘品は素人の手に落ちることは極めて希れで、多くは連絡のある古玩行の手に渡る。さういふものは買値は安いだらうが、賣値が高いから掘出しものにならない。希れには屑屋の手から出ることもあるが、贗物師が屑屋に化けてゐることもあるから中々油断がならない。兎に角心眼を開かなければ骨董は駄目だ。偶然の機會を覗ふ位なら彩票を買つた方がました。結局古玩にも一種の靈があつて、神品は眞に愛する者の手に落ちるのである。

美人鑑定

支那の美人鑑定は「雜事秘辛」に盡されてゐる。大體これは選女の體格検査報告書で、漢代宮中の秘録であつたのだらうが、後ち原本は絶え、書名ばかり残つてゐたのを、明の楊慎が假作したものであらうといはれてゐる。

選女は後漢書后妃傳の序に、

漢の法として八月には算人の行事あり、中大夫と掖庭丞及び相工を遣はし、洛陽郷中に於て、良家の童女を閱視せしむ。年十三以上十八年以下にして姿色端麗、法相に合する者は載せて後宮に遣り、可否を擇視し、適ち登御に用ゆ。所謂算人の史なり。

とあるのが初まりで、後世しばらく絶えてゐたが、明の萬曆以後に至つて又復興された。「雜事秘辛」は其検査報告を骨子にして作つた漢桓帝懿獻梁皇后選入冊立の小史で、事件人物はもちろん、物尺の寸法まで凡て漢代に則つてゐるが、實は明代選女の方法を詳記したものである。左に其一節を抄譯する。

建和元年四月丁亥、保林（官女取締役）吳構はおかみから賜つた丙戌詔書を奉持して中常侍（官宦）超に渡した。その詔書には、「朕聞く、河洲窈窕、明眸鳳眼、賢を擇み寵を作すは、隆代の先んずる所、故大將軍乘氏忠侯商が遺すところの少女は、貞靜の徳あつて禁掖に流聞す。其れ、構とともに商の第に詣り、動止を周視して審かに幽隱を悉り、其れ、諱匿する母れ、朕將に採らんとす」と記してあつた。そこで構は超とともに詔書を奉じて商の第にゆくと、第ではよろこび騒いだ。……まもなく商の息女瑩は中間からしづくと歩んで寢殿に入つた。

女官長の構と官内官の超は詔書にある通り、彼女の立ちふるまひをのがさず眺めたが、みな格

式になつてゐた。そこで超を外舎にとゞめ、構は詔書に準じて瑩の私室に行き、人拂ひして部屋

の戸を閉ぢた。東の窓には薄くスカれた半透明の眞珠貝が張り詰めてあつた。その時、朝日は眞珠貝をとほして和やかな光線を室内に送り、斜に瑩の面上に照したので、霞に包まれた春の淡雪のやうに、あでやかな反射は、まともに見てゐる構には、眩ゆいほどであつた。

その美しい目波は鮮やかに澄み渡り、眉は愛らしき曲線を描き、朱き唇と皓き齒と、正しき鼻と、ふくよかな頬とその鬢は、いづれも適當な位置にある。

構は許しを得て、瑩の歩搖をはづし、帯を解き伸ばして度つてみると、黒髪はつややかに物の影をうつし、手に巻いた長さは、八巻きと半握を刺した。

「おみ帯を解くので御座いますよ」と構は注意して瑩のからだに手を掛けると、彼女は顔を眞赤にして欄り低めた。

「お上みの禮儀は殿しう御座います。おらくになすつて戴いて、すつかり拜見させて戴けば、おいつくしみが加はるので御座いますよ」と言はれて、瑩はハラ／＼と涙を流し、眼を閉ぢて顔をそむけた。構は恭々しく瑩の衣裳を取り卸して、そのやわ肌を捧げた時、肌理きよらかに膩づき、日光は芳氣を噴き襲ね、手にもとまらぬ滑らかさ、前方は丸みを持ち、後方はやゝ角張つて、脂を築き玉を刺したなりのよさ。ふつくりした胸乳は香氣を發して潤ほひ將に出でんとし、臍は三分の珠が

して慵く開き、まさに楊妃の喜睡。更に愛すべきは、人に贈るに心を以てし、人に贈るに物を以てせず、將に行かんとして難適の遺なし、我に示すに意を以てし、我に示さざるに形を以てす。去るに臨みて少しく秋波の轉あり、殆んど女子中の隱士、閨内の幽人也。

この種の觀點は、遠く宋玉の「登徒子好色賦」に胚胎され、直感以外に再現し能はざるものとしてゐる。

天下の佳人、楚國に若くは莫し。楚國の麗は臣の里に若くは莫し。臣の里の美は、臣の東家の子に若くは莫し。東家の子、これを一分増せば太だ長し。これを一分減すれば太だ短し。粉を若くれば太だ白し、朱を施せば太だ赤し。——好色賦。

寢室

支那の寢室を語るにあつて、先づ家屋の構造の概略を述べよう。

支那人の住宅は原則として大概南向に建てられてある。たとへば大門は東向でも、中へ這入ると屈折して牆壁がつゞき、二の門を南向に建て、母家がその奥にある。

上海のやうな近代都市は、人家が櫛比して空地がないから、さういふ自由な設計は許されないが、蘇州、杭州、南京などは大概右のやうな建方である。だから折角見晴らしのいい湖畔の風景を牆壁で遮り、家を裏向きに建てるのが往々ある。一つは風水先生の言葉を信じて、自然の壓迫を避けるつもりでもあらうが、風流人の多い支那に似合はぬ無風流の沙汰ではある。

普通の住宅は外界と隔離して牆壁で周圍をかこみ、一棟の前に一つの内庭を取つて、奥へくと同じ配置に家を建てる。

門はいろ／＼あるが、眞直ぐに這入る門は、第一棟のまんなかを開けて門を作り、左右の部屋に門番が住んで見張りをなし、内庭を隔て、第二棟の母家が聳え立つ。これを前廳といふ。前廳の奥にも同じやうな形で中堂があり、中堂の奥にも後廳がある。この種の家はまん中の廣間を、應接室或は食堂に配て、左右の部屋を家族の書齋、居間に當て、凹字形に母家と連続し、たいていは二間づゝ仕切つてある。これを日本人は兩袖と稱してゐるが、本來は東廂、西廂といふのである。主人の居間は中堂の東廂を用ひ、夫人の居間は後廳の東廂を用ゆるのが通例であるが、時によると多少の相違があり、中堂と後廳の間に牆壁を設け、側壁の一部を六角又は丸く切つて雪洞、月窓と稱し、側路から奥に通ずるやうになつてゐる。又別荘風に仕組んだ家は、廊下つゞきに、家から家が際限なくつながつて、庭もあり、泉水もあり、地に臨んで樓閣を設け、曲廊巧室、變化多様のありさまで、宛ら八幡の籤細らずで、中へ這入ると、方角がわからなくなる。

通常の内庭は院と稱し、空地を枳形に残して、周圍を一段高くし、石或は敷瓦で鋪装し、その上に庇を出して降雨の際にも濡れずに通行ができるやうになつてゐる。石は方形のものを平面に敷いてゐるが、敷瓦は薄いものを堅に敷き詰め、或は色瓦を交せて、寶模様を露はす。内室の左右には植ゑ込みを作つて海棠、芭蕉、櫻桃、梧桐など植ゑて風致を添え、それによつて鶴蕉廬とか、桐雨軒とかいふやうな名前をつけるが、これは正屋ではない。

院は奥になるほど幽邃を増し、時に石欄を設けて翠竹を種ゑ、小亭に石桌を置き、蘭、萬年青、枸櫞、鶏子花などの鉢物や、茉莉花、野薔薇、木香花などの繁りを作る。牡丹はよほど大家でないと見ることが出来ないが、菊花は時節が来ると、どこにもある。梅蘭菊竹の理想は造園のみならず、室内の裝飾にも多分に盛込んである。

内室の取締は嚴重を極め、男子は夫人の兄弟でも、差迫つた用事以外は、主人の許可なしで、滅多に奥に通ることは出来ない。かゝる窮屈な貞操觀念は、宋以前には決してないことで、朱子學の影響を受けたのだといふ。だから餘り懇意でない客は、主人は前廳へ出て應待し、敬つた客は中堂へ通し、極々懇意になると、初めて書齋に通して、打ちとけて話をする。

小家はさういふ部屋がないから、茶館を面會場所にする。男といふ者は、女に對して凡て危險性を持つてゐるものと見做し警戒おさく／＼怠らないやうに見える。支那の茶館が繁昌するのも偶然ではない。夫婦者が客に喚ばれてゆくと、男は中堂で男同士語り、女は後廳で女同士語る。ふだんでも食事の

時は、主人は表の方で一家の男族と食卓を圍み、夫人は奥の方で一家の女族と共に箸を取る。

また仕立屋、指物師のやうに職人を多く置くところでは、親方が男工の惣菜を作り、かみさんは女族の食物を作る、私は度々かういふ家の一室を借りて食事の賄ひをさせたことがあつたから、此ことが特に目に付いた。

現在の摩登家庭は、西洋風に男女混合して食事を取り、時に來客も其中に加へ、夫人や令嬢もお世辭よく應酬し、決して以前のやうな窮屈なものではないが、併しそれも開港場の一部で行はれることとで、地方では未だ中々もの堅い。

家屋の構造と日常の生活は大概右の通りである。次に寢室と多妻に就てのべよう。

前にも述べた通り、客間が家のまん中に廣く取つてあるから、來客はそこで應接し、唐間には寢臺、或は臥榻を置き、草臥れたら、いつでも寢轉ぶことのできる用意がしてある。嚴密にいへば、書齋と寢室は別々のものであるが、事實上兼用される場合が多い。男子の居間は裝飾があつさりして、紫檀の寢臺や書棚、桌子もおも／＼しく、熱い地方では大理石入りの臥榻などを設け、額や對聯も白紙に墨書したものが多し。現在では外國製の家具を混用し、鐵ベッドやニス塗りの寫字臺などを見る。

夫人の部屋は文字通りの翠帳紅閨で、赤いものや刺繡のものが多く、文語では繡閣といふがいかにも其通りである、寒くなると醫者は繡閣に入る、といふ諺があるが、病家が耗つて、仕事か暇になる

から、所在なさに夫人の部屋に入つて遊んでゐるのである。男の寢室は特別の場合にのみ用ゐられ、夫人の部屋が即ち夫婦の寢室である。

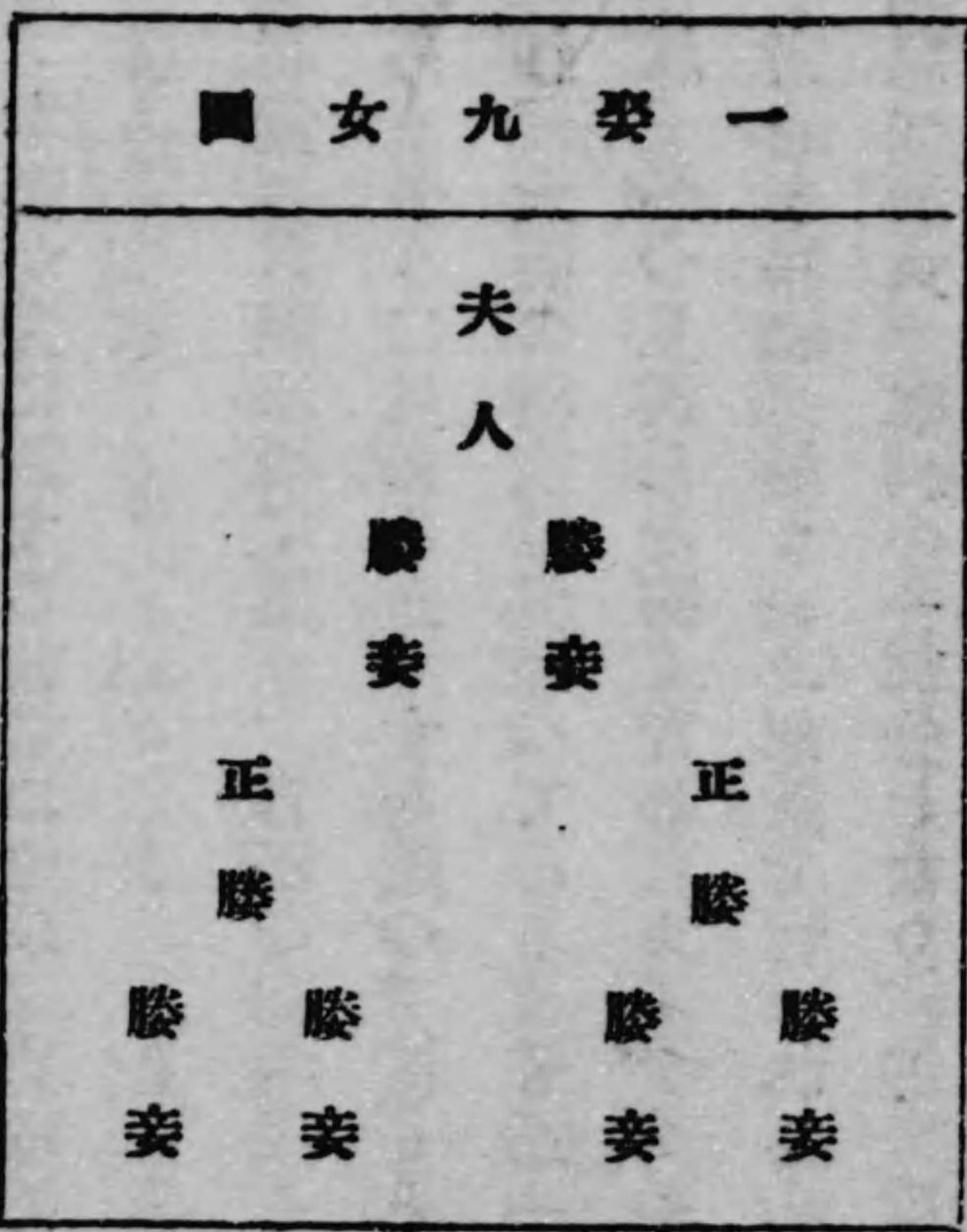
富人は妻妾が多く、妻妾には二名の艶婢がそれ／＼附従ひ、後庭は實に百花爛熳たる有様である。群妾は夫人支配の下に分科的に家内の仕事を受持ち、會計係、炊事係、被服係、禮節係等種々の區別があつて、めい／＼きめられた職分を守つてゐる。すつと上流になると、會計は家扶に任せ、炊事は腕利のコックを置き、妻妾はみな遊んでゐるが、寶石、書畫骨董、樂器のやうなものは、配下の艶婢に管掌させる。艶婢は他人の子を買取つて、兒飼ひから仕込んだ者が多く、たいてい女主人の婚嫁の時に陪従して來た者で、親兄弟があつても縁が切れてゐる。従て彼女は主人の自由になることはいふまでもなく、妾の下に屬する一種の豫備妾であるから、日本の腰元とは大におもむきが違ふ。

古來諸侯一娶九女の説がある。その論據は公羊傳の「諸侯一娶九女、天子一娶十二女」に基くものであるが、これに就ては少からぬ疑問がある。

下表の排列によると、某國の姫君が他國に嫁入する時には、姉妹二人を引連れて嫁するのみならず、尙ほ同姓の二國から正媵二人を求め、その正媵にも各々媵妾二人隨従して來るのである。さうすると、第一國の娘の親は大に満足するだらうが、第二國、第三國の娘の親は、それで承知するだらうか？ 苟くも一國の姫君ともあらうものが、他國の妾となることを肯ずるであらうか？ まして媵妾を引連れてゆくことは禮儀にも背き、いかに多産を望む支那でもあり得べきことではない、云々といふのが、

その反駁説である。

又昏義に「古へ天子は后を六宮に立て、三夫人、九嬪、二十七世婦、八十一御妻」とあり、鄭康成はこれを解釋して「群妃御見の法は、女御八十一人を九夕に當て、世婦二十七人を三夕に當て、九嬪九人を一夕に當て、三夫人三人を一夕に當て、最後に皇后一人一夕に當り、十五日にして一巡す。望より後ちには、これに反す。」といつてゐる。



魏了翁は古今考でこれを駁し、「かりそめにも若しさういふことがあつたとすれば、皇后は皇帝と一月の間に二夜しか合ふことが出來ず、この二夜の独占の外は、三夫人が一夜三人。九嬪、世婦、女御等百十七人の女が十三日の間に毎夜九人づゝ伺候するのであつてみると、金石のからだでも堪へ得るものではない。況して古への天子は天地祖宗、社稷山川、日月星

辰を祀り、三日に一齋、七日に一戒が行はれ、毎夜一女を御する暇さへないのである」云々と、この説を取つて姚際恒は、「昏義に出てゐるものは、一種の官制に過ぎない。天子は陽教を掌り、合土の内を教管し、皇后は陰教を掌り、宮内を教管するのが、戰國時の理想である」といつてゐるが、末世になると、一平民でも中々どうして、艶福多妻の點は、諸侯一娶九女どころの騒ぎぢやない。



そこで群妾を取締る必要上、夫人は各房の見易き位置に居所を設け、常に彼等の動靜を注意してゐる。或は夫人の部屋を内室の要衝に置き、どこへゆくにも必ず、その前を通過しなければならぬやうな仕組もある。西太后は光緒皇帝と皇后の居室の中間に、已れの寢室を設けた。本来、此位地にある官殿は交泰殿と稱し皇帝皇后が夜坐するところだ。然るに、西太后は皇帝の政治改革企圖を妨ぐるため、本妻が妾に對する故智に倣ひ、意地悪く中間に陣取つて密談を豫防したのである。

高貴の官殿は借て置き、富豪の内宅でも一般の民家に比べると、その複雑性に於て一見格段の相違があるやうに見えるが、女を藏つて置くといふ根本理想が同じだから、間敷の多少と廣狹の相違こそあれ、大體の構造は似通つてゐる。普通一般の女の部屋は大概南の一方口で、廊下のために光線を遮られ、かつ見透しを防ぐためにカーテンや屏風で圍つてあるので、甚だ小暗い。よく小唄の材料になる密通事件は、かういふ部屋で行はれるので、發覺の時、色男は、北の高窓を破つて逃げ出す。この北窓は灘黄の歌調の一部分となり、どの歌にも出てゐる位だから、婦人の部屋の構造は、おしなべてこれに近いものであらう。密夫と泥棒の用心のために、かういふ部屋が作られたが、あまり用心が好過ぎて、火事などで焼死ぬことなどが往々ある。晋の劉伶は家屋を衣服に見立て、裸體で人に面接し、「汝、なにゆゑに我がふところに入れるや」と詰つた。それとは少しわけが違ふか、婦人の部屋は外界から遮斷された祕密室で、睡眠、安息、化粧、著換はもちろん、雪隠も湯殿もみなそこで兼ねるの

だから、夫といへどもむやみに這入つて都合の好くないことがある。婦人も又、部屋の中では安心して行儀悪く、夏などは丸裸で起臥することがある。

或若い婦人が亭主の留守中火事に遭ひ、裸體のまま窓から跳び出し、裏河に繋留してある小舟の中に難を避けたが、船内の知らぬ男から著物を貰ひ受け、鎮火後、歸つて來ると、あらぬ噂を立てられ、それがため縊死した事件がある。裸體で寝るのは、勿論、不用意だが、非常口の無いことは、支那の寢室の大なる缺點である。

寢臺は婚禮の晩、据ゑた位置を更へずに永久に一つ所に据え置く。稀れに易者の言葉を信じて位地を變へ、病氣が治つた話がある。さういふ時には、うづだかい埃りの中から、思ひも依らぬ銀塊などがころけ出し、親戚などを招いて大に祝ふことなどがある。大事なものは、ふだん皮箱に詰めて、寢臺の下や、その裏に置き、掃除も此處まで届かぬから、醜れ出したものなどは歳月を経るうち忘れてしまふのであらう。それから又不思議の話をうみ出し、奇しき運命觀を作出すことになる。どんな小家でも、夫人の部屋には多少ながら、金目の物があるから、妖賊は眞先にそこを目覓ける。そこで妖盜の見聞談が艶本の種となる。

室内の諸道具は、夫人が結婚當時持参したもので、衣類、首飾、化粧道具、夜具蒲團と共に、これを粧奩と稱し、富家は紅木一式、紫檀一式の家具を用ゐる。寧波、蘇州、廣東等各地方によつて、多少様式の相違はあるが、上等品は彫刻も念入で、ガツシリした立派なものである。子供が生れると、寢

臺の前に香燭を燒き、酒饌を供へて、床公床婆を祀る。現在開港場では眞鍮ベツトを用ゐてゐるが、このことは矢張り行はれてゐる。

寢臺の外に長さ六尺、幅三尺位の木製の匠といふ臥榻があつて、臺はこゝに腰掛けて話をしたり、或は横になつて阿片をのみ、樂居の場所であるが、夜は侍女をその上に寝かすことがある、通例侍女は、次部屋に寝かすものであるが、夫人が獨居の時には同室に置く。此から支那の艶事は先づ馬を射て將を得るのである。

鏡は大切なもので、洗面臺の上に大きな姿見を掛ける。又洗面台に取付けてあるものもある。その外、洋服箆等も半面は鏡張であるが、これは近來のものである。部屋の壁上には、美人畫、山水筆墨などの大軸を掛け、左右に對聯を掛け、その下に腰高の臺を置く。臺上には燭臺、花瓶、磁壺、置時計、手筈などが配置よく並べてある。又夫人の好みによつては人形、造花、樂器等を置く。大家になると、食器櫥も書棚もちがひ棚もあるが、小家は凡てが兼用である。その外、廊下に六角燈籠など懸け渡し、祝ひの時にはこれに紅綠帛の美しき結綵を施す。

便器は實用以外に迷信的に大事がられる、それは極めて頑丈な木製蓋附の桶で、表面は朱塗り、内부는黒塗り、糞も念入りに掛けてあるから一生涯破損せぬ。婚禮の時には寢臺に亞ぐ大事なもので、紅染めの雞卵をいくつか其中に入れて持つて來るのであるが、親戚の娘などが一つづつ盗み出してゆく。さうすると、早く縁談が定まるといふのである。支那婦人は毎晩脚を洗ひ下湯をつかふので、朱塗の

腰高の盥も又必要器具の一つである。

結婚の式は中堂で行はれ、夫婦は互に拜し、次に天地及祖先を拜して後ち、洞房に入つて合登の式を擧げる。その洞房が即ち夫人の部屋である。地方では鬧房ナオファンといつていろんな馬鹿けたことが行はれ、洞房にゐる新夫婦を苦しめる、或は悪戯小僧が新夫婦の睦言をきくために寢臺の下に躲れ、同じ思ひで潜伏してゐる少女にめぐりあふ。

小家は夫婦の居間も寢室も同じであるが、大家は表向き主人は書齋、夫人は内室と部屋が別々になつてゐるから、病氣などに罹ると、各々その居間に引籠つて醫養する。大病になれば、家族はその居間に集つて看護に餘念なく、息を引取れば一家擧つて哭き叫び、遺骸を板に載せて中堂に移す。

主人或は夫人が死去した場合には、中堂の正面に臺を設け、遺骸をその上に置き、布又は衾をかぶせ、親戚を集めて佳き時刻を選んで棺柩の中に入れる。これを殯殮といふ。妾は中堂に移さず、その部屋で行ふ。

正妻以外に多くの妾をもつ者は、侍寢の選擇に就ていかなる方法が行はれるか？ 一夫一婦の想像の及ばぬところであるが、要するに主人の體力如何により、上半夜は誰それ、下半夜は誰それ、といふこともあるだらうし、都合によつたら四五人一緒に寝ることもあるだらうが、それは情義に驅られた特別の場合であつて、通例一人一夜である。大體妾は、夫人の承認を得た上で容れたものであるか

ら、爾後も夫人の承認を得なければ、同食することができない。しかしながら、氣に入つた妻のとりへは自然足が向くもので、主人も妻もこの場合は、正妻の機嫌を取つて承認を得せしむるやうに仕向くるであらう。所詮は謙讓といふことが女徳の第一で、二夫人を同時に迎へた婿さんが、此謙讓の美徳のために、兩賢婦から締め出しを食ひ、院内（いんない）を行きつ戻りつして、一夜を明したといふ實話がある。皇帝又は政治上の權威者は、決して妻の部屋に入らぬ。暗殺を恐れるからである。晩餐の時、宦官は名札の入つた玉盤を捧げると、皇帝は、その一つを擇んで裏返して置く。皇帝が寢室に入ると、別の宦官は指定の妾を丸裸にして羽衣にくるんで背負つて来る。皇帝はすでに寢臺の上にもられる。此時羽衣は撤去され、女は後ろ向きになつて、床に上る。時間が来ると第一の宦官は聲をあけて、時間が來ました、と注意する。皇帝は返辭をしない。しばらくして又時間が來たと報らせる。かうして三度聲をかけた時、皇帝はやうやく女を放すと、第二の宦官は皇帝の脚後より女を引出し、羽衣に包んで背負つてゆく。この時、第一の宦官は皇帝の御前に跪き、留まりましたかと訊く。皇帝は留まらぬと答へる。そこで宦官は向ふへ行つて、妾をあらため、確證を見届けた上、名札に何月何日何時皇帝某妃を幸すと記し、他日受孕の證として備へ置く。これが清室祖宗の制定である。

袁世凱も皇帝になつてから、決して妻の部屋に入らず、自分の居間によび寄せた。彼は常に暗殺を懸念し、睡夢の中に誤つて妾を斬り殺したことさへある。かうなると多妻は享樂ではなく恐怖である。一般の市人は、いかに富豪でもそれほどの恐れはないから、氣に入つた妻の部屋に入浸りもする。

しかし新婚（妾も新に迎へれば新婚である）以外は大抵晝間は書齋に入り、來客を迎へ、外出もする。仕事の多い人は外泊もするし、旅行もするから、多妻は寶庫の中の寶玉のやうに空しく貯藏される期間が多い。たゞ妻妾の誕生日には、必ず當人の部屋で小宴を開き、正妻も臨席して團圓の下に時を過ごし、晩になると、主人はよそへはゆかず、必ず其部屋に泊るのが常例である。

全 家 福

支那人は店先で食事をするから、時分どきに往來をぶらついてみると、其地方の貧富儉奢の度が大抵見透される。南京では、大功坊（ダコウフ）（中華路）から南が商店の櫛比してゐる場所で、彼等の食品を見ると、菜葉の炒り物や臭豆腐（クワイフイ）の蒸しものなどで、肉は殆ど無いことが多く、あつても甚だ微少である。これを廣東の酒池肉林式お惣菜と比べると、實に雲泥の相違である。香港廣東では、午後四時頃が正餐時で、時刻が来ると、大商店では鐵柵の門をしめ、商業を一時休憩して飯を食ふ。小さい店でも門こそしめないが、此際品物を買ひに行つても、相手にもしない。さうして、どこの店頭にも二三人の乞丐が空罐と籃を提げて待つてゐる。食事が済んで彼等の貰ふところの剩り物を見ると、蝦老あり、蟹あり、肉あり、玉子あり、筍、椎茸あり、俗に「全家福」——あらゆる材料を寄せ集めて作つた汁を乞丐料理と稱してゐるが、廣東の剩り物はまことに文字通りの「全家福」である。こゝに至つて、

貧富の懸隔は紙一重である。

日清戦争後、李鴻章は借款を得るために歐米に旅行した。其時、彼は年七十を越え、齒が悪くなつて肉などが食べにくくなつた。そこで、凡てのものを繊切にして油でいため、薄葛の汁を作つた。これが、即ち「チャプシウ」の起原で、字で書くと「李公雜碎」で、紐育の支那街の宵夜店で賣り出され、物數奇の亞米利加人の嗜好に適した。前記の「全家福」と殆ど同様なもので、一は妻の目形に切り、一は織切である。さうして、乞丐料理は自然の集合であるから、大塊小塊不揃ひである。相違點はたゞそれだけである。

南京には、剩り物が無い。家々の残飯は蒸し返したり、粥にして食ふ。宴會の残肴はボーイが食ふ。乞食は、春夏の候にはけんげを食つてゐるさうだが、冬期になると凍餒を免れない。そこで「紅卍字會」などが此地に最も早く起り、空地に天幕を張つて鍋釜を置き毎朝一回粥の焚き出しをしてゐたが、この種の施與は明清の昔もないことはなかつた。即ち琉璃塔で、有名な報恩寺の臘八粥であつた十二月八日前に僧侶は托鉢して歩き、胡蘿蔔、大根、豆、雜穀の剩り物を集めて、當日寺前に粥を作つて貧民に施與した。

李鴻章は、常に雜鷄十數羽、鴨十數羽、火腿の極めて佳き部分を十數斤加へてソツプを作らせた。新來のコツクはその吩咐を恪守して作つたところ、老コツクはちろりと眺めて、「お前、そんなソツプぢや、殿様のお氣に入らない」と、柄杓に數杯水を汲み入れて薄めて出した。

袁世凱や張作霖は、紅棗といふ一種の榮養食を取つた。これは婦人に關係のある紅棗でたゞの紅棗ではない。

孫文は、晩年に福建料理を好み、上海小有天の伊府麵など最も愛用したものだ。蔣介石は、軍人の暖食を嫌らひ、支那軍の弱きゆゑんはそこにある、といつて、日本人のやうに冷飯を食ふ習慣を作らせた。以前の支那兵は、食事の時には戦争をやめて、餅を焼いたり、饅頭をふかしたりした。冷飯を食ふと病死するとおもつてゐたのである。第一革命の時、蔣介石は革命に参加するため、越後新發田の聯隊を辭去し、酒の代りに冷水を用ゐて隊友と袂別したことを、非常に勇氣のあるやうに彼の傳記に稱讚してあるが、日本人の眼から見ると、一寸可笑しくなる位だ。

× 雨花台の風

雨花台は、一寸小山の親分といふ地形のところ、附近には大小の小山が數多くある。恐らくこれは、速い昔の土饅頭の跡であらう。こゝを風揚げの場所としたのは、全くいゝおもひ付きである。おの／＼の山に、人が群れ居て、形の變つたさまざまの風を高低まぢ／＼にあけてゐるところは一片の畫である。

長いのは、十數間にも餘る蜈蚣風である。それは、數十個の風を連繫したもので、左右の脚が舵と

なり、浮揚力と中心を保つてゐるので、いかなる場合でも墜落するきづかひはない。

又梅鉢形の風は、絲目が非常に長いので、上空にあがると、風の體が水平になり、水中に花を泛べたやうになる。事實、花にちがひない。梅鉢の各瓣は五彩をほどよく彩つて調和してゐるから……。むかし梁武帝の時、なんとかいふ偉い坊さんが、こゝでお説教すると、天に感じて花を降らした。それが雨花台の縁起である。事實この風を眺めてゐると、天女撒花のおもむきがある。

又蟬形の風は、蟬のやうな呻りを發して揚る。蛙形の風は眼玉をぐりぐり廻してあがる。風の上部に二つの窓を設け、蓋が廻るやうにできてゐる。

金陵大學の風は、亞米利加の自由鐘形のものであつた。それにはベルが取付けてあり、手繰り上げると、リン／＼と鳴る。

箱形、籠形のものもある。箱のお化けか、籠のお化けか。風月無邊とは、なるほどうまいこと題したものである。

其他鯨もある、猫もある。猫は頭と體と脚尾の三つの風をつらねたもので、細工に無理があり、蜈蚣のやうな自然味がない。

もつとも微細なものに、蚊蜻蛉の風がある。絲が眼に止まらないのは、スガ絲を用ゐてゐるのだ。

これらを見ると、日本の風など簡單なもので、羞かしいやうな氣がする。この調子でグライダーなど考案したらうまいこと作るであらう。

蔣介石が新生活運動を提唱した時に、時の行政院祕書長褚民誼が風揚會を催した。いはゆる禮儀廠靴には關係がなさうだが、國粹といふ意味を採つたのだらう。新聞などには漫畫を描いて、大に冷評かしてあつた。

風揚げは、上海では舊正月の催しであるが、こゝでは寒い時にはやらぬ。四月初め、清明節、柳が芽をふき、桃杏が綻びる頃、北方遙かに紫金山がその名の通り紫色にけむり、眞近の南の樓門の内外には、寺院の葦や民家の化粧瓦が白壁を黒くふちどつて、或は魚の尾緒の如く、或は鳳翼の如く、或は波濤のうねりの如く、おちこちに參差して、城壁の西側には遠く長江が銀の帯を見せ、戎克船が揚羽の蝶のやうに帆をあけて泛んでゐた。

雨花台にはさゞれ石のやうな彩石を出し、模様によつていろ／＼風雅な名目を附してゐる。又天下第一泉といふ茶館もある。格別風味の好い水でもないが、城内の水が悪いからこの水が特に目立つのであらう。

郭 公

去年の六月七日、朝七時から八時までの間に、本郷の菊坂町で、郭公の聲を聞いた。この邊は現在人家が密集してゐるが、私の住所の裏座敷から見ると、木立が所々にあり、もと溪谷らしい一すぢの

道路を控へて、眞砂町の岡に面し、表座敷の方は、溪谷より十尺以上も高い菊坂町の本道に接し、向側の人家は臺町の高臺を負ふてゐる。その方面には長泉寺の鐘などがあつて、三階建の下宿屋の一方には、二本の銀杏の老樹が雙塔のやうに聳え立ち、少し離れて西片町の森や遙かに植物園が模糊の間に見え、共同印刷の大ビルディングもあるが、とにかく郭公はかういふ地形を好んで飛んで來るらしい。少年時代には、三谷の待乳山が郭公の名所であつた。あの附近には、隅田川を挟んで所々に並木や小森があつた。何かの隨筆に出てゐるが、觀音堂に耳掃除人がゐて、唐様の服装をしてゐたとある。恐らく當時渡つて來た明の遺臣か何かであらう。耳掃除は支那人得意の妙技で、小道具が中々多く、今でも盛んに行はれてゐる。

觀音で耳をほらせてほととぎす

其角は耳掃除をさせて、待乳山へほととぎすを聴きに行つたのであらう。高尾の「君は今駒形あたりにもあすこから餘り速くはない。少年時代に注意したら、随分郭公を聴いてゐたのであらうが、しかし私は今度初めて東京の眞中で郭公を聴いたのである。

その郭公の啼聲は、島津四十起宗匠に教はつて、支那で初めて知つたのである。

同君は大正十年頃、芥川氏を案内して楊州にゆき、水邊の柳の並木で盛んに啼く鳥の聲を聞いて、平山堂の支那和尚と筆談して郭公なることを知つた。彼は翌十一年、南京の十廟口（チキョウグチ）に私をたづねて二晩泊つた。そこは一町ばかり隔て、北極閣（キョクカク）に對するところであつた。郭公は、山裾のこんもりした柳

の木の邊で啼いた。初めの日は、鳩の聲に紛れて聴き分け兼ねた。が、次の朝ハッキリ聴き出すことができた。其時、私は五福街に引移る間際で、北極閣の郭公とはそれきりお別れになつた。しかし其後も五福街で注意をしてゐた。五月十六日の朝まだき、眼を覺ますと、

へツ、ホツ、ホツ。

そら來た、と耳を澄ましてきいてゐると、

ヒユツ、へツ、ホツ、ホツ。

その聲はだん／＼堅晶になつて十六日から二十日まで、夜も晝も啼きとほした。殊に、濕氣の多い曇天の時などは、

カツコン、カツコン。

と空一杯にピン／＼響いた。妻は、影繪の如くちらりと見えて、一直線に天翔つた。恐らく、こゝかしこの森つたひに轉々廻つて來るのでもあらうか。

ほととぎす南京城をすぢかひに

ともじつたところが、脱線ではない。

さて菊坂町の郭公は、その日、一時間許り薄霧のかゝつた森を啼き廻り、日が照り出すと聲を歇めて、それから決して訪ねて來なかつた。だから一年一度であつた。

私はなぜこんなことを書くのか。その頃、放送局が生駒山のほととぎすを中継し、アナ君が骨を折

つて紹介したが、私の耳には驚ばかりきこえて、肝腎の郭公は更にきこえなかつた。さうして私は、實物を直接東京市内で聴いたのである。しかしアナ君が紹介したのはいはゆる一聲の方の杜鵑かもしれない。杜鵑は真近で見たことはあるが、直接聲を聴いたことはない。

上海の六三園で、杜鵑を長崎から取寄せて二三の新聞記者を招き、その披露會に茶席を開いたことがある。嘴は鷹のやうで、體は肥えて鳩のやうに脹らみ、胸は銀色に光り、漆黒の斑のある美しい鳥である。或夜啼いたさうだが、ペケツを叩き付けたやうにギヤツと言つたさうだ。ほととぎすといふのは、その發聲から來たのであらう。こんなことは知つてゐる人が聞いたら可笑しいだらうが、ほととぎすのぎすは、恐らくそのギヤツといふ聲ではなからうか。東京人の所謂「ほととぎす」は郭公の方であることは慥かだ。

「てつべんかけたか」の質問的抑揚は「カツコン、カツコン」の抑揚と同じである。支那では「割麥カキマキ」或は「淘米下鍋」と聞く。

これを「てつべんかけたか」の抑揚でよめば支那語の抑揚がおのづから解る。

郭公は、里へ出て來る鳥で、高踏的の詩人はあまり喜ばなかつたらしい。

今、蔣介石が引込んだ九江、あの邊には随分杜鵑がゐるのであらう。山脚、山石榴、一名杜鵑花、杜鵑啼時花撲々、九江三月杜鵑來、爛綬一樹十八株、などと白樂天の詩にあつたやうである。これで見ると、随分啼くやうだが、日本では一聲のやうに書いてある。

下
郭公
茶
不

一聲は月が啼いたかほととぎす

ほととぎす啼きつる方を眺むればたゞ有明の月ぞ残れる。

これは恐らく郭公ではあるまい。

季節も、大陸と島國の相違で、日本の方は大分遅れてゐる。南京は、冬は随分寒くインキなど凍つてベンが動かなかつたが、夏に向ふと俄に暑くなる、で郭公も幾分早く出て來るのであらう。

大佛待の芝居

滬杭甬鐵道沿線の嘉興では、毎年、暮から春に掛けて「大佛待」といふ行事が行はれ、猪羊を初め種々の御馳走が作らるゝ外に、生果、蔬菜を設けて神前に供へ、一晝夜の間、儀式と餘興の交ぜこぜの一種の里神樂を催し、會合の人達はめいめい供物を持参し、神を送つた後で、大に啖らひ大に飲む。これを「吃神酒」「酬神之敬」などといひ、五穀豊稔商賈繁昌を祈るのである。

この行事は、いつごろから始まつたか知らんが、云ひ傳へに據ると、

むかし唐の大詩人杜甫が京から故郷に歸る途中、南に向ふ多くの官船に出逢ひ、船頭達の話を耳にすると、杜府明神の神酒を飲みにゆくのだといふ。杜甫はさういふ社の名前を會て聞いたことが

ないので、不審におもひ家に歸つて来た。家では恰度大佛待ちをしてゐたので、幾柱の香を焚き酒を供へ恭々しく伺候すると、ふしぎや酒杯はチン／＼と鳴りひびき、今、注いだばかりの酒がカラカラに干いてゐたので、圖像の神々を見ると、いづれもほろ酔ひ機嫌で、地紙は濡めり鞠躬如たる有様に、情ては今のは神船であつたかと氣が付き、心の内に秘めて、引續き酒を薦め、夜を徹して神を送り出すと、外で俄に船を漕ぎ出す櫓拍子の音が聞え、夜が白むと共にさばかり群集してゐた船が、一艘も見えなくなつた。

かういふ昔噺が「大佛待」の來歴で、此地方特有のおもしろい行事である。喉嚨先生はこの行事を行ふ道士で、俳優を兼ねてゐる。

喉嚨先生の唱は、殆ど俗語で組立てゝあるので、誰にも解り易く、節廻しも東郷調や紹興調のやうな聞きづらいものではない。唱には一定の順序があつて、先づ神迎への爲に神佛の出身を陳べ、巫官を派遣して呼び迎へる所作あり、巫官が出發した後で正歌を唱ふ正歌一段を唱ふことを「贊一段」と稱し、一段を贊するには、約二時間ほどかゝる。さうして一句或は二句毎に、側の人が「柳浪月」「柳浪月」と附け加へ、これを和唱と稱し、時として十八柳に及ぶことさへある。即ち、

「柳呀浪月、柳呀浪月、浪浪柳月、柳呀浪月、柳呀浪月、浪柳月、月之浪柳月、柳呀浪」

などである。如來觀音の讚美から始まつて土地神、竈神の讚美に終る。併し實際は何處から神迎へして何處へ神送りするやら、更に解からない。その中間には賑やかなお囃子入りで結婚の一段が這入る。花嫁花聲に扮した者が、紅白粉を塗つて出で、滑稽な問答を交換する。それが済むと、今度は「送元寶」が始まる。芽出度の言葉の下に、身振り可笑しく各人に木製の馬蹄銀を配布すると、貰つたものは大喜びで、銅貨、小銀貨、思ひ／＼に若干の返禮をする。中には、紙幣や大洋（大銀貨）を奮發する者もあるので、その上がり高は中々馬鹿にできない。

其他「鬧西筵」といふことも行はれる。即ち、西洋宴會の騒動といふわけで、アラビヤ人が三百六十種の支那商人に損害賠償することを仕組んだ喜劇である。これは上海で蓄音機の譜に這入つてゐる位のものであるから、彼等の創作として上乘のものである。

喉嚨先生は道士ではあるが、俳優でもある。從來、戴六、小寶、好寶などは名優の聞え高かつたがいづれも物故し、現在、杏齋子、健生などが、彼等に繼いで好技を見せてゐる。ところが、近來農村不況のため大佛待の催しをする者が少くなり、彼等は収入の道を失ひ、上海進出を思付き、彼等の宗教から離れて、藝の道に獨立して立つて行かうとする計畫がある。いづれ大世界とか、樂園とかへ出場することになるのだらう。

上海六馬路邊では、芝居の小道具や太鼓や胡弓など賣つてゐる店が多い。この邊の表二階や路次の中には、手品師、女役者、講釋師、輕口漫才に似たやうな藝人が多く住んでゐる。これを支那流にい

ふと、大小戲法、髦兒戲、說書、雜黃、彈詞、開口笑などといふ者である。この人達は大概大世界、樂園等の娯樂場に時間極めて出演し、或は臨時に宴會の餘興などに、つまらぬ藝を見せてお茶を濁してゐるが、其中に紹興吹道士といふ看板を掛けてゐる者がある。道士も今は藝人の一つになつてゐるのである。

或人はいふ。

「本來道教は其昔、老子が青牛に騎つて函谷關を過ぎ、道德經五千言を著し、道理を闡明したので、その功德のいかに偉大なるかを知るべきであるが、思ひきや、彼の後繼者は、彼の正統の衣鉢を受けず、岐路に入り、遂に道士といふ尊稱を受けながら、役者同様に絲竹を吹奏し、藝を賣つて飯を食ふ不届者が出て、元始天尊に若し靈あらば、九天の上に齒咬みをなし、此の不肖兒を叱責するであらうが、併しさうしなければ、飯を食つて行けない世の中になつたのだから、何とも仕方がない。」と。

又或人は言ふ。

「元來道教は哲學の一種であるが、佛教渡來後宗教に變じ、宣傳の方法を佛教に倣ひ、宣卷（或は賣卷）なるものを作つて、民間傳説を適當に仕組み、これに節づけして、おもしろく唱ひ囃し、民衆を教化したものである。日本でいふと、先づ說教節のやうなものである。しかるに、後來信仰衰へ、荒唐無稽の彼等の説を信する者が少くなり、本を棄てて末を取り、藝術の方面に足に向けて來たのである。民間藝術は、東洋ではかゝる方面から出發したものが多し。」

南京の名物

南京は、風景古蹟以外には甚だ特色の少い處である。

むかしは、江寧織造官を設け、清室の衣料を製作したので、南京緞子は天下第一であつた。これは一コマ何十本とかで、糸數が非常に多く、黒色無紋で生地が引締まり、色つやが好く、日本では南京縹子と稱し、徳川時代から婦人の丸帯、鯨帯等につかつて、大層珍重されたものだ。杭州産は模様もおもに作り、地質は遙かに落ちて北方ではあまり珍重されない。そのわけは、北京は埃が多く、目の荒い緞子だと埃がこびり付いて取れないが、南京緞子は羽根箒で一寸ハタくと、埃はキレイに取れてしまふ、織目が緻密で滑らかなのである。なにゆゑにかゝる技術が勝れてゐたかといふに、絲の糊付に工夫を凝らしたからである。南京には何年目かに一度臘臍膾が上つて來るので、それを捕獲して油を取り糊に交ぜ合せて糸に付けると、織込が引締り、光澤が十分出るのださうだ。杭州にはこれがない、ゆゑに南京緞子よりも劣るのであるといつてゐる。だが現在は、どちらも外國織機を用ゐる、手工に念が入らぬから、大同小異である。

次に、名物は家鴨である。これは南京の土地で出來るのではない。長江上流地方から集つて來るのである。貯藏法は可成り上手だ。こゝの板鴨や鹽水鴨は他地方に無い美味である。板鴨は鹽漬で乾燥

したもの。鹽水鴨は薄い鹽水に漬けたもので、つまり家鴨の淺漬である。焼鴨、燒鷺も名高いが、鷺は大あぢで旨くない。

次に、豆腐干である。「南京豆腐干」と歌にも唱はれてゐるが、他地方と比べて、格別勝れたものとも想へない。尤も、朝の茶館に干絲（カシユ）を賣つてゐるのが、特色といへば特色だが、これは揚州鎮江にもあるので、この名物とはいへない。かういふものが賣れるのは、豚を食はぬ四々教徒が比較的多いからであらう。

歐洲戰の時、下關に和記洋行といふ英人經營の食料商ができた。恐らく今でもある筈である。それは、冷凍装置の三千噸級の汽船をいくつも持つてゐて、南京の鴨、雞、玉子を買ひ集めて、直接歐洲に積み出した。もちろん南京で生産するわけではない。津浦線を利用して安徽の、滁縣だの或は我克船や筏を利用して長江上流筋から運んで來たものである。なほ牛肉や豚もあつた。これは徐州や如皋から運んで來たものである。

南京藝妓には、何の特色もない。彼女等は揚州人が多い。彼女等の歌は揚州歌を取つてたゞ少し揺りを多くした丈けである。揚州歌の「打牙牌」は、南京歌の「二姑娘倒貼」である。文字では一寸説明が出来ないが、向ふへ行つて聴けば自ら解ることである。南京ホテルの歌は、後者の節を取り、一時非常に流行つたものだ。支那の代議士と藝妓がホテルに宿泊中、火事に遭つて焼け死んだ歌である。後來上海にも同様の件があつたが、それは國民黨員であつた爲めか、歌にもならなかつた。或は

南京が先鞭を付けたせるかもしれない。

南京料理は、揚州鎮江風で揚州鎮江に劣り、何の特徴もない。恐らく特産物がないせゐであらう。鎮江には、春になると、鮓魚が上つて來る。あの骨の多い魚を一々毛拔で抜いて巧みに料理する。揚州では、活きた小蝦を箸で挟んで味噌をつけて食ふ。南京には、天下の食通袁子才が永住して鮓をほめてゐたが、現在の鮓は退化したのであらう。格別うまいものではない。これは上海にゐると、よく解ること、上海には各省の料理屋があり、北京、廣東、四川、福建、鎮江、寧波などと各々特色があるが、金陵館は特色がないので、だん／＼衰微して、現在殆ど店がないのである。私が南京にゐた頃は、秦淮の長松が最も全盛であつた。それは日本人が盛んに行つたからで、土地の人は、南京料理を天下第一のやうにいつてゐるが、彼等は上海の料理屋を餘り知らないからである。外に「海洞春」「問柳蔭處」などといふおつな名前の料理屋もあつたが、みな振はなかつた。

酒も、蘇州までは好い紹興酒があるが、南京は北方趣味で、燒酒を飲む者が多い。たゞ萬全の紹興酒は甚だ好かつた。こゝは朝のうち茶館をひらき、午後から料理屋になる。又大功坊の半畝園の料理は可成り好かつたやうだが、これとても南京として何の誇るべきものがない。もと大官の邸宅の半畝（百坪）の庭が呼物であつたらしいが、蘇州の庭と比ぶれば、到底問題にならぬ。

庭といへば、南門附近に胡家花園があつて、可成り廣かつたが、極めて俗悪なものであつた。こゝに南京道院があつて、扶乩（砂字占）をやつてゐるが、これが後の紅十字會の本元であつたかもしれない。

紅樓夢の大觀園跡といふ袁隨園の墓石のあるほとりは、烏龍潭ウロンタンから遣入つて風景も甚だ好かつたが、殆ど荒廢して庭らしいあともない。むしろ清溪に臨んだ鑑園などの方が小じんまりして好かつた。こゝは秦淮から畫舫を浮べて清溪に入り、遊興の終點であつた。

今の國民政府は、督軍府の跡である。すつと前には洪秀全がこゝに棲んでその庭跡が残つてゐる。池に面して、漪漣閣といふ建物があつた。南京はその古めかしい建物を中心に、學校、官衙、病院、ホテル、銀行の街となり、舗装道路や水道まで新設して、ヤングチャイナの理想通り、すつかり近代装したがそれが亦排日の源泉となつたのである。

× 明太祖の悔

むかし、大南京城の東部の内側に縦二千五百米突、横千七百十五米突の長方形の城壁があつて、その中にもう一つ横縦七百五十米突の城壁があつた。城壁の四方には、六つの大門と其他の小門があつた。門の上には樓がある。樓の上には黄色の琉璃瓦が載せてある。それが、中心に進むに従つて、益益密集して宮殿となる。その殿と稱するものは、龍を裝飾の主要とし、その宮と稱するものは、鳳を裝飾の主要とする。さうして、上棟から降棟に掛けては黄碧を交じへた美しい浮紋の琉璃瓦を以て組立てられてあつた。私は金の雲龍に巻かれた丹塗の丸柱を見たことがある。それが何本となく規則た

だしく立並んで、綺麗に組立てた燧梁ひうちりょうや飛梁を交じへてゐた。拱持かぢの上には、五彩の花弁の間に珍奇な鳥獸や奇怪な仙人が金碧燦爛として躍り狂うてゐた。彫刻は念入りで溝彫の中に浮彫がある、彩色は行届き、クスんだ中からハデな色が出る。

長い整しい敷石は、低い石階につらなつて石欄でかこんだ壇に上る。壇上は一面の石畳み、即ち宮殿の前庭である。宮殿も亦石欄を以て圍み、牡丹華、海石榴華、瑪瑙地、玻璃地の石刻を見る。私はこゝまで來ると、もう迎も眼をあいてゐられないほどまぶしくなつた。さうして、裝飾があまりに入組んでゐるので、なにを見たか、すつかり忘れてしまつた。たゞ、南京の東部が黄いろい瀬戸物化してしまつたことを想ふのみだ。さうして、その瀬戸物は天帝の玩具といつて、然るべき壯嚴華麗のものであつたが、それが人間の作つた住居で、その人間は朱元璋といふ土匪の親分から成上つたといふ噂のある猩猩のやうに頷の長い明の太祖であつた。太祖は、かゝる結構な家に住み乍ら嘆息した。

「乃公は飛んだ縮尻をした。いやもう此宮殿の住みにくいこと。もと／＼平湖を埋めて作つたものだから夏は暑く、冬は寒い。官女や宦官の中に脚氣病やリユウマチスに罹る者が多いのを見ても全く地の理をあやまつた。そんなことは些細のことだが、つく／＼南京の地理を見ると、首が昂つて中が凹み、擦鉢の底のやうな形で、要害の悪いこと夥しい。乃公は出來上つた時、すぐに氣が付いたが、今更遷都するわけにはゆかない。これは子孫に残す大なる失敗であつた。乃公はウツカリ歴史にとらはれて、孔明先生の昔の言葉を過信した。じつさい孫權の頃とは時勢がちがふからな。」

尋妻廣告

九八

人が失踪しても、日本ではこれを廣告に出して騒ぎ立てることは、近來はなほ少なくなつたやうである。警察に對する信頼の尺度は、この尋ね人の廣告に依て測定される。

支那では尋ね人の廣告が非常に多い。新聞に、辻貼りに、警察門前の掲示に、いづれも寫眞を添へて懸賞で搜索してゐるが、警察みづから無能を廣告してゐるのではないかとをかしくもなる。

尋ね人の廣告には、一定の書式がある。長方形の框の中に、上部に大きく「尋人」の二字を横にならべ、「人」字は必ずさかさかさに書して「Y」といふ形であらはず。これは人の注意を引くために、わざとさかさかさに書いたのかと思つたら、決してさうではないので、道教の護符から出た一種のまじなひである、とはマサカ想はなかつた。すなはち「倒」字を分析すると、「人到る」であるから、「人」を倒さにとすると、人が歸つて來る意味になる。まことに五千年來の國風、天神天將、妖怪變化をナーチュ（拿去）した茅山道士の智慧の結晶がこゝにもあらはれてゐるのである。

「尋人」の下には、姓名、年齢、出た時の服装、容貌、姿體、口音の特長などこま／＼書いてあることはいふまでもないが、その次は尤も重要な一項目で「仁人君子、もしその行衛を知り、搜出して某地某所に送つて來た者にはお禮が何程……」。

支那は小説「鏡花縁」に書いてあるやうな純粹の君子國ではない。昔から君子と小人の二階級に分かれ、君子は少なく小人は多い。故に一般大衆の助力を得んとするには、勢ひ何程かのお禮が必要である。古への聖人はすでに被仰つた。「君子は義に喩る、小人は利に喩る」と。故にこの文句も畢竟聖人の教條から出たもので、末に「お金はチャンと積み立てゝあるから、食言することは決してない」と誓つてゐるのも當然である。

この尋ね人には、老人は殆どない。子供も少女も甚だ少い。十中の八九までが既婚の婦——妻妾である。藝妓が受出されて富家の妻妾になることを「お湯に這入りに行く」といふ。垢（借金）を洗つて、又出て來ることをいふのである。最初から長居は無用の考である。だからその半面に「尋ね人」の多いことが容易に首肯される。

日本には「尋ね犬」の廣告は可成りある。又稀れに見る尋ね人も老人や子供の方に多い。さうかといつて、日本でも嬖に逃げ出されて血眼になつて搜してゐる男が随分ないでもないが、これを廣告に出して懸賞で搜索することは、未だ見聞しない。（我々の常識としても、一寸羞かしくて出來ないやうな氣持がする。大體、女に逃げ出されるのは、男の方にも缺點があるので、黒闇の恥を明るみへ出すやうなものである。ところが支那では平氣でこれをやつてのける）

何萬圓のテリヤをなくしたから、何萬圓の懸賞で搜し出す、人間は何萬圓にも替へられないから警察を信頼して搜出して貰ふ。（いよく警察も手を焼いた時には、懸賞で搜索すること亞米利加など

でも行はれてゐるが、日本のやうな隅まで見とほしの國はこんなことをする必要もないのであらう。犬は匿して置くことが出来るが、人は匿して置くことが出来ない。失踪には必ず死の影が伴ふ。此等の客觀的條件から考へると、支那の社會は女を未だ動物扱ひにしてゐること、従て女の失踪は物質的損害の意義を含んでゐること、成年の女は物質的價値が高いから、廣告することが多く、懸賞金も高いが、幼女は物質的價値が低いから、廣告することも少く、懸賞金も低いこと。警察力の微力なこと、人を匿くして置くことが出来ること、尋ね主は失踪者の安否を氣遣ふよりも、その背徳を憤ることが多いこと、等々であらう。

四月の申報に丹陽縣延陵、汪某の尋妻廣告文が轉載されてゐる。彼は妻に逃げられたが新聞廣告する丈けの金がないので、みづから筆を執つて數百枚の尋妻廣告を作り、これを辻々に貼り出した。その文に曰く、

我がいとしき妹、梅霞よ。お前はなぜ歸つて來ないのか。お母さんは心配して病氣になつたよ。子供は飢に啼き、寒さに怯えてゐる。晝間は四方八方たづねめぐみ、夜ははらわたが九轉する。家の中の事は誰もやり手がないので無茶苦茶になつてゐる。結婚してから、またゝくまに五年は経つた。私はお前を粗略にした覚えは更になが、お前は私を鏡箱にして毎日々々外へ出歩き、夜更けて歸ることもある。女同志のつきあひだといふけれど、どうだかしたもんぢやない。あゝ何たる

不運なことであらう。鐵のやうに冷たく、石のやうに固く、お前はよくもそんなに邪慳な心におなりだね。私はせつせと働いても、毎月たつた八圓しか這入らない。暮向きの心配もなみたいなことぢやないが、今までそれをお前に隠して、お前の入用のものはどうやらまに合せてゐたのだ。きのふお前のお母さんが來て、私と一緒に大泣きに泣いた。三日を限つて必ず捜し出します、とお母さんは誓つたが、期限が來ても歸へらなければもう我慢が出來ない。命にも拘はることであるから、いよく訴へ出るばかりだ。併し私はお前が後悔して歸つて來るのを望んでゐる。この廣告を見たら、すぐに歸つておいでよ。お前は屹度お金に釣られてゐるのだ。鏡は破れても元へ歸ればまるくなる。私は決してお前を咎めない。夫婦の情合の深いことを知つてゐるから。どうぞお慈悲だ。早く歸つて來て呉れ。乃公が自殺しない前に。

いとしき妹、梅霞さま。

どうもこれは少々のほせ過ぎてゐるやうだが、我々が可笑しく感じるほど、彼等は可笑しく感じないやうである。むしろ張三李四の同情を得る一つの手段でもあらう。

支那の上中流階級は、禮教を守ることが、常識化してゐるので、結婚の手續きも二千年來の舊慣にとらはれ、結婚したら最後、女の再婚は不可能である。これは彼女を中心として一家一門の恥辱となるので、家の格式が高ければ高いほど絶対に許されない。極端になると、いひなづけの夫が死んでも一生獨身を守らなければならぬ。福建の安舎がそれである。いかに勇氣のある女でも、一家一門と絶縁してまで、再婚する決心はつかぬであらう。支那男は殆ど全部がフェミニストと言つてもいい位で亭主を聲に敷かぬ女房は殆ど無く、彼女は決して男に壓迫されてゐるのではない。禮教といふ鐵則の下に一家一門に壓迫されてゐるのである。若しさうでもなかつたら、あゝいふ我儘者だから、きのふは東けふは西を、随分平氣でやつてのけるに違ひなからう。社會科學を嚙つた若い學者先生などは切齒扼腕して父權社會を咒つてゐるが、いづくんぞ知らん、これは諸君の祖先が腦漿を搾つて、かの放縱なる夏姫を處理し、男性の利益を擁護して呉れたので、さればこそ、世は淫亂に流れず、二千年の文化が保たれたのである。

支那に較べると、日本は甚だ男子崇拜である。これは紫式部の「源氏物語」などが大に影響してゐるのであらう。紫式部は我々男性に取つては有難い女神である。しかし男性崇拜の日本女は決して不幸ではなかつた。これに反して、女性崇拜の「紅樓夢」を讀んだ支那女は却て不幸であつた。

民國十八年の革命は、支那の結婚制度を根本からくつがへした。その結果、婚約を破棄する女が輩出し、所謂、自由結婚、亂婚などもさかに行はれた。しかし一面には黃浦江に身を投げる女が著し

く増加した。貞操蹂躪の訴へが日々に持出された。夫婦は離婚と離婚の中間の存在であつた。個人主義の社會で行はるゝ結婚の方法が、家族主義の社會で行はれた。思想を充分咀嚼せず、機構を替へたからである。

上中流の男女が斯の如き大動搖を來たしてゐるにも拘らず、禮教に拘束されない下流社會は相變らずのんきなものであつた。女の再婚、三婚は日常の茶飯事である。彼等の、女房に對する觀念は、もと／＼金を出して買つたものであるから、困つた時には賣つても差支へないといふ原則である。しかし情合の深い夫婦は、いかに貧乏しても、おい、それと離れられるものではない。そこで本題の「典妻」といふことが行はれる。典妻は利財の道の進んだ寧波地方で尤も多く行はれる。これは何年間の契約で、損料をさき取にして、女房を貸與するのであるから、期限が來たら無償で返つて來る。丸で夜具ふとんでも貸すやうである、と笑つちやいけない。日本だつて貧乏人は女房を酌婦に賣飛ばし、これを請出するためにセツセと縁いでゐる例も少くはない。しかし貧乏人が借金すると中々返へせるものではない。利子に利子が添ふからである。この點に於て典妻は實に貧乏人の福音である。一方借りる方も亦貧乏人で、妻を買ふだけの資力がなく、だん／＼年を取つて子供がないので心細くなり、「不孝は後嗣なきを以て第一とする」と、聖人も被仰つたぢやないか。自分の亡き跡に香華を手向ける者がなければ、戸惑ひ幽靈となつて、永久に生れ變ることが出來ない、といふのが彼等の信念である。この信念は人口蕃殖に尤も關係のあるもので、支那四億の人口は、前の聖人の教とこの迷信で生み出

したのである。典妻は實にその補助機關である。

靈 藥

支那の藥には二つの種類がある。實驗して藥效を認めた藥と、只珍貴なものは利くといふ概念の下に、陰陽五行説から考察した藥。一は歸納し、一は演繹したものである。

むかしの支那人は正直で頭がいい。神農は百草を嘗めて「本草」を作つたといふが、これは古代の方法として容易く肯定される。動物は天性有毒、無毒を知つてゐる。しかし人類は無毒のものを取るばかりか、有毒のものをも藥とした。百種の草は百種の味がある。アイヌが毒矢の塗藥を作るにも、藥を煮詰めた上、利くか利かぬか、嘗めてみるのである。利いたら毒に中るからマキリで舌を削るのである。舌ほど敏感なものはない。かういふ實驗を経てゆけば、時には新發見もあるだらうし、だんだん良藥が殖えてゆくのだ。ところが支那ではいつしか邪道に入り、實驗を棄て、理論の上に藥を求めた。恐らく秦始皇や漢武帝の無理な要求に應じたのであらう。さうして末の世になればなるほど、その方面に力を入れた。さうして道士の仙藥はたいていこの方面に屬した。説明はいかにもおもしろいが、藥の材料は甚だいかゞはしい。

明の李時珍の「本草綱目」は種類が極めて多く、一見丰大の著述であるが、よく見ると藥の範圍を

越えて宛ら博物書のやうな觀を呈してゐる。藥效の説明も甚だ奇抜で、神仙談をよむやうな感じがする。一夜にして白髪が黒くなり、老いて稚齒が生えた、といふやうなことである。清朝の末期になると、流石に靈藥も馬鹿々々しく見え、瀝黃といふ支那の漫才がこれを諷刺の材料にしてゐる。

「白い頭の鴉と七十二の屁玉を煎じて飲めば治ほる」

もちろんこれは出鱈目だが支那の貴重藥の一端を示してあまりある。

魯迅がその著「呐喊」の序に記して曰く、

……四年ばかり、いつもく——殆ど毎日、質屋と藥屋の間を往來した。年頃は忘れたが何しろ、藥屋のデスクが私の背丈けと同じほどの高さで、質屋のデスクは私の背丈けよりも一倍ほど高かつた。私は一倍高いデスクの方へ著物や簪を運び込んで、番頭に馬鹿にされながら金を受取つて、それから今度は同じ背丈けのデスクの前へ行つて、長わづらひの父の爲に藥を買つた。家へ歸つても何やかやと別の事でいそがしかつた。處方を出したお醫者は有名な大先生で、所用の藥も亦特別奇妙なものであつた。

冬期産の蘆の根。三年の霜にかゝつた甘蔗。初めて番つた蟋蟀の雌雄。實を結んだ平地の木。

魯迅はその後K學堂に入り、全體新論や化學衛生論を讀むに及んで、支那醫者が意識、無意識の中に詐欺をしてゐることが解つた。

前のは諷刺で後のは實際であるが、實際と諷刺の距離が甚だ接近してゐることは、誰が見ても明か

である。

處女の經血や童便や童尿を藥用に供することは明時代の發明であらう。前者は梅子或は紅鉛と稱し、後者は龍虎水、結晶したものを秋石と稱してゐる。「遵生八箋」にその製法が詳しく書いてあるが、龍虎水をあのやうに水でさらして仕舞つては、あとに何が残るかと思はれる。

竹は竹で接ぐ、人間の壽命は人間を用るなければ永續しない、といふのが彼等の理論で紅鉛を飲むのである。最も珍重するものは、首經即ち梅子である。要するに女は首しめの月經のある前が陽で、その後は陰になる。故に陽の極を飲めば男は壯健になるといふ愚論である。現在でもこれを信する者が甚だ多く土匪頭目などは、それがために童女を誘拐し、數十名も養つて置く。人浚らひが美女を殺して毛氈を染めるといふのは此話を取り違へたのである。誘拐しても決して殺しやしない。彼等は首經を採つて藥用に供するのである。土匪ばかりではない。袁世凱とか張作霖とか、張宗昌とか、支那一流の大政治家が梅子を取り、紅棗を食ひ、蟠桃酒を飲むといふ噂があるのだから驚いて仕舞ふ。しかし淵源が中々深いのであるから、彼等が信するのにも無理はない。明の嘉靖年間、陶中達は、紅鉛を進めて、光祿大夫柱國少師少傅少保禮部尙書といふ榮職を得た。また盛端明と顧可學は秋石方を傳へて一躍大官となつた。かういふ記事が支那の歴史に載つてゐるのである。これを受けたのは世宗皇帝である。

強壯補血劑の中に、冷やす藥と温める藥がある。冷やす藥は朝飲む。燕窩イェンウオと眞珠の粉末である。

前者は清世宗の寵臣王壘望が愛用し、後者は高宗の寵臣和坤が愛用した。どちらも奢侈淫逸を極めて世代がかはると誅せられた。温める藥は晚飲む。人蔘、鹿茸のたぐひである。これだけではのほせるから「の藥で冷やすのである。

牛黄ニウワウ、馬寶マイボウは小兒驚癇の藥といはれてゐるが、強壯劑にも用ゐられる。いづれも病牛、病馬の肝臓内から獲たもので、牛黄は玉子の黄味によく似てゐるが、水中に入れると固くなる。私は未だ實物を見たことがないが、普通の牛黄ならさう大して珍らしいものでもない。西鶴の好色本にも出てゐたやうに覺えてゐる。馬寶は上海河南路の陳列棚にあるのを見たが、大きさは鴿の玉子位で、混濁した白色を呈し形は夜泣石に似てゐる。その色といひ形といひ、見れば見るほど變槓なもので、なるほど靈藥だなあ、と想つた。

牛黄は陝西甘肅、或は四川雲南産を西黄シウワウと稱し、廣東産を廣黄カウワウと稱して珍重してゐるが、しかし最上品は西藏産であるといふ。これには神話めいた話がある。或る靈牛が野原へ出て草を食つてゆくうちに、ふと仙草にめぐりあふことがある。その仙草は唯の草ではない。月の華が地上に落ちて種となつて生えたものだ。かういふ尊い草であるから、一旦牛がこの味をしめると、すべてのものがまづくなり、ひたすら仙草のあとばかり捜し求める。求めて得る能はず、遂に牛は何物も食はずして仆るゝのである。西黄はその仆れた牛の腹から得たものだ。又一説には牛が牛黄を胸を持つと頻りに鳴き吼える。夜、見ると胸のその邊が光つてゐるといふ。どうも膽石病の一種ではないか、それにしても馬

鹿に大きな固いものである。

珍貴な強壯劑はいくらでもある。しかしあまり一どきに喋舌つて仕舞ふと、道士に叱られるといけないから、この邊で中止する。次に賣藥屋の懺悔話をする。

今は昔の話になつたが、日露戦争後、日本の賣藥がよく賣れた。行商人は田舎に出張し、茶館に陣取つて茶卓の上に藥を並べて置くと、張三李四がいろいろ批評し初める。中にはむやみに最眞にする者があつて頼みもしないのに、盛んに廣告して呉れる。卓上の藥が一通り片附くと、いいかげんな所で切上げて次の茶館へゆく。すると途中でおい／＼と追掛けて来た者がある。その男はそばへ来て、實は楊梅毒に罹つてゐるのだが、藥はあるかといふ。「ある」「いくらだ」「これ／＼だと答へると、その男は「此處に金がないから一緒に来て呉れ」といふ。一緒に行くと、質屋の前で、「一寸此處で待つて呉れ」といひ、自分だけ中に這入り、暫くして出て来た所を見ると、半裸體、上の著物はぬいで仕舞つて、ツボンだけだ。さうして四五十錢の梅毒の藥を買ふのである。その藥は富山の藥だ。どうも氣の毒でたまらない。いつそ只やうかと思つたが、只やつたところで利かないものは仕様がな。金を取つた方が只やるよりも有難味が多いから、ひよつとすると利くかもしれないと眼をつぶつて賣つて仕舞つた。それ以來、彼は梅毒の藥を賣らない。これは上海島津氏の話だ。

私は南京に居た時、入口の左の部屋を警察の役人に貸した。彼は夫婦の中に一人の子供があつたが、當時身重で又一人子供を生んだ。産後の肥立が悪く出血していけない。私は懇意の日本醫者に紹介して實費でやらせるから診て貰へといつたが、亭主が排日で、許さない。さうして面當てでもあらか、わざわざ亞米利加醫學博士といふ大看板をあけた支那醫者に掛つた。支那醫者は處方箋を書いて指定の藥局で買はせるのであるが、或時妻君は英語で書いた處方箋を持つて来て、私に見て呉れといふ。見るとスカーレット、ピルと達筆に書いてある。新聞などによく廣告してゐる「紅色補丸」といふ亞米利加賣藥だ。こんなものを飲ませたところが、長血が止まるわけではない、と思つたが、果してその冬、私が上海から歸つて来た時には彼女は死んでゐた。醫學博士の處方箋が賣藥、この男は英語だけ知つてゐるのだらう。

山東の奥地に穴鏡を買ひに行つた男の話、彼氏は今、上海で新聞記者をしてゐる。彼氏の曰く、村の者から藥をせがまれて困つたよ。あいにく仁丹賣丹も持合せがない、少しはお世辭をつかつて置かないと、馬賊の手引でもされたら大變だ。窮餘の一策、ライオン齒磨を水にといてコップで飲ませたよ。ゲツプあゝいい氣持になつた、と病人は言つた。翌る日は腫物のある奴が尋ねて来た。なんにもないから靴墨を塗つてやつたよ。それでもこ／＼して痛みが止まつたさうだ。さういふことで、村人の感情を好くして、穴鏡を無事に運び出すことが出来た。次の村へ來ると飢民の娘が賣物に出てるた。お化粧をしてゐるのを見ると、ライオン齒磨！ どうもこれは小林の廣告をしてやつてゐるやうで、甚だ相濟まない。

毒物販賣業

一一〇

近頃上海では阿片を吸ふ者が減切り少くなつた。流石の支那も覺醒してかゝる毒物を嗜む馬鹿者が少くなつたかと思ふと大きな間違ひ、時代のテンポが馳け足になつて、阿片のやうな時間のかゝるものではまだるこくヨリ以上簡便な利き目の多い毒物を用ゆるからである。

わたしは今年の六月から此處に来て、十一月の今も尙ほ滞在してゐるが、其間阿片窟の手入は僅に一二件あつたのみで、紅丸摘發事件は實に五十何件に及んでゐる。

紅丸とは何であらうか。初め用ゐたものが紅色の小丸で一般に紅抽々と稱し、後ちに白玉、綠玉、灰玉等も出たが、皆初めの名に依て紅抽々で通じてゐる。

紅色補丸——スカールレット、ピル、これも紅丸と稱してゐるが、昔から賣擴めたアメリカの賣藥、補血強壯劑で、決してそんな毒物ではない。

では本物の紅抽々とは何であるか。

世の中は全く妙なもので、善意に作られたものも時と場合に依ると、全く其反對に悪用されて仕舞ふ。護身用のピストルも持手次第で脅迫用にもなる。最近作られた紅丸は、阿片中毒患者を救ふため

の良藥であつたが、或悪戯者がそれを睡で練やし付けて阿片のパイプで吸つてみたところ、それは阿片のやうな樹脂性がないから、氣孔が塞がらず、一ぶく二ぶくで充分な満足を得た。そこでこれや好いとばかり、早速改良し、いや改悪して前者にまさる毒物を作つた。なぜ、これがいいのか。表向き戒煙丸であつてみれば目的だから大ビラに賣出して、一向差支えない代物である。で暫くの間、取締規則の埒外にあつたが、だん／＼世間に擴まつて目的の真相が常識的になつてみると、捨て置き難いことである。

戒煙丸の主要材料はヘロインである。ヘロインは阿片の一成分を抽出したもので、習慣性が阿片よりも少いと云ふことで、最初醫者の間に珍重されたが結局多く使へば同じことで、阿片のやうな複雑性がないから、害毒も一本調子で強く来る。そのヘロインに乳糖と章魚の頭を粉末にしたのを練り合せたものが紅丸である。

章魚の頭がなぜ利くのか。兎に角之れを入れると、ヘロインの利き目が倍加すると云ふので、亞米利加製の戒煙丸には特に之れを入れたものだ。章魚はアメリカでは悪魔の標章として誰れも之れを食ふ者がいないから、或は彼等の迷信かもしれないが、兎に角利き目があるので入れた。しかし迷信は迷信で悪魔はやつぱり悪魔であつた。戒煙丸が紅丸に變じたのは章魚の魔力であつたかもしれない。

紅抽々が初まつたのは餘り古いことではない。わたしは昭和三年上海にゐた頃やうやくに耳にした位で、其後佛租界の阿片全盛期に氣おされ、一・二八事件以後の大禁止から紅ツ／＼が忽ち阿片に

取つて變つた。現在支那街に阿片專賣店が四十軒あり、税金を取つて公然免許してゐるだけ値段も高く、十匁二元四十仙もするので、安い紅抽々のために阿片の賣行が減じ、稅收の關係から紅抽々を厳しく取締ると云ふ噂もある。支那のことだから或はさうかもしれないが、紅抽々は阿片と違ひ、中毒を起すと救ひ難き状態になるので、租界當局と力を合せ厳しく取締つてゐるのは事實だ。一・二八事件の關北の燒跡は今も猶ほ放つたらかしで、殘牆の間に菰を掛けて乞食がうろ／＼してゐるが、最近四五名の者が、身に紫色の斑點を生じ黄いろくなつて死んでゐたので、毒殺ではないかと検屍してみたところ、いづれもヘロイン中毒であつた。

或日米屋の店前に乞食が立塞つて執念深く強請するので、店の者が押のけると、風を受けた麥藁のやうにひよろ／＼と倒れて其儘息絶えた。やれ他殺だ！ 病死だ！ と大問題になつたが、検屍してみると之れもヘロイン中毒であつた。漸進的の阿片が急進的のヘロインに變じた。上海ばかりぢやない。長江一帯に行き渡つて共產黨のテロ以上に人を殺してゐる。疲弊した農民は税金の掛つた高價な阿片を吸ふことが出來ず、猛毒と知りながらも此恐るべき戒煙丸を吸ふのである。さうして上海は製造元であり、集散地である。開港の初めがそも／＼阿片のために出來た市街で、歴史的にも亦動かし難い根を張つてゐる。

本年五月十三日エズラ兄弟が毒物密輸入の廉でアメリカで逮捕され、其連累者嚴子良は七月二十九日上海で處罰されたが、此エズラの父は共同租界の市參事會に度々選まれた人で、民國六年（大正六

年）まで洋藥公司を設け、租界内阿片輸入禁止の最後まで頑張つて專賣權を握つてゐた。當時の密輸入は洋藥公司以外の者を指したのであつたが、今は何人に限らず嚴禁してゐる。國際阿片會議などが開かれて流石の英人も世間體が悪く、民國六年以來、ふつ／＼思ひ切つたのである。

エズラばかりではない。ハートンでもマクペンでも所謂上海の五大成金は、罌粟の實のお蔭を蒙らぬ者は殆んどなからう。彼等は阿片で元金を作り、地所を買つて地價の値上りで儲け出し、或は競馬俱樂部のメンバーになつて馬券を賣つて儲けるとか。企業家としてはいとも憐れな淺ましい儲け方である。それと云ふのも支那人相手の商賣が中々面倒であつたからでもある。最初英國から品物を引いて倉庫に積んで置くと、問屋は賣口が悪いと云ふことを口實にして聯合して買はぬ。其實内地から彼等の手許にやんやと催促して來るのであるが、それには品物が未だ到着せぬと伴る。半年一年經つ中に英國商人は堪まらなくなつて安賣して仕舞ふ。それが爲め倒産する商館も少くはなかつた。併しあとではそのカラクリもだん／＼曝れて來て、見本で注文を受け、保證金を積んで約定するやうになつた。

ところが阿片は最初から倉庫に積み置きしてもドシ／＼賣れた。清朝は戰爭に負けて阿片取引を禁止することが出來なくなつたが、何とかして之れを食ひ止めやうと思ひ、國內に嚴令を發し、時には吸食者を引捕らへて片端から死刑に處したとさへある。だが租界内は別天地で煙館がドシ／＼設立され、嗜好者は八方から集つて税金のかゝらぬ安い阿片を飽食した。さう云ふことが清朝の倒るゝま

で續いたが、英國側も次第に讓歩して税金もだん／＼多く掛け、民國六年に至つて遂に禁止した。此時支那側でひたと止めて仕舞へば何事も起らぬが、當時各地に割據した軍閥が軍費欲しさに罌粟採培を奨励し其結果戦争までも引起した。民國十三年の江浙戦争は、表面にはいろいろの理由もあらうが、凡ての假面を剥ぎ去つた残りは、阿片の捌け口と賭博開業地の争奪戦であつた。長江筋に勢力を張つてゐた直隸派の齊燮元は江蘇督軍でありながら上海寶山縣一帶を如何ともすることが出来なかつた。此處は袁世凱時代から特別行政區域で最初鎮守使を置き、後ち護軍使と改名し、十三年には何豐林が其任に當つてゐた。何豐林は安福派に心を寄せ、隣省盧永祥と脈絡を通じてゐたので阿片を福建から引いて莫大な金儲けをした。直隸派は四川の阿片を漢口で捌いてゐたが、それは蕭耀南の手に歸し、江蘇の齊燮元は省内の上海を目の前にして指を叩へて見てゐなければならぬ。偶ま彼は上海附近に競馬場を計畫したが、之れも見事に背負ひ投げを食つて何豐林一派に取られた。さう云ふ怨みが重つて此戦争が初まつた。

五卅事件から英人は急に弱腰になり、支那側の要求を大概容れるやうになつた。況して非人道を攻撃される場合には偽善心の強い英人として堪へられぬことだから、早速公娼を廢し、阿片窟や賭窟を嚴重に檢擧したが、そこが佛租界當局の附込みどころで、早くから支那人と共同市政を取つてゐたのも萬事好都合、共同租界の繁榮を奪ふ積りで賭窟をゆるし、淫賣窟をゆるし、阿片吸食をもゆるした。どう云ふ風にゆるしたかと云ふに、青紅帮チンホンバンの大親分を手に入れて密税を取つて一切を賄はせた。其

最盛時期が一・二八事件で、資本金五百萬圓以上の大賭場が三つも四つもあつた。尤も大規模なのは一八一號で、資本金一千萬以上と云はれ、二百弗の見せ金か無ければ入場を謝絶すると人ふ素晴らしさ。送り迎への自動車は勿論、酒も煙草も皆たゞで、然かもそれがフランス議事堂のまんへいにあると云ふのだから皮肉だ。その外、榮記、榮生、利生、長發など、云ふものもあるが、之等の經營者は同一株主で皆引きくるめて一個月十萬弗の税金を徴收してゐた。

阿片は一匁二十五仙の印花税の外にパイプ一本に付き一日四十仙を徴收し、煙館の經營はパイプの税金さへ納めれば各自の自由である。

此二大事業の經營者は誰れであらう。佛租界市參事會員として現在も尙ほ嚴存せる杜月笙其人を筆頭に、張嘯林、黃金榮氏等、いづれも上海有数の事業家で多く銀行や紡績會社に關係し、いろいろの名譽職を持ち、慈善會の會長をも勤めてゐる。しかし彼等の身許を洗つてみれば皆青紅帮の親分で、今は全く、ほとけ顔してゐられるが、そのむかし随分凄腕を見せたことであらう。さう云ふ人達が賭博と阿片を經營することは、いかにも適材適所で、當然過ぎるほど當然であるが、一方税金を取立てた方面は誰れであらうか。

云はずと知れた當時の佛國總領事コシラン氏を筆頭に、副領事ジェルマン氏、判事コスロア氏、警察署長某、駐在武官某々氏等であつた。彼等は淨財を山の如く蓄積して歡樂に酔つてゐたがまもなくエドワード路七號に開業してゐた辯護士ヌーヴオー氏の夫人が、警察署長と割ない仲となり、遂に夫

を振捨て、潔く結婚した。ヌーヴォー氏は怨み骨髄に徹し、巴里に歸り選挙運動の結果首尾好く代議士に當選、賭場で上海總領事館のかゞやかしい夢の跡を素破抜いた。それが爲め大更迭が行はれ、一九三二年三月、巴里へ歸る途中總領事、警察署長、駐在武官外一人は、どう云ふわけか知らぬが香港で毒殺された。

新任總領事は賭場開設に就て一箇月百萬圓なら許可してもいいと云つたので、流石の杜月笙も呆れ返り、手も足も出ないと云ふ噂だが、廓清後の總領事がマサカそんなこと云ふ筈はあるまい。恐らく誤傳であらう。兎に角今は佛租界當局も共同租界と力を合せ、賭窟や煙館の大掃除して、紅丸製造密賣者を片端から檢舉してゐる。

二

紅丸賣出しの初めは、佛租界皮少耐路餘廉里十一號の某店であつた。當時は禁止物でなかつたから屋號や番地を包装紙に刷り込んで盛んに賣擴めたものだ。それが今では商標と變り「十一號」印が尤も珍重され、某外「泰興」印も評判がいい。近頃ヒロインの製造が間に合はず、モトを代用するので他の印のものは餘り信用されないうが値段が安いので矢張り賣れる。即ち一千粒に付き七圓、一粒が僅か七厘で、四五粒吸へば可成りの利き目があるから、一匁二十四仙の阿片よりも此方に手が出るわけである。

紅丸の吸食處を抽々窠と云ふ。即ち紅抽々を吸はせる家の意味で、佛租界自來火街瑞福里一帶に最も多く、中にも「小山東」「鹹菜阿毛」「阿狗」の三家は金箔付の老店で、日々の賣上高が各々數千圓に達すると云ふ豪勢さ。本年六月七日の手入れには、數百名の探偵巡查が此邊一帶を遠巻にして三時間に渡つて戸毎に取べたところ、阿片パイプ三本、紅丸パイプ百餘本、煙燈、煙具無數、逮捕煙民男女二百餘名に達し、七臺のトラックに積んで佛租界警察署に押送した。紅丸嗜好者は指の先が黄いろく染まつてゐるのですぐに見分けが付いたのである。之れで一先づ抽々窠の掃除が出来たやうに見えるが、實は中々根が張つてゐて、其後も茶葉服を着た男が路次内でコソコソ取引したり、或は商人風の男が大道から人を連れ込んだり、或は煙草屋に、或は屋臺の煮賣店に、一日數遷して巧みに取次してゐるのだ。八月になつて漸く秘密機關の所在を確かめ、十六日午後三時、瑞福里二十九號に數名の探偵が踏み込んで見ると、果して既成の紅丸が米利堅粉に一杯詰めて、六杯も出たと云ふわけ、居合せた三名は直に逮捕されたが、彼等は嚮に風を食らつて逃げ出した小山東の手下であり、其後も附近の福建里五號から多數の紅丸を發見し、居住者阿四根を捕へてみると、之れも亦小山東の手下と知れた。だが小山東は靈通自在で今も尙ほ逮捕に至らず、紅丸の密賣者は依然として同町内に絶えない。一寸申運れたが、瑞福里では尤も評判のいい「十一號」印を販賣してゐたのである。次に「泰興」印に就て記さう。

浦東、彭家宅九十七號に何瀛麟子と呼ばれる揚州人がゐた。其の名の通りめつちかちで年は四十に餘

り、一妻一妾を置き、一日四五圓の紅丸を吸つて晝夜一睡もせず贅澤に暮してゐるが、いつもぶらぶら遊んでゐて、何の仕事があるやうにも見えない。人々は不審に思つてゐると、本年七月二十六日忽ち其筋の家宅捜索を受け、貯蔵の紅丸一千五百粒と共に警察に連行された。取調べてみると、彼は泰興紅丸公司の販賣主任で、毎日十萬粒、少くも四五萬粒を賣捌き、其道の者から紅丸大王と尊められてゐる豪か者で、浦東十餘箇所に販賣所を設け、持運びには妙齡の美女、モダン小姐モダンを使つて一箇所に千粒以上は置かず、發覺しても輕微な罪で済ませ、自分は轉々として遁れてゐたのである。

次に紅丸製造機關の曝露に就て聊か記してみよう。

「九江路十四號パーチャー洋行は現在共同租界市參事會員、英人パーチャー氏の經營する大會社で、同社の廣東人マネージャー楊壽山は、海寧路振興里一一七五號に三層三棟の大洋館を構へ、家族の居住以外に多くの空室があり、周圍には高壁をめぐらしてあるので、利慾に敏き楊壽山は之れ幸ひと數名の職工を雇入れ、祕密に紅丸製造を初めたのは、餘程前の事であらう。彼の製造する紅丸は從來の紅綠白と比べて一目見ても分かるやうに、灰色に仕上げ「白金龍」「飛馬」などと云ふ嚴かな商標を付け、品質も極めて好く吟味してあるので賣行が非常にいい。

販賣機關はエドワード路馬樂里四八三號と重慶路五五五號華洋百貨靴下工場の裏二階を用ゐ、極祕に取引してゐたので、暫くは其筋の目にも觸れなかつた。併し、だんく商賣が手廣くなると、どうもあの店は怪しいと云ふ評判が立つ。工部局警務課でも捨て置き難く、女探部惠慈を重慶路に派出し

素人探偵を使つて灰丸買入れを申込んだところ、近頃警察が八釜しいので品物を片付けてあるが、いづれ取締が弛んだら賣つて上げてしまいと云ふ返辭を聞き取り、折柄表に待つてゐた女探偵は、竹籠を提げた怪しげな男が同家の奥から出て來たので、尾行すると、太沽路百七十三號の祕密機關に入つたので、俄に煙客に化け、エドワード路馬樂里四八三號の販賣機關を聞き出し、翌日も尙ほ素人探偵をつかつて重慶路の靴下工場から灰丸五包を一弗で買取り、爰に確實な證據を握つた。そこで六月十日午後一時、數十名の探偵は先づエドワード路の店を検擧し、何離秀、孫子傑、張百軒、楊維周、王足明、趙福生、趙阿三等七名の廣東人を逮捕、床上の枕の下から灰丸製造販賣に關する重要書類入のサツク靴を手に入れ、又壁間に吊せる王足明の衣套の中から灰丸取引の往復文書を發見し、爰に初めて楊壽山が此仲間の首魁なることを知り、尙ほ寢臺の後ろから灰丸用の布袋八十枚と包裝紙無數、干物臺から煙具數個を發見し、同時に又、楊維周の住所が馬樂里六一六號であることが知れ、同家を検索の結果、灰丸二十包、目方二百三十ポンドを押收。一方華洋靴下工場に於ては陳仁儕、姜祿生兩名を逮捕、灰丸十包、目方千百匁を押收の上、時を移さず、海寧路振興里の楊壽山本邸に向ひ、先づ二階表部屋で、華渭連及び蘇州婦人毛陳を逮捕し、階下の東部屋では王金福及び楊壽山の妻楊陳。コツク部屋では男傭季發仁、女傭馬莫を捕らへ、同時に二階表部屋から紅丸製造用の舊器械三個、新器械一個、紅丸貯藏用の篋筒七個、毒藥一罐等其他種々の證據物件を押收した。

初め探偵等が同家に踏み込んだ時、丁度電話が掛り、前出の華渭連が受話器に手を掛けると、忽ち

抑へられ、探偵長が代つて聞くと、それはページャー洋行の楊壽山が掛けたもので、前記二個所の發覺を報じ證據物件を全部纏めて前の家に預けよと云ふので、探偵長は空を使つて承諾した旨を答へ、一部の探偵を同家にとめて餘黨の來るのを待ち、一部の探偵は犯人と證據物件を警察に押送し、探偵長自身は西探一名と共に矢継ぎ早にページャー洋行に馳せ付けたところ、楊壽山は已に檳榔路七十二號のページャー社長の邸宅に行つたあとで、直に同處に追跡すると、折柄楊はページャー氏に救ひを求めつゝあつたが、事件が重大なもので、氏の力を以てするも如何ともする能はず、其場で楊を引渡した。尙ほ第一審の時にはページャー氏自ら出廷して楊の潔白を證明したが、何の效力もなかつた。

今度の檢舉は男女合計十四名の眞犯人と三名の嫌疑者を得、其規模の大なる點に於て、近來の大捕物であつた。彼等は皆廣東人で、枝葉に渡ることが少く、取調もすらくと進行し、六月二十二日の判決には、首魁楊壽山を徒刑四年六個月、罰金五千圓に處し、其他最も重き者が徒刑三年、罰金百二十圓であつた。」

「一・二八事件で名高くなつた瀏河鎮の北市稍邱家宅に、先頃より紅丸製造機關があると聞込み注意してゐると、匪徒も用心深く三遷して張姓の貸家に移つた。同家は五軒つなぎの平家で後ろに濠をめぐらし、表門には常見張を置き警戒怠り無しとの報らせに、淞滬警備司令部では十月八日午前四時頃三十餘名の憲兵を派遣し逮捕に向つたところ、匪徒は頑強に抵抗し、小銃、モーゼル銃等を以て渡合ひ、約半時間交戦したが、遂に敵し兼ね水を涉つて逃走した。逃げ遅れ六名を捕らへ訊問すると、彼

等は皆製藥技師で屋内には既製の紅丸無數の外に、ヘイロン其他の毒物原料と多様の器械を發見し、數臺の自動車に積み込んで上海に引上げた。」

「本年八月二十四日午後十一時頃、北四川路底黃陸路日本人長澤某の住宅で、一大音響と共に突然火を發し、左り近くには日本海軍陸戰隊の管舎があり、水兵が馳け付けて警戒中、一方消防署に急報し防火に努めた結果、二階全部を焼失して一時半頃やうやく消し止めた。此際燒死者一名負傷者一名を出し、尙ほ燒瓦の中から不發の手榴彈二個を發見したので、不審に思つて隈なく點檢すると、一方の牆角に暗室を設け、ヘイロン原料七大箱と各種の麻酔劑が置いてあつたので長澤の行方を搜索中、翌日午前四時頃、吳淞路東興里の友人宅に潜伏せることが判明し、直に取押へて嚴問すると、同人は見識らぬ廣東人に二階を貸してゐたので何事も知らぬと云ふ。又二階から飛下りて負傷した者は日本服を着てゐたので日本人と見做され、福民醫院にかつぎ込んで治療したが、最初は何事も語らず、後ち汕頭人のコックと判明し、長澤に引合せて見ると、同人は少しも彼を面識してゐないので、長澤は有利になり、輕微な罪で事歇んだ。」

今一寸材料を見失つたが、共同租界の某處で屋根裏に製造機關を設け、梯子を引いて作業してゐたので容易に曝露しなかつたこともある。

又界路^{ケイロウ}通轉運公司の番頭で袁世凱と仇名さるゝ男が、或人から日貨三大箱の運送を依頼され、店のトラックで停車場に持込んだところ、忽ち探偵の取調べを受け、箱を開けてみると、銀馬印のタオ

ルの下から、同じ商標の紅丸二十一包、合計四百二十ポンドを發見した。製造元は武定里三十二號とあり、同處に行つて見ると、紅丸十餘大包、合計數百萬粒、價格四萬圓のものが三つの皮箱に詰めてあつた。尙ほ製造機具とカフェイン其他の毒藥をも發見した。犯人は屋根づたひで逃げ出し、隣家の籠の中に潜伏中を逮捕したが、浙江人、上海人、廣東人等三名でいづれも主犯者ではなかつた。

上海地方法院檢察處で、本年七月から九月まで沒收した毒藥は、

生阿片十二斤と三千八百九十六匁。

膏阿片二百二十七匁七分。

煙泡四十六匁二分、別に十五小包、其外八十七個。

煙灰八十三匁二分、別に八十包。

紅丸九十四斤半、別に二百四十七小包、其外四萬零三百八十四粒。

モト五百二十三匁八分、別に五十七包。

其外、烟土、膏、丸、泡、灰及び烟具三千四百七十件等で、十一月六日午前九時、法院西口の看守所前で、各代表者、係員立會ひの上燒棄した。右は裁判確定済のもので、其外未決の分は何十倍にも達してゐる。

之れは根を培養して葉を刈つてゐるやうなものだから、いつまで経つても絶えないのである。伍廷芳博士が今夏四川を視察して歸つて來たが、其話に據ると、四川では罌粟を栽培すると、勿論毒物を

作つたと云ふ廉で罰金を取られる。併し罌粟を作らぬと、無賴の遊民として怠惰税を課せられる。人民は何にもしないで税金を取られるよりか、何か仕事をして税金を取られた方が増しだから、阿片を續々作るのである。四川から漢口へ阿片船を三ばい積み出して、一ばい通過すれば倍額の利益があると云ふので阿片は川下に出る。蔣介石のお膝元九江でも税金さへ拂へば、ドシ／＼容れられる。併し吸つてゐるところを見付けられると、罰金を取られる何といふ馬鹿馬鹿しい矛盾ではないか。軍閥は税金欲しさに四川では六十年後の税金まで取り上げてゐる。又廣東の一地方は舊家に對して過去二百年に溯つて税金を搾り上げてゐる。これぢや共產黨に附込まれるのも無理はない。

しかし何しろ上海では今一生懸命に阿片の流毒を堰き止めようとしてゐる。

一體烟具があるから阿片や紅丸を吸ふのだと云ふので最近煙具製造に眼を着けた。

「鄭家木橋吉安里九號の四層樓上に住んでゐる常州人閔松泉は、親の代から烟具を製造してゐたが、最近佛租界警察の耳に入り、家宅搜索をしてみると、阿片パイプ二十本、未製の竹竿百數十本、烟燈二百四十四個、ホヤ一千五十個、口金百四十個、火皿千百個、灰搔針百七十本、紅丸用パイプ二千五百十五個、小物數百件、帳簿四冊を發見し、本人は右の證據物件と共に押送され、徒刑四個月、罰金四百元を課せられた。」

そこで又近頃は刻烟草や卷烟草の中にヘロインを交ぜて吸ふことが流行り出した。

お馴染の自來火街瑞福里四十一號に安徽人吳紀生と云ふ者あり、同處にヘロイン吸食所を設け、嗜

好者を寄せ集めて盛んに吸はせてゐたが、これは紅丸よりも數倍の利き目があるので皆々大喜びで吸つてゐたところ、十一月七日其筋の手入があつて男女十九名逮捕された。

日本人にも此種のヘロイン吸食者が近頃俄に殖ゑたやうだ。漢口の或る料理屋の女將がふとしたことから此惡風に染まり、何ともしようがないので、領事館に泣き込んで一ヶ月ほど留置して貰つたと云ふ珍談がある。濟南にも滿洲にも中々多いやうだ。郷に入れば郷に従ふは結構だが、退化することだけはやめて貰ひたい。

吃 賭 嫖 戲

吃の中には酒を飲むこと。料理を食ふこと。阿片を吸ふこと。

酒……桀紂の昔はどぶろくであつたが、それでも酒池肉林の大亨樂をした。清酒は周の杜康に始まるといひ傳へらる。漢末、王莽は百藥の長と稱し、魏晉には竹林の七賢、盛唐には飲中八家仙、女では楊貴妃あり、まさに吞兵衛全盛時代であつた。宋にはやゝ衰へ、元に至つて燒酒が始まり、明には媚藥の進歩と共に花露酒が多く發明され、清に入つて前々時代の凡てを網羅し、紹興酒シャウヘンチウが殊にあらはれた。革命後、洋酒を用ひる者が多くなつたが、ビールの味など解る者が少く、やたらに泡の立つ駄物を好み、勞働階級では全く行はれない。強い方では、ブランドーを好み、日本のウキスキーの嗜好

と相對してゐる。外國物に對する兩國人の好き嫌ひがこんなところにも現はれてゐる。

四五年前までは酒の價が非常に安く、最低賃銀を受けてゐる勞働者でも樂々一杯を傾けることができた。日本で若しこんな風だつたら、泥酔者が街上に溢れて警察事故の増加を來すこと必然だが、支那にはそれが無い。享樂方面に於ては世界のどの國にも引けを取らぬ中華人にこの自制心があるとは思議なことだ。或人はこれを利害の念に歸し、醉拂つてしまつたら、眞の享樂はできない。又人心が險惡であるから何をされるかわからない。自己防衛のために自然とのめないのである、といつた。なるほど盛唐時代とちがつて、せち辛い現今ではその點もないが、私はその眞因を阿片に歸したいのである。

阿片と酒とは相刻性がある。阿片は酒以上の享樂性がある。酒は何事も忘却して仕舞ふが、阿片は何事もよく記憶してゐる。酒は外に元氣を發散し、阿片は内に元氣を集中する。その恍惚境は、酒よりもよほど深みがあり、幻覺もなか／＼ハツキリしてゐる。そこで彼等は酒を程よく切上げて阿片をのむのである。これが泥酔者の現はれないわけである。

料理……熊掌、鹿尾、猩脣、豹胎は古代からあるもので多くは山のものである。唐時代には材料も殖ゑ、調理の方法もなか／＼進歩したが、大體に於て目食が多く、營養に於てはさほど工風してゐない。明時代になつて西域以外に安南、暹羅、緬甸及南洋諸島との交通が開け、海外より種々の珍品を

廣すので香味材料が俄に殖る、又海産物を取入れたので、料理の内容が豊富になり、近世支那料理の形態をなすに至つた。李時珍の本草綱目は、單なる藥物の研究のみではなく、食品全部の搜索である。一方には閩房醫學が發達して、體力の旺盛を求め進んで榮養品を物色するやうになつた。もちろん科學的研究でないから、中には、迷信とおもはるゝものもないではないが、ねらひ所も相當なもので大體に於て甚だ效果的であつた。現代のホルモン研究に示唆するところ甚だ多い。又文火武火などのつかひわけは、榮養學と一致點がある。

阿片……支那で阿片を藥用にしたのは唐代からで、「一粒金丹」などの記録がある。明代にもなほ舶來の貴重藥として扱ひ、吸食などはしなかつた。吸食を初めたのは、乾隆頃からで、波斯、印度の習俗を傳へ、英國の東印度會社の船が印度製品を盛んに輸送し、支那の茶、絹、銀と替へた。價は安く、享樂味満點。瞬く間に南支那から支那全土にゆき渡り、嘉慶頃が最盛期でその流毒は目もあてられず、嚴重の禁止も何の甲斐なく、甚しきは母胎を出たばかりの嬰兒、犬猫に至るまで阿片の毒氣を吹つけなければ動けなくなつた。禁止も一方的では納まりがつかなくなり、つひに時の廣東總督の果斷を以て英國の商品を焼き棄てた。そこで阿片戰爭となり、現代支那青年が咀ふところの資本主義、帝國主義の侵入の端緒をひらいた。眞に怨むべきは英國であるのに、今は反て英國を後楯にして日本に矛を向けてゐる。こゝでも彼等はい夷制夷の馬のあんよを露はしてゐるのである。

阿片の享樂性は前述の如く、あらゆる享樂の上位にあるが、世界の諸國に行はれず、ひとり支那に

のみ榮えてゐるのは、なぜだらう。

健康體は病菌を受け付けぬ。その原因は支那自身の衰弱にある。

一、阿片によつて一時の勢力旺盛を得んとしたのが、先づ第一の原因であらう。その背後には多妻のため諸女を満足せしめんとした事。賭博を好むため一宵二宵三宵を徹し、最後の勝利を得んとしたこと。阿片吸食の初は、勢力絶倫にして××××して終夜倒れず、固きこと鐵の如くである。さうして三晩位ねむらずにゐて、いかなる煩瑣の仕事にも堪へられる。李鴻章、張之洞の如きは、阿片をのんで内外の難局を處理した。

二、支那人は風通しのいい部屋を嫌ふ。これは道教養生術の偏見で、風に當ると、勢力を失ふとおもふのである。ゆゑに室を密閉し、吸煙室は自然に備つてゐる。

三、阿片をのんで癮に至ると、阿片以外には何の興味もなく、所謂吃賭嫖戲ナイトヒックスに金を費すことが少い。ゆゑに資産家は俸の道樂を防ぐために、幼時より阿片をのませて癮に至らしむ。さうして財産存立の安全を保つ。

未だいろ／＼あるが、此處で阿片を切り捨て、現在行はれてゐる、モヒ、ヘロイン吸食を一寸述べ置く。

モヒ又はヘロインを乳糖に交ぜ、丸藥を作つて、パイプに装置し、阿片同様に、燈火で焼き、吸食することをオンツ／＼といふ。即ち紅丸である。

紅丸は昭和三年頃から、上海で製造され、前の上海戦當時が極盛時代で、今は田舎に及ぼしてゐる。値段も安く、扱ひが極めて簡単で、時間をつぶすことが少い。丸は一寸焙つて孔口につけるのであるが、數多く積み重ねて吸ふことを手練としてゐる。しかし現在のモダン・ボーイには面倒臭く、巻煙草にヘロインをつけて吸食する。

この種のもものは味が悪く、健康に影響すること阿片の比ではない。つまり、日本清酒又は紹興酒の如き醸造酒は中毒を起すことが輕少であるが、蒸溜酒の中毒は甚だ急速劇甚である。それと同様に、阿片は上手に用ゐれば、李鴻章、張之洞、譚鑫培のやうに、いづれも七十以上まで生き伸び、事務に精勤して、最後まで第一流の技能を延べた。ヘロイン吸食者は、現在の支那青年男女學生の如く、小兒病的空騒ぎをして一時は民族の英雄になるが、すぐにへたばつてしまふ。さうして天壽も甚だ短い。

賭……船に乗るとわかるが、支那人は決して日本人のやうに睡ることはない。暇さへあれば賭博をしてゐる。暑さ寒さ、祝儀無祝儀、痛さ痒さ、喜怒哀樂等の避くべからざるシヨツクをみな賭博でまぎらはしてゐる。賭博は眞に飯よりも命よりも大事である。今度の上海戦のあの猛烈な砲火の下でさへ、トーチカの中で時間のかゝる麻雀牌子を悠々廻してゐる呑氣さ、大膽さかけんには全く呆れ返るが、これは勇氣があるためではない。恐怖をごまかすためである。

前の上海戦で支那空軍の不備を感じ、これを充實するために、愛國心に訴へて基金をしてゐるたが、

中々捗らない。つひに二百五十萬元割戻（一等五十萬元）の航空獎券案を立て、口を開けてみたところ、忽ちの中に賣切れ、四五年の後には、數百臺の飛行機建設に成功した。支那では富籤でなければ、何事も運ばぬ。天災救済でも軍費でも多くはみな富籤である。滿洲國には三千萬の山東移民がある。それがみな故國に送金するので、滿洲政府がなやんでゐる。それは日本側幹部が徒らに王道にとらはれ、支那の國民性を斟酌しないからである。投機の一事は、専ら倫理道德を以て支那を改善せんとしてゐる蔣介石でさへ、これを禁止しないのである。今後の自治政府に對しても大いに鑑るところがなければならぬ。

標……蔣介石の新生活運動以來、公娼は、南支那では殆ど廢止された。その代りストリート・ガールは街上及盛場に溢れてゐる。ダンサー、映畫スターの内職も甚だ類ばんである。喫茶、レストランは悉くモダン小姐となつた。それが客にせびつて、ガツ／＼皿に取りつくところ、決してみつともいものではない。しかしフェミニストの多い支那では女の無作法は凡てゆるされてゐる。五六年前から固定した支那婦人の流行服、旗袍は、初じめ滿洲服から形式を採り、つひに上腿の邊まで左右に割を入れ、歩きたびにひらく股間が隠見するのは甚だ惡趣味であるが、こればかり女學生、賣女一貫していつまでも廢らないやうである。髪は老幼を別たさず、みな斷髪である。彼等は精神的にも物質的にも自國の長所をみなすてしまつた。それでおもひ出すのは、二十年前の藝妓姿の何といふしとや

かさよ、女學生姿の何といふ質樸さよ。私は永久に忘られない藝妓の美！日本婦人の現今の髪のように項部に髻を置き、髻の周圍に茉莉花、雛子花などの蕾を綴り、或は圓形に或は半圓形に、晝のやうな詩のやうな輪廓を作り、酒間にはそれはつぼんでゐるが、一旦繡帳の中に入ると、それが徐々にひらいて、幽かな芳香を放つ。中にも淫艶なるは白蘭花で、甘酸っぱい挑發的の匂ひは、不夜城の胡弓の音と一脉相通じて、杯盤狼籍、醉眼朦朧の中にいふにははれぬ何ものかを囁いてゐる。西洋の薔薇の花の比ではない。深夜になつて次第に體温によつてひらき、體臭と調合して幽香を枕頭に漂はし微妙な感じを引き起すのである。まことに花が美人か。美人が花か。花神を抱擁する我が得意や想ふべしである。

戯……戦争の始まる前には、グロテスクの芝居が流行するといはれてゐる。前上海戦には事前に西遊記、封神演義の如き、種々の怪物が現はれて舞臺で、混戦した。まことに猪八戒の鼻の如きは、現代の毒マスクを暗示してゐるのではないか。今度の戦前の支那新聞の廣告を見ると、矢張りかういふものが流行を持続してゐた。それに「木蘭從軍」といふ女武者の主役の芝居も流行してゐた。

木蘭從軍は唐代の故事で、父將軍が戦敗し、娘が父に代つて邊境にゆき、蕃族を征伐するといふやうなもので、現在上海に於ける支那娘子軍の出陣を暗示してゐるのではないかと、可笑しくおもはれる。しかしお氣の毒には、今度は相手は蕃族ではない。世界第一の文明國である。宋婆さんの激勵も

大火に井戸水である。彼女等の幻滅想ひやるべし。

支那芝居は以前のやうに歌が流行らなくなつて、大革命以來めつきり廢れてしまつた。若い人の好みは映畫に移つてゐる。映畫は支那製のもの革命劇が多い。「大地」は米人の作だが、それ以前にもあゝいふ傾向のものが多く、大地に至て大成した。胡蝶のやうに、世界的に名を博したスターもある。彼女はロシアを見學して歸つて來たときには、蔣介石の五十誕辰祝宴餘興劇に出演を拒絶した。

四大社會惡

宦官……後宮三千の美女、とはちと大袈裟だらうが、とにかく、むかしの皇帝はたくさんの美女を後宮に鑑詰めにしてゐた。なにゆゑさうしたか。氏族時代の遺風は家長の絶対權力をみとめ、領土内の美女を悉く彼の手に集めた。(明清にはこれを選女といひ、民間より徵發)或は戦争によつて獲得した美捕虜を悉く官奴にした。宦官の必要はそこに起つたのである。

宦官は始め、皇帝の侍者が………罪を冒した時、………門番にした。閹者は即ち後宮の門番で、前殿、内宮の境にゐて、嚴重な見張りをなし取次をする役目である。

のち宮中の儀禮が繁雜になり、女の手に及ばぬいろ／＼の力業がふえたので、猥褻罪人侍者だけではまにあひかね、民間の志願者を取り入れ、特別の方法で………抜き、宦官に任命した。

宦官はさういふ性の不自然の缺陷から、無氣力で頑迷で慾張で疑ひ深い。王朝の末期にはいつもさういふ者が政治に容喙し、或は政權を弄び、皇帝自身が同時に無氣力になるので滅亡を早める。

宦官の弊害は漢時代すでに認められたが、多數の婦女を集中するために、どうしても必要である。原因は私生活と公生活を混同した國王權力の偏重である。さうしてこれが僅に二十餘年前、清朝の倒壊するまで持續した。有名な李蓮英は髮結である。西太后が民間の流行髮に目をとめられ、官女はもちろん王家の侍女でもこれを知る者がなく、已むなく李蓮英の………召しかゝへた。それが中々の伶俐者で芝居を演じたりなんかして大に喜ばれ、光緒帝押籠めの時にも大に功勞あり、西太后の寵を一身に萃め、清朝覆没の動機をつくつた。宦官の持續は、儒教の女子貞操の警戒があまりに嚴なるがためであつた。しかし宦官は一般的ではなく、官中に限られ、少數の犠牲に過ぎなかつた。又獨身の女子を永く官中にとゞめ置くことは、生理に反し、犯罪を醸成することが多い。これは清室では認めてゐるらしく、官女の數は唐代や明代ほどのことはない。

纏足……起原はハツキリしないが、好色の皇帝が舞妓の足の纖小を愛でたのであらう。一般に流行したのは明代からである。初めは華奢を好んだのであるが、種々な理由から變態的に發展した。

一、女子の出奔を豫防するため。

二、腿部の筋肉を發達し、………をもたらすといふがこれは嘘であらう。

三、枕席の間に可憐の感を起すこと。就寢の時にも三寸の刺繡鞋をはき、その他は………で人形のやうな可憐さがある。

四、纏足の足は子安貝のやうな恰好で、握つて甚だ快感がある。

五、つひに畸形の足のタコの出方に興味を持ち、その足の臭氣にさへ興味を持つ。

六、長い襪をはいて弓のやうな鞋尖がほのかに覗いてゐる。

七、歩く姿は楚々として風に吹かるゝ牡丹のやうだ。等等

要するにこれも婦女を男子の強權の下に置いた儒教の失敗だ。この風俗は現在でも偏僻な境では尙多く残つてゐる。革命前から纏足解放運動が起り、都會で天然足の妙齡の女子がチラホラ現はるゝに及んで、革命が起つた。

節婦坊……坊は石の鳥居のやうな形のもので、街巷に建て、貞節な婦女子を頌表する。これも儒教の失敗で、貞節といつても極端である。たとへば、婚約した夫が死んでも、貞婦兩夫に見えない主義を取る。自分の本願なら未だしも仕方ないが、親兄弟が迫つて無理を守らせ、つひに病死した場合、節婦坊の頌表を受け、一家一門の譽れとする。なほ烈婦といふのがある。これは烈婦坊と稱し、男子の脅迫に對し自盡した者を表頌する。いづれにしても甚だ不自然で女子結婚を阻碍することが多い。

この反動で現在では、男女共學が行はれ、交遊、結婚等甚だ自由になつたが、一方には墮落女學生

が亂交のため、ストリート・ガールに墮ちた者が甚だ多く、男に棄てられて自殺、或は積極的に訴訟を起す者等、紛々擾々として、海に亂世の觀がある。

八股文……儒教一點張りの極めて形式的の固定した文體を定め、三度の試験に通過して最高の成績を示した者が翰林に入り、大官の候補者となる。一種の官吏登用試験法であるが、甚だしい消極政策で、これがために學問の進歩は更に興らない。支那が道光以來歐米文化のショックを受けたが、更に反撥せず、日本と比べて數十年立ち遅れたのも、全くこれがためであるといつて過言でない。官吏登用試験は漢代からすで行はれたが、かかる尙才止めの桎梏を加へたのは、明の太祖である。皇帝自家の永存をはかるための欺瞞主義だといつてゐるが、初めの考は決してそんなものではなからう。なぜなら、支那は當時東洋一の文化國で歐洲とは交通せず、假りに交通したところが、歐洲の文化だつて、當時それほど進んでゐたのではない。ゆゑに外敵の侵略を受けても、文化の方面でいつも勝利を得、外敵を融合してしまふ。ゆゑに明の皇帝として最も恐ろしいのは内亂である。その内亂を防ぐには學說を一定し、尤も安全な儒教で固めて仕舞ふに限る。そこで八股文の形式を制定し、四百餘州の尙才の洪水を統制した。大體むかしから官僚國で、政治を好み、官吏希望者が甚だ多いから、かういふことでもしなからうものなら取返しが付かない。ところが清朝になつてもなほこれを用ゐた。清室は異邦人である。しかも漢人よりは文化が低い。知識のない統治者が知識のある被統治者に對して種

々の苦勞がある。初めは風俗を改め、滿服を強ひ、辮髮を強ひた。又自ら漢人化するために、婦女を徵發して、血族的の融合を計つた。登用試験の外に、康熙字典を作り、四庫全書を大蔵し、失業文人救済に腐心した。それでも種々の反逆者が潜在したが、巧みにこれを防いで、二百六十七年間持ちこたへた。これには衆愚主義が尤も適當であつたのである。この衆愚主義は歐米文化に逢著すると、忽ち術策を失つた、民間の野心家はその弱點を見た。さうして、清朝を盛んに罵倒した。何よりも改革が必要と、海外にも留學生を派遣して新知識の受入にあせつたが、留學生は平等主義の海外を見て、故國の暴政をつくづく感じ、彼等は結局反逆思想を持した。折角官費を出して國家改善を計つたのが、却て仇になり、革命の聲は日々に高くなり、つひに武漢起事となり、續いて袁世凱の寢返りによつて清朝はもろくも覆滅した。その際南京に立つて假大統領となつた孫文には兵力がない。もとく宣傳、買収等で革命が成功したのである。彼は北洋の軍隊に對抗する力はない。彼は租界を根城として外國の庇護を受けて度々暴動を起し、度々失敗しては亡命した。亡命の度に海外の識者に逢つて支那復興の中心思想を研究した。それが即ち三民主義となつてあらはれ、革命に活を入れ、遂に容共政策を用ゐる、立ち遅れた國勢を一時に挽回せんとした。爾來社會科學の研究が日一日と盛んになり、日本に敵對することも日一日と激しくなつた。八股文に蓋をされた此の東洋の舊文化國は次第に動搖爆發して隣國に向けてメタン瓦斯を吹きつけた。

有産乞丐

一三六

彌生のころともなると、地方の農民が泰安縣城めざして集つてくる。これは泰山の香客で、一年一度のことでもあるから、本来なら小ザツパリして深色木綿の布子でもきて、『朝山進香』と大書した金の搭襪を肩にかけ、龍頭の金剛杖でも突いて威勢よく出てくるのが當りまへだが、農村の不況はこんなところにも現はれて、只もう著のみ著のまゝで飛出してきたといふものばかり。青黒く干枯びた顔の額の上には埃だらけの氈帽や西瓜帽が載せてあるのは未だましたが、なかには無帽の蓬々髪や辮子を巻きつけたものさへある。身装も區々で、ツギハギの藍衣の上に背心子をきたものや、たまには馬掛をきたものもあるが、それが馬鹿に大きくて狼が法衣をかけたやうな體裁。或はたゞ一枚の黒布の綿袍だけをきて上に帯を巻きつけ、長い煙管を腰に挿したものなどもあつて天然に手頼らなければならぬ彼等は、只もう無けなしの銅鏡を搔きあつめて、長途の處をゑッちらおッちら、神頼みに出て来たものらしく、斜一文字に括りつけた古びた搭襪も、見るも哀れに萎びてゐる。その搭襪の中には煎餅と賽錢が通入つてゐる。煎餅は糊のやうな物を一杓ひづゝ焼いたもので、食事毎に一枚づゝ食ひ長途の旅には全日程に必要な分だけ携帯する甚だ便利なものである。だからあとは賽錢さへあれば何も要らぬ筈だが、彼等とてもたまゝ城市に出て来るのだから、買食ひもしたからうしお土産も欲し

からう。景氣がいゝとこの搭襪がハチ切れさうに脹れ上つて、郷老然とニコ／＼顔で納まつてゐるか、彼等の懐中都合はすぐわかる。彼等は大抵は親戚關係で二十人三十人と一團をなしてゐるが、格別講中といふものがあるらしくも見えない。

かういふ團結が毎日幾組となく通るので、街では臆病の郷老を誘ひ込むため、特に店舗の前に店を設け、郷老の欲しがりさうなものを並べて置く。多くは紅緑胡粉で彩つた木製泥製銅質の在來の支那玩具で、それが却て不器用で雅味があるといふのは日本人の觀察。彼等は矢張りゼンマイ仕掛の飛行機や自動車、セルロイド製の獨りでに歩き出したり、太鼓を叩く人形が欲しく、番頭が意地わるくネジを掛けると、カチ／＼コト／＼、或は鞆鞭をしたり、或は擊劍の仕合をしたり、そこら中が魔術のやうに活動するのを、只もうポカンと見てゐるだけで、手の出しやうがない。そんな玩具は一時の娯みでどうでもいゝが、實際必要缺くべからざる品物が矢鱈に目につく。

華美な模様の染形綿布、双美牌の花露水は昔からある物だが、人の匂ひを嗅ぐだけで未だ使つたこともない。棕欖石鹼は好い匂ひがするばかりでなく、瘡氣もとれるといふ。家の娘も今年十六になるのだがなあ、とたゞ想ふだけである。それよりも必要なのは、魔法瓶だ！ 懐中電燈だ！「サアいいかけんにして行くべい。いつまで見てゐても羽根が生えて飛んで来るわけでなし、品物はあちらのもの、錢はこちらのものだ」と互に袖引合ふて歩き出すみぢめさ。彼等は大街を歩きすぎて岱廟の前に

○
 位廟は城壁に靠つて更に一道の城壁を築き、所謂「大圈ダイチヤウワンの中の小圈シャウワク」で、さながら北京の紫禁城のやうに外牆の上に三つの樓が並列し、壁をアーチ形にくりぬいて、三條の石道が内側に通じてゐる。この三條の石道には露店が背中あはせに店をならべ、雑沓、喧囂を極めてゐる。

本堂は殿堂式の多柱の建物で、神龕、祭壇、燭臺、香爐、燈籠、鼎、扁額、幢幡などが眼まぐるしく陳設され、赤い蠟燭のもゆる油の匂ひと、濛々と立籠むる線香の煙はむせかへるばかり、そのうる銅鑼太鼓の響は鼓膜を破るばかりで、とても落ついて祈禱などしてゐられる所ではないが、田舎の人はこの騒擾のなかに神を見出し克明に禮拜叩頭してゐる。

堂外の廣場には、参詣人あてこみの香具師が、劍戟を振つて武劇を見せたり、蛇を呑んだり火を吹いたり、男伊達一代記の覗眼鏡や、萬病に利く藥や、災難を救済するために配る本や、人形芝居や、講談などが各々一團々々の人垣を作つてゐる。

こゝが先づ雙六の振出で、そこから北門を出て、しばらく繁華の名残を行過ぎると路はうねりにうねつて愈々登山口となる。沿道の人家には俗に乾隆帝勅許の乞丐が住んでゐるといふことで、香期中には七八十の老人も三四歳の子ども皆この情けない仕事に従事し、各自六七十元から百元餘りの収入があり、その蓄へによつて地所を買ひ、家屋を作り、不斷はなすこともなく遊び暮してゐるといふ話

だが、いま眼の前に之を目撃すると、中々そんなわけには行きさうもなさそうである。路傍に坐つてゐる乞丐は盲目とか脚無しとか、何處にもあるもので、四五歳の子供を使つて客の通り路を塞いで叩頭する。子供は慣れたもので、先きへくと馳け出して行つては漆濃く叩頭するが、十人に一人當れば上出來の方で、決して収入カネのいゝものではない。中には煎餅を噛ちりながら内職に麻苧マヂをうんでゐるものがある。人が来ると、慌てゝ麻苧を片付けて叩頭する。

「お山へお参りの旦那様や御新造様、どうぞ一錢やつて下さいまし、お慈悲は人のためでは御座いません。各々様の善行は各々様に戻ります」

彼等はお百姓を見ると、こんなことをいふが、遊覽客には別の文句を使ふ。

「お山へお遊びの旦那様や奥様方、どうぞ一錢やつて下さいまし、可哀さうな可哀さうな者で御座います」

彼等は市民と農民を見わけてゐる。市民はもう神や佛を信じない。たゞ風景の現象を享樂するのである。だから一方には宗教的意味を含め、他方にはたゞ憐みを乞ふだけである。しかし打算的な市民は元より理由なしに錢を撒くものではない。そこで搾られるのは農民ばかりであるが、農民だつてこの不景氣に無闇に撒いて歩くわけには行かない。そこで彼等の受益の中は月夜の屋のやうに、銅錢の疎らな散在を認むるのみで、これが乾隆帝免許の暮し向きのいゝ丐官の仕事とは、どう見ても受け取れない。ところがこゝに奇妙な現象がある。このあたりをぶら／＼歩く男女の中に身装も相當に作

り、手足も華奢で色も白く、どうみても都會の知識階級としか見えぬものが、乞食のお目減しに預つてゐる。彼等は香客でもなく遊覧客でもなく、土地の者であることは明かであるが、手にステツキを持ち巻煙草を啣へていかにも暇らしく、なすこともなく遊び歩いてゐるが、一體、何をして暮してゐるのだらう。

玉皇閣を過ぎて九十九折の坂道にかゝると、道の片側に石疊の牆壁が續く。門は數段の石階の上に立ち、漆黒の門扉の上に紅の色あざやかな春聯が貼付けられ、いかにもキチンとして住み好きさうな家並がある。門前の反対側には香燭紙錠の賣店があつて、店の中には福徳圓滿のお婆さんや、子供を抱へた品の好いお内儀や、旗袍をきた美しいモダンガールや、いま往來で逢つたステツキボーイなどが安樂椅子に腰かけて小説本など讀んでゐる。この一家族を見ると、いかにも落ついたゆとりのある暮向きである。これが乞丐の經營する香店で、前の門構の家が彼等の住宅であるとは、誰しも俄かに信じることが出来ない。

まづは 俗知つあふ 私は香期中 友達の寓居してゐるその先きの廟に泊つたことがある。この廟は頗

事は偶然である。私は香期中、友達の寓居してゐるその先きの廟に泊つたことがある。この廟は頗る宏壯な構へで、正殿の前に大廳がある。大廳の前に舞臺がある。左右兩側には風雅な牆壁と家屋をもつて大まかに圍み、右手に階級があつて高所の一廊につらなり、廊内には四間の正房と三間の側房

あり、大樹の下に石卓を置き、頗る見晴しがいい。かういふ離座敷はどここの廟にもあるもので、檀家を待遇するために最も景勝のいゝ位地を擇んであるが、友達は營所の教官であるところから、仲間の教官と談合して強制的に占領したのである。私はこの景色に十分満足した。ここはいま言つた通り一段高い所であるから、正殿其他の屋背は算木を並べたやうに脚下に俯伏し、遙かむかふに泰安城がなかば展開し、密集せる人家の上には閨門や樓臺が夢のやうに浮き出している。この城の外形をみて、いま過ぎ去つたこの城の内容をおもふと、唐宋元明の昔と殆ど變りのないやうに思はれる。街を歩いて眠につくものは、綺羅美やかなる綢緞の類、羊豚米穀果品の類、店先で製作しながら販賣してゐる木器漆器銅器鐵器の類。たゞ洋廣舗で販賣してゐる外國機械工業製品だけを除けば、全くそれは中古の世界の活きた姿である。農民、香客、道士、乞丐等等。

北の一方はこんな風であるが、残る東南西は如何と見るに、これは又唐朝以前に溯る田園風景で、青黄いろく彩られた平面の上に、ところ／＼村落をバラまき、銀色の汶河は淡藍色の徂徠山を繞つて、渾々無限の境に消え入る風情は、杜甫の『岱宗復如何、齊魯青未了』の一語に盡きる。

香客は夜中の十二時頃から登山はじめ、山麓の各廟を參拜して頂上の碧霞宮に登つて日の出の大觀を眺めて歸るのである。そこでこの廟の道士は宵の中から支度をはじめ、晝間、正殿の隅の方に安置してある靈官菩薩の尊體を神籠ぐるみ大門口に擔ぎ出し、方卓の上に茶果燈明を供へて香客の參拜

を待つ。

私は十二時少し前に起されて大門に行つてみたが、まだ寂として人けがない。靈官菩薩が彈丸のやうな眼をみはり、口を張つて舌を露はし紅髯をふさくと胸元に垂れ、手に鐵鞭を握つて武威を示してゐる外に、一人の道士が衣冠を正して控えてゐた。そこで門を出て、此處へ來がけに何となく心引かれたあの香店の方へ行つてみた。友達の説明によると、こゝが免許の乞丐街だといふが、私は信ぜられない。しかし今夜きてみると、街の様も人物も餘りの變り方に驚いた。初めは間違ひではないかと眼を小擦つてみたが、石壘みの牆壁も門の作りも店構もみな見覺があつた。併しどうだらう、あの嚴かに閉まつてゐた門は皆開け放しであつて、燈火を點じ往來にはめい／＼長い腰掛を持出し、或は石塊を積んで、人一人が僅に通過するほどの道幅を残し、所々切れ目を作つて其處にお盆を置き、炬火を持つて女どもが群がつてゐる。

女どもは若いのもあるし、年寄もあるし、子供を抱へたのもあるが、皆ポロ／＼の着物を著て髪を蓬ろに亂し、何處から見ても餓鬼の世界そのまゝであるが、併し好く見ると、そのポロ／＼の着物の下から美しい更紗模様の袴子^{ハカマ}がはみ出したり、時に卸し立ての華奢な靴や、艶やかな絹の襪^{ソックス}さへ見える。なほよく見ると、髪こそ亂してゐるが、色白の丸顔の迎も愛苦しい娘などがゐる。中には物言ふたびに金齒の光る年増女もゐる、全く狐に魅まれたやうな話だ。狐は美しく化けるが人間は醜く化け

るものであらう。ところ／＼男も交じつてゐるが、彼等は女と違つて只わけもなくせびり取るのではない、何かしら香客に納得させる道具立を持つてゐる。道端に七つの石塊を積み上げ、その一端々に燈明を備付け香客の爲に通路を照す者もある。或は臨時に小さな廟を設け、靈官の尊像を安置して香燭を焼いてゐる者もある。これなどはもう道士の階段に登り掛けてゐるのである。

友達はみな見識越しと見え、若い内儀さんや娘などに話かける。「お嬢さん、けふはウンと哀れツぽい聲をお出しなさいよ。あのソプラノでゆかなければいけない」

「あら、ヤだわ。此人は」と乞食に扮したお嬢さんは萎れ返つて逃げ出して仕舞ふ。

「老太太、御苦勞様」

「いゝえ、どう致しまして、先生、お笑ひ下さるな。これも昔からの慣例^{しきたり}で仕方が御座いませんよ」と老婆は頻りに言ひわけをする。老婆は大樹の下に莫蔭を敷いて子供を側に寝かしつけてゐる。子供は人の足音がすると寝具から赤裸の半身抜け出してあたりを見る。「まだ／＼、風邪を引くからね。側へきたら起して上げるよ」と夜具のなかに押込んで仕舞ふ。しばらく経つて私どもは又そこへ行つてみた。香客はもう線香を持つてぞろ／＼前を通過してゐる。子供は裸體のまま老婆の懷中に抱かれてゐる。老婆は一生懸命聲をはりあけて唱つてゐる。

「御信神の皆々様！ 一錢の施しはお倉の中に五穀をみたし、子供が出來て孫がふゑます。……お慈

悲は人のためでは御座いません。多く出せば多く戻ります。早く出せば早く戻ります。サア私しどもは貴郎方の前に坐つて見て居ります」

このとき子供は引金を脱づしたやうに老婆の懐中からとびだし、地上に拜跪して兩手を胸元に拱ぬき、齒の根を顫はし涙を弾き出した。

香客は一人々々銅鏡を投げ出した。中には手のひらを開け、搭襪どうらふくを叩いて無いことを示して行過ぎやうとすると、老婆は凄じい勢で飛掛り「よく／＼さういふ無慈悲のことをなさいますね」としつかり抑へて放さない。連れのものが代りに一錢出して漸く通行する有様。

一體この泰山は古代支那民族にとつては、世界の重鎮おもしのやうに思はれてゐた。秦始皇が天下を統一したとき、山の上に壇を築いて、天の功に報いた。それが所謂封禪であつて、以來易世革命には必ずこの式を行ひ、以て天子になつたことを明かにした。ところがいつのまにか乞丐道士がこの山に集くつて碧霞元君といふ迎も仇ツばい娘やかな美人を本尊に守り立て、中々身入りがいい。他の道士は羨しく思ひ、或は玉皇大帝、或は西王母或は老子といろ／＼の神を引擦出して山麓の要所々に廟に構へた。現在、岱廟、玉皇閣、王母池、老君堂、紅門宮、斗母宮といくつも廟があつて、それが碧霞元君とどういふ関係があるのだからサツペリ分らない。云ひ傳へによると、碧霞元君は八千年を経過した女狐めぎつねの精で、迎も色ツばい浮氣者である。開闢の始め観音様と繩張争ひをして玉帝の判きをうけ、ど

ちらでも先きに發見した證據を見せたものにこの泰山を取らせることになつた。観音様は岩の中から經巻を出して見せると、中に女鞋おんながきが這入つてゐたので負けになつた。その鞋はこの女狐が素ばやく挿込んだもので、マンマと玉皇大帝を煙に巻いて仕舞つたのである。以來この女狐は玉帝の皇后となりますまし、泰山娘タイサンニヤン娘、老奶奶ラオナイクの尊稱を受けてゐる。

私は前の廟に歸つて來ると、門前には已に香客がわんざと詰めかけてゐる。

「開路第一盤、登山第一關の靈官爺ごま爺さまで御座いますぞ。老奶奶おきな（即碧霞元君）にお取次するのはこの旦那様で御座いますぞ。この方のお取次がないと、老奶奶も御存知なしに過ぎますから、願ひの筋も通りませんぞ。サア／＼開路第一盤ですぞ。……皆さん、拜んで行かないと罰が當るよ」

先程まで居睡してゐたよほ／＼道士は、いまは大いに緊張して眞赤になつて力みかへり、唾沫を四方に撥ね飛ばして一生懸命に説明してゐる。大抵なものは銅貨を一枚投げ出して禮拜叩頭するが、中には素通りしようとする素寒貧がある。すると道士はたちまち長い腰掛を張出して通せん坊をして仕舞ふ。

「おい、此處を素通りすると、山の手邊へ行つてもなんにもならないのだよ。詰り、お取次がないから門前拂だ」

金のせびり方にもいろ／＼の方法がある。さうして一番威張る奴が一番多くとるのだ。

金瓶梅と紅樓夢

一四六

金瓶梅と紅樓夢は、支那愛慾小説中の雙璧である。前者は中下層民の私利私慾生活を描き、極めて現実性曝露性に富んでゐるが、後者は上流社會の脂粉境を現出し、夢幻的情緒の中に實際生活を織交ぜてゐる。又時代としては前者は明萬曆以後の作と言はれ、後者は清乾隆頃に出版され、其間實に百六十年の隔りがあるが、支那の社會形態は明代も清代もさう大した變りがなく、いづれも半封建官僚政治下にある高利貸資本の流通せる社會である。かゝる環境に於て生業を營む者は、權勢に附和して生命財産を保護し、又自己の勢力の下に於ては、弱者の財産を保護集約して漸次大をなし、資本を運用してゐるのである。金瓶梅の主人公西門慶は、姻戚關係によつて能く財産を收納した。孟三樓、李瓶兒の如き彼の愛妾もみな澤山の金品を持參した。彼は色と慾とに掛けては、もとより抜目なく立廻る男だが、一方女の方面から見ると、勢家の庇護に依らなければ、彼女の財産を保持することができなかつた。彼女等は權勢なき獨身男と結婚することは甚だ危険であつた。ゆゑに彼女は財産を持つてゐても、人の妾たるに甘じ、自ら求めて嫉妬の火坑に入つた。支那富人の多妻なるは、男の好色ばかりでなく、社會の環境が女人をして知らずく大樹の下に集合せざるを得ざらしめた。

本夫殺しの大罪を犯した潘金蓮は、毒婦の典型のやうに記されてあるが、彼女の生立を見ると、一

の重壓を感じる。彼女は幼時、王宣府に賣られて歌婢となり、生長して老主人に玩ばれ、老主人の死後、本妻の嫉妬から、門前の餅賣武太郎といふ極めて貧乏な魯かな矮人に與へられ、無理に結婚させられた。美貌の彼女は此不自然の配偶に満足せず、義弟の武松の凛々しき男振りに思を掛け、撥ね付けられ、つひに西門慶に乗りかえた。たまたま不義が發覺し、取抑へに行つた武太郎は、西門慶に却つて躓倒されて負傷し、療養中、周旋婆の勧めにより、無教養の彼女は後難を怕れて本夫を毒殺し、西門慶の妾となる。環境の不遇と無節制の痴情は遂にかかる大罪を犯すに至らしめた。財産こそないが彼女は美貌を保持するために富人の庇護を求めたのである。

西門慶は家僕の妻女等と往々密通した。彼女等は些少の金品が欲しさに主人に媚を呈した。西門慶はそれを受け入れる代りに、家僕を重用し、有利な仕事を授けた。道義心の弛緩した半封建社會の主従關係として當然あり得べき條件である。

西門慶の娘西門大姐は東京の陳敬濟に嫁してゐた。たまく某大官の失脚から、陳家は卷添ひを受け、家産没收、父の投獄等大災難を來たし、陳敬濟は一部の財産を持つて妻と共に西門家に投じた。西門慶はその財産を受入れ、當局に運動して巧みに自家の連坐を遁れた。彼はふだん地方の役人となつてきあひ、又首都の顯官の知遇を受け、或は巡按使と誼を通じてゐたので、それらの手蔓によつて罪の發覺を禦ぎ、又罪人庇護の運動をなして莫大な謝禮を受けたこともある。従て又賄賂請託に就ては相當に金を使つたこともある。一方には官の請負仕事をなす者のために高利を貸して収益を得た。かう

して西門家は日々に繁榮し、宅地を殖やし、花園を作り、資本を運用して手びろく商業を営んだ。清河縣はあまり大きな縣でもなからう。藥材商だけではこれ以上發展できない。そこで新に質店を開き絲店を出し、反物店を開いて、氣に入りの家僕を遠方へやつて品物の仕入れをした。店は譜代の番頭の外に、婿の陳敬濟に當らせ、又韓道國といふ才取のやうな男をつかひ、玳安、來安、來保、平安などといふ家僕を流用し、西門慶自ら各店を監督し、時に盛宴を張つて貴賓を迎へ、入つては妻妾と享樂し、出ては惡友と共に花柳界に豪遊し、また外遇を音訪れて情交をつゞけ、あらゆる私慾に耽つたが、遂に多情のため媚藥を用ゐて身を亡ぼすに至る。本妻吳月娘は金瓶梅中唯一の貞操夫人で、溫良靜淑、よく衆妾を統御したが、西門慶の死後、衆妾離反し、或は出奔、或は不義、中にも婿の陳敬濟は西門大姐を嫌つて潘金蓮と私通し、大に手古摺らせたが一々處分した。又家僕は仕入の金を胡魔化し、店の品物を持出す等種々不正のことがあつて、店は閉鎖のやむなきに至つた。吳月娘は夫の在世中、澤山の金品を保管してゐたが、死後は外部より種々脅迫を受け、頼みにおもふ實兄の吳千戸も餘り手頼りにならず、一年ならずして鉅萬の富を散失した。彼女は西門慶の死の直前に一子を設け孝郎と名づけ、これを命の綱と愛育したが、或僧から、この子は十二年後に必ず僧になると豫言され、當時は財産を恃んで信じなかつたが、十二年後たまく泰山に參詣し、暴漢に襲はれ、辛くも遁がれて下山すると、或荒寺で老僧に出逢ひ、因縁を悟され、遂に孝郎を佛門に入れて終る。

以上の如く金瓶梅は、明時代の社會惡を曝露したもので、決して春情の挑發を目的とする單なる猥本ではない。なぜなら、金瓶梅からさういふ部分を悉く除き去つても、その骨子には何の差し障りもなく、全體の構成は微動だもしない。(これが若し肉蒲團だつたら成文の目的を失ひ、全く意味をなさない。)即ち多妻の男の晝夜の行動を細大洩さず描寫すれば、あのやうな結果になるのは當然のこととて、閨中祕事の描寫は寧ろ蛇足に過ぎない。金瓶梅を多妻鑑とするが、本妻吳月娘の外に、李嬌兒、孫雪娥、孟三樓、潘金蓮、李瓶兒の五妾と婢妾春梅を加へて總計七人の妻妾は、西門家の暮し向きで見ると、決して多過ぎるとはいへない。これを近代の軍閥袁世凱の十數妾、張作霖の二十數妾、張宗昌の三十數妾と比較すれば、西門慶の如きは、洵に月前の提灯である。たゞこれを紙上に書き現はすと非常に目立つことになるが、實際支那富人の艶福生活は更にこれより甚しきものがある。

紅樓夢は寶玉といふ未成年の貴公子を中心にして各性情の異なる十二人の美女(十二金釵)を出し、更に多數の艷婢を配して、富貴榮華の境を精寫し、脂粉の氣を満喫せしむる小説である。この十二金釵には、寶玉の叔父、從兄に當る人の若き嫁もあり、寶玉の同母姉妹、異母姉妹もあり、或は父方母方の從姉妹もあるが、寶玉と戀愛關係を結ぶ者は實際あまり多くはない。(さうして實際の關係を結ぶ者は女中の襲人以外には殆んどないやうである。)たゞこれらの美女はみな女神の權化であること、寶玉の夢幻境に示現し、中にも寶玉と尤も因縁深き從妹林黛玉との綢繆切々たる戀情を綿々と書き現はしてゐるが、彼女は遂に目的を達せずして病み倒れ、黛玉の競争者薛寶釵の勝利となり、婚禮を

なすに至るが、たま／＼寶玉の神憑りのやうな發狂によつて、これ又目的を遂げず、結局寶玉は神仙のやうな乞食坊主に誘ひき出されて行術を晦まし、程經て彼の父は異郷に寶玉の姿を見出す、それが果して眞物かどうか、よく解らぬ中に消え失せる。――

この小説は非常な婦人崇拜で、女を清きもの、男を濁れるものと見做し、人の善惡美醜は浩然の氣の凝結して成るものと論じてゐる。骨子は甚だ神怪不思議であるが、個々の場面を見ると、實は極めて現實性に富み、その多數の美女はかつて作者と同棲したことがありさうに見える。然るに肝腎の主人公寶玉は、子供のやうな、大人のやうな、才人のやうな愚人のやうな、色餓鬼のやうな、生眞面目のやうな、柔弱のやうな、雄々しいやうな、さうして時々發狂して變なことを口走り、夢中になつて跳ね廻るまことに妙な人物である。恐らくこれは現世と天界を繋ぐとする作者の作意であらうが、この點が聊か失敗のやうに想はれる。寶玉の曾祖父は朝廷の功臣で廣大の領地を與へられ、三代に渡つて皇帝の寵遇を受け、寶玉の姉元春は入御して貴妃となつた。何しろさういふ家柄だから非常に宏大な邸宅で、女の召使が無數にある。寶玉は祖母の寵愛を一身に萃め、十五六になつても經學を學ばず、貴妃の賜つた大觀園に居住して、美しき姉妹と共に詩歌を作つて遊んでゐる。父は彼の遊惰を怒つて厳しき折檻を加へんとするが、いつも祖母に遮られて十分改善することができない。何しろすでに十五六歳になつた男兒を娘の中に入れて育て、娘に馴染むな、といふのだから無理な話でもある。このやうな高家であるから儀禮や祝ひ事が甚だ多く、正月、端午、七夕、中秋、重陽などはもちろん

春は花見、冬は雪見、或は誰れその誕生日の祝ひなどつき／＼に行はれ、或は歌舞、或は酒宴と年百年中、遊興に絶えまがない。祖母は非常な華美好みで、さういふ時には、いつも率先して席に出て、皆を楽しませ、自分もまた楽しむのである。この屋敷の重なる収入は、宏大なる領地から上納する年貢品で、農産物や織物や毛皮など毎年莫大の高に上る。しかし何分大家族のこととて出費も極めて多く、飢饉年には領地内の農民が娘をカタに金を借入るので、小婢が殖ゑるばかりか、殊に貴妃の入内後は、女役者や尼など邸内に養ひ、かつ宦官の附届けや何やかやで費用はますます／＼加はり、上邊は華美であるが、内實はだん／＼つらくなる。さういふ支那貴族の奥向きの情形が綿密に記され、殊に林黛玉が母（寶玉の叔母）を失ふて此の屋敷に引取られ、祖母や其の他の女族に對面する一條、新媳秦氏の閨房の有様など、濃艶極まりなく、洵に天界の女仙の集合もかくやと想ふばかりである。紅樓夢にも醜事や嫉妬が處々に散見するが、隱約の間に鋒矛を露はし、金瓶梅のやうな曝露主義ではない。一は成上り者の驕奢暴狀を描き、一は貴族の溫柔傾衰を描いてゐる。即ち支那獨特の半封建社會に於ける商人の生活と地主の生活である。

夜 來 香

「魚を買つて呉れないかね。奥さん」

コチ／＼に瘦せた男が、半裸體の肩の上に天秤棒をかたけて、兩端に二つの籠を吊し、潜門から這入つて來た。内院は百坪ほどの藪の空地で、前後には長屋が立ち、左右には瓦を載せた牆壁。楊柳が二三本生繁つてゐる。——七時ちかいのに、日は未だ薄すらと向ふの屋根を染めてゐる。

一時間ほど前に上海から歸つて來た瀧先生は、今やうやく浴みをすまして、籐椅子を軒下に出し、晩報を見てゐた。彼の妻桂英はその脚下にうづくまつて、蚊いぶしの栗子繩子に火をつけてゐた。素絹の支那服は雪のやうで涼しさうだ。

「今時分そんなものは要らないよ。もうとつくに御夕飯をすましてしまつたの」と桂英は答へた。

「そんなことは言はずに買つて下さいよ。久振で旦那様が歸つて來たのだから、これから煮といてあしたの朝あければいいよ」

「冗談ぢやない、この熱いのに、宵越の魚なんか食べられやしない。あしたの朝新規に取つて來て、晝までに持つて來れば、買つてあげるよ」

「奥さん、とにかく魚を見て下さい。取立のピチ／＼してゐる奴だよ。一つはこれも慈善事業だ。貴女方が買つて呉れなければ、私どもは御飯を食べられない」

小玉といふ小おんながお茶を持つて來て、小卓子の上に置いてすぐ口を出した。

「御飯が食べられないつて？ 嘘ばツかり、人は白い御飯を食べてゐるのに、お前は黒い御飯を食べてゐるからね」

瀧先生は晩報から眼を放さなかつたが、この魚屋が家慶膏子なることを知つてゐた。この表通の大宗祠の中に「内閣中書」の匾額がある。彼の父はその匾額を祖父から承け繼いだが、ひたすら花を買ひ妾を置き、友達を集めて風流詩酒の事ばかり談じてゐる中に、家屋の大半を失ひ年天くして死んだ。彼はそこで祖母と母親、二代の嫡の過分の溺愛の下に養育され、父の仕掛けた道樂の大集成をなし、小鳥を飼つたり、蟋蟀を賭けたり、魚を釣つたり、扇を上げたり、博奕を打ち、阿片を吸ひ、人の娘を誘惑したり、そんなことをしてゐる中に、今度はいよ／＼田地に手を着け、家屋や家財道具を賣拂つて、たうとう丸裸になつた。覺えてゐる藝の中ですぐさま役に立つのは、魚釣りであつた。そこで魚釣りをして四十歳の今日獨身で暮してゐる。それもよからう。徹底した生活だ。さうして彼は阿片に對する特異體質であつた。普通の人は癮が來ると、阿片を阿片パイプで燒きながら吸ふのであるが、彼は阿片膏を、じかに三四兩ものまなければ納まりがつかぬ。「家慶膏子」の名はそこから出たので、今、小玉が黒飯と揶揄したのは、即ち阿片のことである。

家慶膏子は小玉の言葉をきくと、顔の汗を拭いて辯解した。

「いけませんよ。姐さん、そんなこと言つちや。私は未だ朝飯さへ食べてゐないのです。どうして黒飯が……」

瀧先生は、小玉の餘計な口出しから、家慶膏子がこの辯解をしなければならぬことを氣の毒に想つた。

「君は毎日どれだけ賣るのだえ」

「大先生、世の中はすつかり變つちやいました。もうせんにはこんなやまめは一斤が四十錢。陸へあがつて町中を一廻りすると、日の暮れぬ中に賣切れてしまひました。今では二十幾錢といつても誰も買手がないのです。決して嘘は申しません。けふは未だ口あけもしてゐないので。——大先生ほんの少しでもいゝから口あけをして下さい」

「未だ明るいから、支度しない家はいくらもあるよ。内はけふ駄目、あした早く持つておいで」と桂英はすけなく断つた。

其時銅鑼がヂヤン／＼と鳴り出して、遠くから近くへ來てとまつた。皺渴れた男の聲がする。

「なんだネ。あの銅鑼は？」と瀧先生は氣味悪さうに眉を擧めた。

「天香奶奶(道敎の女神)の豕ぶたが三つ見えなくなつたんです」家慶青子はふしぎによく知つてゐた。さうして彼は秤の棹で秤皿を銅鑼のやうに叩いて、つまらなさうに立つてゐた。

「天香奶奶の豕を偷んだら、大罰當ですよ。誰だらうね。」と小玉は眼を丸くした。

「自分の家の俵が偷み出したかどうか知れたもんぢやない」と桂英は笑つた。

「奥さん」と家慶青子は少しうろ／＼しながら小聲で言つた。「魚がいやなら家鴨を買つて下さい。大きな奴が二羽ほどあります。」

彼は、後の籃を覆ふてゐた傘のキレにつかつたらしい古麻布を摘みあけると、家鴨が俄に啼き出し

た。ガア／＼桂英は自分の臂で、瀧先生の腕を小突いて意味ありけに笑つたが、すぐに笑顏を斂めて、

「もういゝよ。家では要らない。——何處から持つて來たか分りもしないものを、妾は買へない。」

「奥さん。冗談言つちやいけない。これは私のもんですよ。お米が無いから賣らうと想つてゐるので。あんなことは、なんほ私だつて出来るもんですか。變な處へ氣を廻しちやいけない」

「ほんとにお前さんのものかネ」小玉は眼交ぜをして言つた。「お前さんのものなら、傘のキレなどで匿して置くには當らないよ」

「冗、冗、冗談ぢやない。姐さん、それやあんまりだ。私の、私の、私のものだよ」家慶青子は口の廻りに沫ぶくを吹き出して、慌てゝ手の甲で拭うた。

その様子がいかにも可笑しいので、みな笑ひ出した。桂英は仕方なしに提言した。

「家鴨は藏まつておきなさい。その代り妾は魚を一斤買ひませう」

家慶青子は、家鴨を再び傘のキレで覆ふて、紐で括り、更に一方の籃をあけて魚を出した。

「魚はこの通り上等です。奥さん、三十二錢で買つて下さい」

「ゑ、三十二錢だつて？ 今しがたお前、二十幾錢だ、といつたぢやないか？」と小玉はすかさず素破抜いた。

「ウン二十八錢、最初からそのつもりなんだよ」

小玉が又なにか言はうとすると、瀧先生は急に大きな聲を出し、

「二十八錢で買つてしまへ。うるさい」と叱るやうに遮つた。

魚を賣つてしまふと、家慶齋子はものやうに天秤を肩に持ててのそく歩き出した。

「賣魚呀」彼は癡を過さぬせいか。聲がカスレて一向力が無い。あれぢや魚が腐つてしまふ。賣れるわけはない。

昨今この邊の風紀は非常に紊れて來た。各人所有の品物に少しも眼を放すことができない。年若い者は仕事がないので、みなぶら／＼してゐる。お母さんや妻のある者は、お母さんや妻の者を偷む。お母さんや妻のない者は、人の家の物を偷む。つかまへたり、なぐつたり、大騒ぎをするが、結局、とられ損で、自分の物を自分で買戻さなければならぬ。小盗人だから、重く罰するわけにもゆかず、始末が悪い。

小玉は柳の下の井戸端で魚の腸を抜きながら又お饅舌りを初めた。

「荷花嫂子は今日鶏七羽盗られましたよ。みんな玉子をよく生む鶏でね。庭先きの稻扱ぎ場に稻が澤山こぼれたので惜しいと想つて鶏を出し、着物を取込んで歸つて來てみると、もう一羽もゐないので。私のところへ來て、もしや紛れ込んでゐるやしないか、と鶏櫛を覗いてみると、うちには九羽の親鶏、十六羽の雛、すつかりで二十五羽——一羽多かつたから返してやりました。荷花嫂子は唇を尖らして、おや／＼と言つた切り、呆れてしまひました。かわいさうに、涙を拭いてゐましたよ」

其時壁の外に隣接せる長屋の一角から、物凄しい聲が絶え／＼にきこえて來た。あたりはもう薄暗く

なつて草木に風がそよいでゐた。

「福寶子や、お前は學校の行き歸りに、大踏小路の辻々で、鹿物に嚇かされたのだらう。早く奶奶(女神)の跡に跟いてお歸りよ。——福寶子や、お前は小山の上や水際で、犬猫牛羊の獸物から魂を脅かされたのであらう。奶奶の萬年燈を目印にして早く家へお歸りよ。——福寶子や、お前は明るみや暗みやみで、懼いものを見たのだらう。奶奶の萬年燈に跟いて來て、家へ歸つてお爺さんになるまで、生きてお呉れよ」

死にかゝつた孫の生靈を喚び戻す老媪の聲。まことに哀々切々たるものがある。

「福寶子は十分悪いやうですね。もう十日餘りになりますよ」と小玉は又喋舌り初めた。

「三太太はかわゆさうに」と桂英は同情して溜息を吐いた。

「三太太つて？ あの立派な息子はどうした」瀧先生はききかへした。

「それがね、去年の春、すつかり擦つてしまつて、借金取に攻められ、つひに訴訟沙汰になり、世間に顔向けができないとか言つて自殺して死んで仕舞つたんです。女房も夫の跡を追つて初七日がすむと耳環を吞んで、これも亦死んでしまつた。あとに残つたのは、七十のお婆さんと、満一歳の子供です。何しろ一週間のうちに二つも棺桶を出した上に、一粒種が又重い疱瘡にかゝつて、助かる見込みがないのださうです」

「やれ／＼、それは大變だ」と瀧先生も思はず嘆息した。

「お魚は油で揚げて置ませうか」小玉は手を洗つて立上つた。
 「今夜は涼しいから、鹽をして蠅帳の中に入れてときよ。あしたの朝、鍋に卸したらいゝだらう」と、
 桂英は命じた。

此時又わつと泣き出した女の聲が前よりも餘程近くに聞えた。それがため三太太の凄惨の聲は完全に覆はれて、あたりは馬鹿に賑やかになつた。瀧先生は憂鬱な顔を崩して忽ち笑ひ出した。

「ハ、ハ、ハ、ラヂオドラマでもこんなに旨く編輯することはできない。一體、なんだネ、あれは」

「去年の暮にお嫁に來た隣の松濤針匠の女房ですよ。妾はあんな女を見たことがない」と桂英はくすくす笑ひ出した。「夫婦となつたのはいゝが、プラトニックよ」

「あんな蒼蠅い女はない。毎日三度々泣くんですもの。三日に三々九度も泣かれたら、近處はたまつたものぢやない」小玉も憤慨した。

「松濤針匠は性來の不能力者で、あの小ツぼけなヒネこびた顔を見ても解りますが、二十歳の若者があんな子供のやうな聲を出してゐるんですから、發育が足らないのでせう」と桂英は説明した。

「松濤針匠が外へ出て縁いでゐた時は、嫁さんは獨り家に居て靜かでした。ところが立春から仕事が閑になつて良人は親方の許を引取り、ずつと家に遊んでゐるのが、嫁さんの方では氣にいらぬ、やれ、良人が意氣地無したとか、やれ、外形ばかり男でも無駄なことだとか、朝から晩までいびり散らされ、初めは我慢して一言も返答しなかつたが、先月の末彼はたうとう發狂して、哭いたり、笑つた

り、聲柄まですつかり變つてしまひました。……彼の母は一度洗濯しに此處へ來て、嫁の暴狀を泣いで訴へました。——倅が仕事を歇めたのは、不景氣だから仕方がないのだ。仕事をやめても、少しでもお前に餓もじい想ひをさせたか、お前を一度でも苦しめたことがあるか。たゞ苦しむのは、この老耄れの私ばかりだ。お前は良心を喪つて、良人を窘ぢめ抜いて、發狂させてしまつた。よし／＼、神様も見えていらつしやる。これは決してたゞで済むまい。……そんなことを言つてゐました」

「未だありますよ。あのお嫁さん、随分ふしだらの人なんですよ」

「お前、子供の癖に、そんなことをいふもんじゃないよ」といはれて小玉はコソと出て行つた。あたり眞暗である。

「玉匣記（怨靈出所録）も調べて見た。福林庵（尼寺）にも願掛した。三日つゞけて魂をよび戻したがそれでも好くならない」

三太太のカスレ聲は未だ續いたが、突然間近に松濤針匠が笑ひ出したので、彼女の獨白は揉み消されてしまつた。

「ヒ、ヒ、ヒ、ヒ」鬼哭のやうな笑ひ聲だつた。壁際の草むらから螢が一つ飛び出して頭の上に流れた。遠くの方で胡弓に合せて、「十個月懐胎」をうたつてゐる者がある。

「ヒ、ヒ、ヒ、ヒ」松濤夫婦の泣き笑ひは中々やまなかつた。一方三太太の聲はよく聞き取れないが、極めて淋しい絶望の聲である。

瀧先生は脊筋がひやりとした。

「小玉、洋燈を點けて呉れ、男の乃公でさへ氣味が悪いのに、お前達はよくこんな處に辛棒してゐられるね」

「馴れてゐますから、あんな聲はなんでもありませんが、冬になると、鼠が夜中に暴れ出すので、トキム／＼喫驚させられます」

「何とかして此處を引拂つて上海に一緒に行かうぢやないか」

「……………」

「カン、く、く、く、く」

「おや、又なにか初まつたぜ。火事ぢやないかしら」

聽耳を立てゝゐると、銅鑼の聲は斷續して次第に擴がつた。

「みんな……………歟と……………番を持つて……………集れい。……………東村の堰を築くのだぞ。……………」

築堰と聞いて、瀧先生は安心した。

一體、この地方の河床はあまりに淺過ぎる。それに近年しばらく浚渫を怠つてゐるので、雨が二三度降ると、すぐに洪水になり、堰堤が破壊しないでも、田歩が水浸しになり、穀草の影を没することが往々ある。だがお天氣が三日ばかりつゞくと、河床がすぐに露出し、同時に田歩がカラ／＼に乾いて又困るのである。

堰堤の修築は昔から度々行はれることで、今初まつたことではない。

銅鑼の聲はだん／＼近づいて、この邊の路次を廻り、たうとう長屋の總門の前まで來た。

「老八哥、今年はお前の番かね」と小玉の聲がした。

「俺しの番だよ」濁つた聲のあとに二つばかり咳嗽がつゞいた。

銅鑼打つ人は、潛門の前に立ち、破燈籠を院内に差しつけた。

「奥さん、唐辛子が出たが、あした少し持つて來ようか」彼は頻りに咳嗽込んで又喋舌つた。「先生はお歸りだね」

「あゝ歸つたよ、さつき着いたばかりだ。お前、からだは丈夫か」

「先生、全く降参つたよ。去年の冬の喘息があれからすつとつゞいて、中々治らない。もう棺桶に片足突込んでゐるんだからな」

「今年は作物の出來が好いそうだね」

「はいお蔭様で——」我慢してゐた咳嗽がぜい／＼と一しきりつゞいた。「よそでは稻が一元五十錢ださうだが、よそはとにかく太平だな」

「さうでもないよ。北の方では戦争が初まつてら」

「五千萬弗の棉麥借款が成立したといふのは本當でせうかね」桂英は突然こんなことを瀧先生にきいた。

「嘘ではなからう。農村を復興させるさうだから」

「さうしたら、米が高くなるのだらうか」老八哥は不安らしくきいた。

「安くなるね。五千萬も遣入るのだから」

「安くなつたら、豊年でもしようがない。この上、安くなつたら、それこそ……五千萬、……五千萬」とむやみに咳嗽込んでしまふ。

小玉はいつのまにかお茶を持つて来て飲ませた。

「おゝ……姐さん、おゝ……姐えん。……有難う。有難う。俺しは未だこれから方々廻らなければならぬ。ぢや、お休み」老八哥は咳嗽を續けて立去つた。

「おゝ老八哥、唐辛子を二斤、あした、届けてお呉れよ」桂英は後から叫んだ。

カン／＼、銅鑼の聲は次第に遠ざかつた。あたりはしんとして蚯蚓の聲が俄に目立つた。瀧先生は欠伸を一つして、

「もう寝ようか。やつぱり何となく疲れたね」

「えゝさうしなさるといゝわ。もう早くもないわよ」

突然、鐵器で木板を打つ音が北側の牆壁を超えて聞えた。

「なんだらうね」と三人は眼を見合せた。

ポーン、

お前はよくも奶奶（女神）の鶏を偷つたな。この命知らずめ。奶奶の鶏を偷つた奴は……ポーン……

……その鶏代がお前の棺桶代になるのだぞ。ポーン、

お前は永世人間になれぬ奴だ。お前の命は今夜の夜中まで保たない。……ポーン、

雷様がおツこちて、お前のからだを八裂きにするのだ。……ポーン、

お前は油鍋の中の子種の絶えた賊だ。

お前は奶奶の鶏を偷つて、米を買つて食つたら、お前のからだぢうの血は、お前のからだぢうの孔といふ孔から……ポーン……みな噴き出してしまふぞ。

ポーン、ポーン、……お前は。

オーオー……ポーン／＼

涙聲は本泣きに變つた。

しぶとい泥棒め、泥棒め、泥棒め。

オーオーオー

お前は奶奶の孤兒と寡婦をよくもこんな目に遭はせたな。

オーオーオーオー

ポーン

オーオーオー

奶奶の……食ひものも食はずにそだてた七羽の鶏。

ボン／＼

腸の腐れた奴め、泥棒め、奶奶め……オーオーオー、ボン／＼／＼、あれは何だえ」瀧先生は目を瞠つた。

ボン／＼

「荷花^{ハナカサ}嬢子が板を碇つて呪つてゐるのですよ」と小玉はささやいた。

桂英は瀧先生の手を握つてわな／＼顫えた。

「まあ、なんて恐ろしい呪ひでせう」

「これや大變だ。一晚中やみさうもない」瀧先生は又一つ欠伸した。

「寝よう、馬鹿々々しい」彼はひとり先へ立つて部屋の中に這入つた。

桂英もあとから跟いて來た。

「小玉や、門の門をしつかり掛けてお呉れ」

彼女の聲はほがらかであつた。

部屋の中は割合に明るい。寢臺の帳も洗ひたてど、雪のやうにすが／＼しい。

明るいところで見なほすと、彼女の顔は見ちがへるほど美しかつた。いつのまにか、自立たぬほどに化粧してゐたのが、ランプの光になごやかに照し出されて、素絹の輕装は楚々として、裸體の全曲

線を暗示した。

瀧先生は三年前、彼女と結婚した時の環境をふとおもひ出した。あの時には彼女の父も未だ生きてゐて家はこれほど貧乏してゐなかつた。父が死ぬと潜行運動に没頭してゐた彼女の兄は、ふらりと歸つて來て、失敗の煩悶を放蕩に紛らし、また／＼くまに家財を蕩盡し、遂に上海で自殺を遂げた。

瀧先生の父は、革命前、南京師範學堂の招聘教師で、彼女の父とは同事の間柄であつた。さういふ關係で、瀧先生が支那學研究を志した時、彼女の父は彼を此國によびよせて、自宅の一室から文献堂に通はせた。

桂英は女子中等學校を出たが、父が嚴格の舊道徳家であつたため、新しい學生運動にも加はらなかつた。一は兄の過激思想が父を苦しめてゐることを知つて、母亡きあとの淋しき父に同情した。そこでこの異邦人に對して兄よりも反つて親しみがあつた。彼等の結婚は兄が死ぬと同時に甚だ自然に行はれた。瀧先生はその後抗日運動が熾烈になるにつれ、禍ひの家族に及ぶを惧れて、上海に出たきり歸らなかつた。彼は某校の支那語の教師をして、桂英にも時々仕送りしてゐた。今度はいよ／＼家族の引揚を決行せんと企て、暑中休暇を利用して四圍の情形を見に來た。一時は随分困つたらうが、彼の遺して行つた古書など賣拂ひもせず、そつくり彼女の部屋にあつた。

夜更けてすや／＼ねむる彼女の枕元に通ふ一脈の匂ひは、遠い昔の想出のやうなものがあつた。

おゝ夜來香！

初めて彼が彼女の部屋に入った時の瞬間のあの印象がチラ付いた。

夜來香！ 夜來香！

けふは彼の歸宅をおもつて、わざ／＼この花を買つて来て、どこかに挿してあるのだらう。どこにあるか未だ知らぬ。

紅紙の「囀」字の上にとまつた蝶蜂！

あの時と同じやうに！

人質強盗

一

若しも東京で三井岩崎と云ふ連中を自動車で引渡つて来て、市内の何處かしらに圍まつて置き、贖金を要求したらどんなことになるだらう。どんなことにもなりはしない。犯人は數十時間を待たずして逮捕されて仕舞ふ。だからさう云ふ馬鹿々々しいことは、いかに無法な男でも計畫する筈はない。ところが人口三百五十萬足らず、地積東京の四分の一にも及ばぬ上海に於て、此種の人渡ひが三日にあげず行はれ、何年目かに漸くその片破が逮捕さるゝに至つては、いかにも警察力の微弱なことを感

ぜすにはゐられない。併し警察ばかり責めるのも無理であらう。世界何十個國の言語不同の人民が混然として諸々に雜居し、そのうへ行政機關が三つに分かれ、合作はするが統制されてゐないのだから當局者としてみればなかく／＼やりにくいことだらう。その點が匪賊の附込みどころだ。自動車人質強盗は實に上海の特産物である。併し之れとても民國十三年の江浙戦争まではなかつたことである。

當時齊燮元を向ふへ廻した盧永祥軍は軍費に窮し、商總會に申込んだが埒あかず、窮餘の一策として不意に金持の身柄を奪ひ、贖金を取立てたものだ。時の淞滬護軍使は何豊林で盧軍と聯合し、警察は其下にあつたので、租界内から人質を連れ出して疾風迅雷的に支那街に入り込めば占めたものだ。當局者は犯人を嚴重に搜索する振りして實は大に庇護したのであらうから、贖金などもわけなく取れた。勿論督軍や護軍使などが直接こんなことに關係するわけではない。最も信賴する部下に依て秘密に行はれ、正に一つの兇賊の仕業としか見えぬやうに、巧にカモフラージュされてゐる。で若し失敗したら、例令ば、支那街に入らぬ前に、租界巡捕に追捕されそうになつたら、彼は上官の爲に一身を犠牲にして我れと我が胸にピストルを押當て、轟然一發、潔よく自害して仕舞ふ。萬一逮捕されたら口を緘して何事も語らず死刑の宣告を受け支那側に廻されて、あわよくば重罪犯人の替玉をつかつて胡魔化して仕舞ふ。その頃商務印書館の支配人鮑某を自家用人力車から浚つて用意の自動車に押込み拐送中、鮑は脱出し匪賊の一人は溝渠の中へ彼を追込み引戻さんと争つてゐたが、巧みに群集に騒がれ、逸早く逃走したが、自動車を運轉してゐた他の匪賊は道なき空地に追ひ詰められ、遂に自殺したのも

其一例である。あの嚴重な警察網の中で白晝、かかる大膽な行爲を敢行するのを見ても決して只の鼠ではない。併し後には模倣者が續出したので、かゝる大膽な行爲も日常の瑣事となつて仕舞つた。本年七月天津で逮捕され、上海に廻送された匪黨の中に耿華堂といふ大物があつた。彼は山東濟南の生れで、曾て何豐林の下に參謀副官を勤め、師長にまで果進した人である。彼が人質強盜に専念するやうになつた動機は、以前軍職にあつた時、軍資金調達のため部下に命じて行つた方法を其儘用ゐて失職後の生活手段としたのである。併し匪黨の中の彼の位地は軍職ほどに高くはなかつたらうが、相當名望があつたものと思はれる。彼は判決の日の九日前、十月一日佛租界警察の留置所で自縊を遂げたが、其白絹の肌着に鉛筆で認めた遺書を見ると、「一生財産無し、悪事をなさず、公論に訴えたい」とあり、罪を自認しなかつたが、彼の死を傳へ聞くと、匪首の鄭堂生と尙震は一齊に自殺を計つたところを見ると因縁の浅からぬことが分かる。(鄭、尙等は九日の決にいづれも死刑の宣告を受けてゐる。)

彼等の罪狀は、民國十七年(昭和三年)から本年二月までの間に、上海では中南銀行副行長黃浴沂、四明銀行副經理陳仰和、雲南師長顧子貞の子顧澤霖、新森記營造廠主何紹庭、顏料巨商黃葆華氏等を拉致し、いづれも五萬十萬と云ふ莫大な贖金を取つて釋放したが、中にも兇惡な行爲は黃浴沂奪取の時、自動車運轉手と護衛者を射殺し、後ち黃の家族が請け出し交渉の爲めに差遣した吳崑山と云ふ者に對し、贖金吞没の疑ひを掛け、之れを中山路まで誘き出し射殺した。尙ほ又天津方面では英商怡和

洋行買辦陳祝齡、梁忠吾等を拉致し、交渉中これを殺し屍體を湮滅、後ち仲間の小紹興を縊殺した。耿華堂は直接手を下してゐないが、尙震、劉一民がいづれも彼の舊部下軍人出身で、此兇行が敢行されたところを見ると、彼の命令に依てなされたものと推想されえる。

耿華堂の外にも高級武官で人質強盜を働いた者がある。それは孫傳芳の下に憲兵隊長を勤め、吳佩孚の下に長江水巡總司令を勤めた李某と云ふ男で、濟南の富豪を人質に取り、贖金を強取した上に殺害し、上海に躲れてゐたが、家に藏まつてあつた古タイヤをボーイが盗み出し、それから足が附いて民國十七年逮捕され處刑を受けた。其外元警察廳長と云ふ大物もあつたが今覺えぬ。最近では元公安局水巡隊總隊長王勤唐が、佛租界勞爾東路に人浚ひ機關を設け、楊寶富外數名の手下を養ひ、巨商孫養孺を拉致したが、後ち發覺し人質は救出され、王等以下孰れも極刑に處せられた。

以上は何千件中の一二例に過ぎないが、恐らく上海中の金持と云ふ金持は、此種の強盜に就て體驗のないものは少なからう。さうして之れを模倣する者が日々に多くなり、現在では親戚中の不良漢が金のある同族を脅し、或はお家騒動に利用するなど、事件は愈々出で、愈々奇である。

二

「佛租界西門路潤安里十九號、孫順記絲織工場主、紹興人孫玉順の一子茹寶(六歲)は本年五月二十日の晝飯時、門前で喜遊してゐると、忽ち失踪したので、家人は八方に人を出して捜索中、やがて郵

便で前後八通ほどの手紙が来た。それには八千圓出せば子供を返へすと云ふので、再三交渉したが話が纏らず、そのうち警察の耳に入り、主謀者は孫家の長屋を借りてゐる同郷人鄭法祥と目星が付き、直に逮捕に向つたが、同家はすでに移轉したあとで行衛がわからず、まもなく西藏路の遠東ホテルで、鄭妻周氏以下五名を發見し直に拘引したが、鄭は巧に逃げ終ふせて未だに縛に就かず。

一方被害者側は匪方と交渉し、贖金二千圓に負けさせ、愈々人質引渡の段取になつたが、匪方では探偵の埋伏を恐れ、金は先拂ひ、人質は後渡しと主張し、被害者側では、金は先拂でもいゝが、匪賊が食言して人質を返へさぬことがあつてはならぬと思ひ、此一點で話が纏らず、警察では已むなく前記六名を放免して鄭の立寄るのを待つてゐる。

「本年十月十八日、江北人王金生、潘如高、陳德勝等十三人組の強盜團が上海の各處に於て逮捕された。右の内陳德勝は人質強盜の嫌疑もあるので嚴重に訊問すると、彼は數名の共謀者と共に昨年四月二十七日午前六時頃、威海衛路七二二號に居住する工部局の糞便頭目王子林家を襲ひ、其子福海（四歳）を奪ひ取り、通州の田舎に匿し置き、數萬弗の贖金を要求すると、王は年五十にも餘り、福海は一粒種で若しものことがあつてはならぬ、と四萬弗で之れを請け出した事實がある。主謀者は被害者王子林の正妻の弟嚴士榮で一味徒黨は同家の舊使用人であると述べ立てた。そこで嚴士榮の妻、王子林の妻（即ち嚴の姉）女婿及び同家の舊使用人等數名を拘引して取調べてみると、事件は非常に混み入つたものだ。

人質福海は王の愛妾張氏の生んだもので、本妻の嚴氏には娘はあるが男の子がない。娘はすでに徐雲蓀と云ふ婿を取り、徐は税關に勤め、嚴氏は夫と別居して同處に居る。そこで王子林の愛は張氏母子に傾くので、嚴氏は之れを不満に思ひ、弟の嚴士榮、婿の徐雲蓀等と示し合せ、番頭の項文山をも味方に引入れ、四月二十七日の明け方、折柄の薄闇に紛れて項文山、揚月祥、沐小四子、陳德勝、嚴士榮及び嚴妻等一行六名は二臺の自動車に分乗して王宅を襲ひ、下女を射殺し主人を傷付け、福林を奪つて逃走した。右の内嚴妻だけは表に待受け、福海を受取るや否や、同じ自動車で滙山碼頭に馳せ付け、豫ねて用意の小船に載せて崇明島に送付けた。嚴士榮は同年九月九日、上海を出發して崇明島に向ひ、同處で福海を受取り、變名を用ゐて王宅に向け、嚴重な交渉をしたが、後ち危険を感じ通州に移り、遂に談判に成功して、マンマと四萬弗を確得したのである。

「河南路に蔡同徳と云ふ相當に賣込んだ藥店がある。主人は名を雨潮と云ひ、白克路六百九十八街十一號に居住してゐるが、十月九日午前十時頃、同家の小僧謝寶根が、蔡の女兒蘭芬（三歳）を抱いて買物に行つたまま歸らず、時節柄誘拐でもされやせぬかと心配して警察に届け出で午後三時頃歸つて來ると、同家の鐵門の上に一封の書が置いてある。それには「決して警察に訴え出てはならぬ」といふことが記してあつて小山東と署名してある。次の日、手紙を瓦に結び付けて物干臺に投げ込んだ者がある。それには「若し交渉する氣があるなら、自動車の前に三角紅旗を挿して置け」と書いてあつた。十二日にも又手紙が來た。「紅旗を見たからいよく相談に乗らう」と云ふことである。最近又第

四信が来た。贖金三萬五千圓、紙幣を十文字に束ねてビスケットの罐の中に入れて置き」と云ふことである。ところが爰に蔡雨潮の甥に當る蔡同球と云ふ者が此事あつて以來、毎日のやうにたづねて来て伯父さんを慰めたが、實は家内の様子を探り、探偵の行動を見に來てゐたのである。ところが探偵の方もさる者、訴え出を聞いたまゝ同家には立入らず、只其附近に張込ませてどんな者が立寄るかを見てゐた。

さうとは知らず蔡同球は警察が冷淡だと云ふ伯父さんの口振りを見て、自ら進んで匪賊に對する交渉の任に當らうと云ひ出した。蔡雨潮としては同球は甥のことだし、少しも疑はず、折柄今度の事件に心配して田舎から出て來た小僧の父謝偉興と云ふ者を附けてやつた。十月二十一日二人は同家を立出ると、すぐに密偵につかまつて警察に引致された。取調べの結果、謝は證人として留置され、同球に向つて嚴重に訊問すると遂に包み切れず、小山東は彼の變名で、菊芬は閩北長安路求安里二號の彼の自宅に隠匿してあることを自白した。そこで早速同處に馳け付けると、何にも知らぬ菊芬は小母さんのところでチャホヤ待遇され、小僧を相手に機嫌よく遊んでゐると云ふ始末で、人質強盜としては餘りに飽氣ないことであるが、兎に角菊芬嬢ちやんと小僧を救ひ出して無事に蔡家に送り届け、尙ほ同球の妻邵氏を引致して取調べると、彼女は、夫が本家の依頼を受け菊芬を當分預かつてゐるのだと云ふ言葉を信じ、毎日大切にお守りをしてゐたのだと云ふ。

同球は久しく失業して伯父さんに無心を云ふと、伯父さんはたまに出せば三圓か五圓で生活にも窮

し、一時菊芬を匿して自分が捜し役になり、お禮を貰はうと思つたが、それにしても中々辛い伯父さんだから澤山出すわけはなし、いつそ近頃流行の人質強盜を真似て、大東の金をふんだくらうと考へた。で手紙も自分で書き他に共謀者は一人もない。全く一時の出來心だと云つた。」
之等は先づナンセンスの方だが、ナンセンスにしても質の好くないナンセンスだ。

三

人質強盜の尤も困難な仕事は人質奪取の時と贖金受取の時である。

人質奪取の時は先づ自動車が必要である。

最初行はれた方法は三人組の強盜が何食はぬ顔して、そこらのガレツチから自動車を借りて目的地に達し、人質が出て來るのを待つ、人質が出て來れば二人は左右から人質に向つてピストルをつきつけ車内に連れ込む。一人は運轉臺に飛び上り、運轉手にピストルを突き付け車を郊外に走らせ、適當のところまで運轉手を縛り上げ、猿轡をかませて野外に投げ出し、それから匪賊自身が運轉して匪窟に連れ込む。人質にはすでに擦りガラスの塵除け眼鏡が架けてあるから何處へ行つても何物も見えぬ。匪窟と云つても中々豪華な構へで、時に依ると、それがフランスタウンの警察の眞前にあるから奇抜だ。

人質は一室を出ることと、窓を覗くことだけは嚴禁されてゐるが、食事や煙草に事缺くことなく、

決して苛酷な扱ひを受けぬ。しかし時に依ると、郊外にほつりと立つ一軒屋の穴倉の中に押籠められることがある。日本人にも知合ひの多い林と云ふ人などは曾てさう云ふ處へ入れられたことがある。其家は關北の郊外の三軒續きの舊家で、支那流の石庫門が三つ並んでゐる。第一の家はわざと開け放しにしてあつて、木工がしよつちう木を削つてゐてそこらぢうに鉤屑が散らばつてゐた。第二の家にも第三の家にも人が住んでゐたが格別何の仕事があるかと云ふわけでもない。第一の家が曲者だ。始終開け放しにして仕事をしてゐるから世間體はいい。しかし鉤屑を拂つて土間の上をよく見ると、そこは揚戸になつてゐて地下に這入れるようにしてある。地下室の深さは四尺位で隣家に通じ、隣家の方に寢臺が装置してある。高さ四尺位の部屋だから大抵の人は儘んでゆかなければならぬ。さう云ふところで、晝も夜もランプをつけて一ヶ月ほども入れられて見給へ。随分つらかつたよと云ふ話。

自動車奪取方法として運轉手をいきなりおツ拂つて仕舞ふこともある。それは淋しい處に車を出させて、運轉手の頭からすつぽり袋を覆ふせ、口もきかれぬやうにしてぐる／＼にふんじばつて荒野の中に抛り出して置く。さうして自動車を奪つてから仕事にかゝる。此方法は運轉手が早く繩を抜け出して訴え出る恐れがあるから甚だ急がしい。

昨日(十一月六日)城内の珠寶商楊壽生を拉致した方法はこれである。午後五時頃日本人經營の森村ガレツヂから、此方法で自動車を奪ひ取り、午後六時頃、城内城隍廟西光啓路第四號揚家の裏門で人質拉致に成功したが、六時四十五分には森村の運轉手は繩を抜け出し、警察に訴え出たので、番號

を各署に通知し、その自動車に注意してゐると、午後九時四十五分頃、佛租界福履理路フクリョリロに同番號の自動車が見られ、折柄通行停止の處を無理矢理に突切らうとしたので前にゐた人力車を顛覆させ、運轉手はあわてゝ車を捨てゝ姿を隠した。當時佛租界の交通巡査は未だ報告を受けずゐたので、單に罰金を恐れて逃げ出したものと思つてゐたが、何ぞ知らん、其運轉手は楊壽生を浚つた匪賊の一味で右の空車を何事にか使ふ積りであるのだらう。

第三の方法は、人質その物の自動車を利用するのである。これは運轉手を脅迫して淋しい處へ廻させ、適當の處へ運轉手を卸してゆく。第一の方法によく似てゐる。併し相當の金持ならば武装した護衛者が影身に添ふて附添ふてをり、又運轉手にもピストルを携帯させてゐるから、さう云ふ場合には先づ兩者の武器を奪ふか、或は手取早く射殺して仕舞ひ、さうして人質を拉致するのである。前述の黄浴派拉致はその方法である。

第四の方法は人浚らひ用のために自家用自動車を備へて置くのである。かうすれば偽番號を使ふことが出来るから、自動車だけでは一寸目星が付かない。しかしこれほどの事をする人は直接兇手とはならない。前述の王勤唐の如きは、人浚ひ中の資本家で、多くの乾兒を養ひ、武器や家屋なども提供してゐたのである。耽華堂なども恐らくその類であらう。

何しろ自動車とピストルは人質強盜にはなくてはならぬ武器で、ピストルはすでに輸入禁止となつてゐるから嚴重に取締ればいとして、自動車を何とか改良してみたら、といろ／＼工夫するが旨く

ゆかぬ。或西洋人が靜安寺路の程と云ふ大地主のところへ持つて來た自動車は、内から外が見えて外から内が見えないガラスが張つてある。これは強盜側には都合がいいが、良民側には更に役に立たぬ。そこで最近車内に短波の發信器を取付け、いざと云ふ場合に警察に通報する仕掛を發明した者がある。器械が非常に高く付くので、發明會社の獨專事業にすれば會社は一切の設備をなし、損料で貸し付けるといふので目下工部局で研究中である。

四

贖金受授の際は双方とも甚だ困難な事情がある。人質が拉致されると、新聞には大々的に報道され、警察は忽ち活動して、大センチションを捲起すが、其間匪徒は平氣で脅迫状を人質家族に送る。

「お客様は鄭重に扱つてゐるから心配は無用である。交渉に應じる考があるなら相手になつてもいいが、先づこれ／＼の表示をして見せろ」などと云ふのが普通である。前述の三角紅旗は其一例である。

金持は實に弱いもので、かう云ふ場合決して警察に訴え出ない。下手に手を入れられて肉票(人質)を破られて仕舞つては大變であるから唯々諸々として之れに應じる。

匪徒は表示を見ると人質に迫つて「これこれの金を拂つて請出して呉れ」と云ふ手紙を書かせる。

相手の身分次第で三十萬にも五十萬にも評價されるが、此際なるだけ家族を心配させるやうに、人質の衣服の一端を切取つて脅迫状と共に送り、或は血判を押させたり、爪や髪を切らせて手紙の中に封入する。ひどいになると小指の一本位は切つて仕舞ふ。これを見て誰れだつてびつくりしないものはなからう。そこで双方から代表者を出して某處で會見する。會見場所は大抵旅館であるが、注意深い匪徒は最初の指定地では會はない。最初の指定地には見張りを出して、家族側代表者の周圍に氣を付け、探偵などが張込んでゐるやせぬかといふことに對して特に注意する。家族側代表者は長い間待ち呆けを食つて、これは哄されたんぢやないかと思ふ頃、忽ち電話が掛つて來て、「急に模様變えになつたから某處へ來て呉れ」と別の處へ呼び出し、そこで初めて會見する。老練なる匪徒は此際手取早く話を取極めて仕舞ふのであるが、人質家族としてはなるだけ安く請出したいと思ふから、五十萬圓のものなら十萬圓位に値切倒し、匪徒側の方でも掛値があるから餘り無理を云はない。双方折合つて十萬圓位になる。家族側では金と引換えにして貰ひたいと云ふ。匪徒側では前金拂ひを主張し、贖金受取證及び脅迫状と引換えに人質を渡さうと云ふ。前述茄實の例を見てもわかるが、これが極めて難關で、一方は金の只取りを恐れ、他方は探偵の伏せ網を恐れるのである。

大資産家は五萬や十萬の事なら思ひ切り好く出すが、小資産家は二千三千でもなか／＼出さない。併し結局は八分通り前拂ひで、あとは人質を渡す時に拂ふと云ふことになり、續いて最後の會見が行はれる。此時が匪徒に取つては一番危険な時で、代表者も身輕な者を選び、見張も充分に置いて手入

れがあつたら、すぐに電話で頭目の許に報告する。

人質家族が匪徒と交渉することは中々危険な業である。民國二十年（昭和六年）二月、浦東の米商何介春が、匪徒高長生、馬喬生の手掛つて人質に取られ、親戚朱啓榮が之れを請出しに行つて何萬圓と云ふ大金を拂つたが、朱も亦富商であることが知れ、其場で人質に取られた。これは木伊乃取の木伊乃以上で、盗人に追鎧と云つてもこんな馬鹿々々しいことはない。だから家族代表として差出す人物は親戚中のならずものか、さもなくば肝玉の太い家僕なんかである。さう云ふ人物だから匪徒と交渉中贖金を吞没することもないではない。匪徒も亦疑ひ深いから少しでも約束に違犯すれば遠慮なく殺して仕舞ふ。前述黄浴沂の家族が差出した吳崑山も或はさういふ人物であつたかもしれぬ。又匪徒側も交渉中探偵に尾けられる恐れがあるから、第二流の人物を出すので、之れも亦贖金を吞没し易い。前述の小紹興は此種の人物であらう。

以上の記事だけを見ると、被害者と強盗の妥協で終り、警察が人質を救出することは更にないやうに見えるが、決してさうではない。警察も中々活動してゐる。さうして匪窟に手を入れる時には、全く一種の市街戦を演じ、時には機關銃、消防自動車など出動することがある。左に最近の一例を挙げよう。

「沈田辛氏は湖州の絹繭商で有名な資産家であるが、其子沈孟翼は本年二十五歳でバンドの中國銀行に外國爲替係を勤めてゐたが、妹の詒璠も新開路の税關圖書館に勤めてゐたので、二人は毎日自動車

に乗つて妹は圖書館前で下り、兄は中國銀行へ行くのであつた。六月二十日孟翼はいつもの通り、午前十時四十分頃中國銀行の前へ車を寄せつけると、忽ち十餘名の兇盜が手に／＼ピストルを持つて自動車を取圍み、運轉手を追拂つて自動車ぐるみ何處へか連れ去つた。匪徒はやがて孟翼に迫つて手紙を書かせ、八萬圓の贖金を要求したので家族は交渉中、警察側も極力探査に力め、七月二日密報に依り、共同租界自來火街一二六號に匪徒の一部が潜伏してゐることを知り、同處で五名の匪徒を逮捕し、彼等の自白に依て、佛租界辣斐德路五五九號に人質を隠匿しあることが判明したので、直に佛租界警察の助力を求め、中西兩國人の高級探偵が數十名の部下を引連れ、防弾チョッキ、ピストル等自身を固め、數臺の自動車に分乗して目的地に馳せ付けたところ、匪窟は三階建の廣壯な西洋建築であり、先づ周圍を取圍み、尤探偵長、金督察員、西探コランデー氏が門扉を破つて眞先に進んだが、匪徒は頑強に抵抗し、二階からピストルを發射すること三十餘發に及び、探偵も亦勇敢に應戦して二階から三階に攻め上げ、遂に男女十名を逮捕し、六寸ブローニング銃二挺、四寸のコルト銃一挺、彈丸數發を押収した。人質孟翼は當時三階表部屋に監禁されてゐたが、無事に救出することを得た。取調の結果、匪首馬喬生は敏體尼薩路歸安里十三號に潜伏してゐたので直に逮捕、其外四名の同犯を他所で引致し、合計二十名、近來の大捕物であつた。匪首馬喬生と高長生は前出の米商何介春、朱啓榮を襲つた同一犯人であり、尙ほ妓女紅菊花の首飾を強奪したこともあり、犯跡山の如く一々自認したので其後の判決に依り、十一月二日二人は遂に死刑の執行を受けた。」

人質強盜の手口を簡単にしたのがピストル強盜である。午後六時頃、立番巡査の交替時間を見計らつて、不意に兩替屋を襲ひ、手代を威嚇し、店のテーブルの上や抽出しの中の在金をそつくり浚つてゆくのである。之れが中々馬鹿に出来ない。少くとも五六千圓、多ければ何萬圓に達することがある。尤も前から内偵して金の溜つた時を見計らつてゆくからでもある。兩替屋は度々の被害に懲りて其後網戸を締めて營業してゐるが、それでも隙きを覗つて闖入するので、警報器やピストルを備へて置いても何の效力もない。

此兩替屋をめあてにするピストル強盜の起原は、人質強盜よりも十年ほど前に溯り、民國三、四年頃、國民黨の陳其美が袁世凱の帝政に反對し、上海佛租界を根城にして支那街高昌廟にある江南機器局占領を目的に青紅幫を雇入れた時、彼等の手に澤山のピストルが渡つた。其時軍費調達のため兩替屋を襲つたことがあつたが、後ち陳其美は暗殺され、失業した青紅幫は引續き悪業を繼承して専門のピストル強盜に變じた。初めは自動車で乗付け、咄嗟の間に仕事をして同じ車で逃走したが、これでは番號の方面から足が付き易いので、今では徒歩でピストルを亂射しながら逃げ出してゆく。夕方のラッシュアワーに巡、賊入亂れてボン／＼往來に打出すのだから堪つたものぢやない。流弾は横飛びして罪咎もない通行人を傷くることが少くない。

警察では對策として不意に非常線を張つてピストル携帯者を拉致するが、賊も亦密線を張つて注意してゐるから中々其手に乗らない。

ピストル強盜も人質強盜も其初めは、軍閥や政黨者流が軍費徵發の非常手段として文明の利器を悪用することに就て範を示し、其流毒を深く社會に残した。

何故にかゝる匪賊が横行するのか。察するところ、左のやうな條件が内在するのだらうと思ふ。

一、支那人は賭博性に富み、一かペチかで運命を賭けることを好む。それゆゑにつかまれば必ず殺されるものと知りながら、萬一を僥倖して富翁になりすまさうと思ふ。又或點までは賄賂が利くから、確實な證據を握られない限り、匿し終ふせることが出来る。それに又廣く政治が行届かないから、他地方へ高飛びしたり、或は山中へでも引込めば中々つかまらぬ。

二、金持が心弱く後難を恐るゝ事、昔からの習慣として政府に信頼せぬ。大抵なことなら金を出して内濟で納める。警察の力で匪賊をつかまへても中々驅り切れないし、探偵やなにかに多額の禮金を要し、後難は依然として残る恐れがある。

三、匪徒には在來三合會（廣東）とか、青紅幫（長江）とか、傳統的の秘密結社があつて其仲間に入れば到處でかこまつて呉れ、風を食らつて逃げ出したあとでも身の振方が付く。彼等の間は非常に義理堅く互に庇ひ合ひ、共謀犯の内一人がつかまつても口固く、秘密を滅多に洩さぬ。

四、非常に窮迫した無智な者が多い。ピストル一挺と銀十弗で、人殺しを平氣で引受ける者がある

位だから、其他は推して知るべしである。彼等はピストルを見て、之れさへあればと云ふ氣になるのだらう。本年六月十八日拂曉、遊戯場大世界の門前で、同所のマネージャー唐嘉鵬を暗殺した男は張小四子と云ふ江北人^{カンギン}で廢船の中に住み、車を挽いて暮してゐたが、王金魁と云ふ者の又頼みを受け、仲間の周木匠の橋渡しで、ピストル一挺と謝禮四百圓の約束で兇行を引受け、首尾よく目的を達して前記の禮金を受取り、故郷に逃げ延びてゐたが、後ち上海に舞戻り十月二十八日遂に逮捕された。支那の貧民窟は旅人の瞥見するやうな暢氣なものではない。彼等の窮迫は些細の禮金で何の恨みもない人に對して人殺しを敢てするまでに押詰まつてゐる。かう云ふ者がピストルを持てば強盜になるのは當然過ぎるほど當然で、強ちこれは青紅幫ばかりの專業ではないと思ふ。

青 紅 幫

一

支那の秘密結社は、宗教的のものと政治的のものと二種類に大別される。併し宗教的のものも、だん／＼勢力を得るに従て、政治的野心に發展し、又政治的のものも一種の宗教的通念に依て結束してゐるのであるから、かういふ風な區別は甚だ當を得ないやうにも思はれる。寧ろこれは道教的のもの

と、儒教的のものに區別した方がいゝかもしれない。さうして道教的のものは結局儒教的のものに征服されて仕舞ふことは、支那の歴代の反亂、易世革命を以てこれを證するに足る。

一王朝の紀綱が弛むと、種々の謠言が行はれる。その謠言は取止めのない子供の歌であるが、それを陰陽五行説に解説して眞天子出づと稱へられる。或は又野心家が謎のやうなことを云ひ觸らして、その時の民心の需要に應じて解説する。かゝる場合は大抵大天災のあつた後ち、民力疲弊し盡し人民は途方に暮れて迷信に手頼るのであるが、結局多大の犠牲を拂つて迷夢は打破され、本來の倫理的判斷に立戻るのである。かゝることが度々行はれた結果、人民は自衛上、結幫の必要を感じ、遂に結幫は社會の寄生的存在となつて癥結した、これが洪幫^{フオンパン}(紅幫)即ち哥老會、青幫^{チンパン}、天地會(三合會)などの秘密結社で、一般には青紅幫と稱してゐる。

結幫は三國志で有名な劉備、關羽、張飛が東漢の末、義を桃園に結んだのが始まりで、これは支那社會史上特筆すべき大事件であつた。それまでは社會は血族集團で結束してゐた、即ち同姓相依であるのであるが、爰に義を持つて結ばれた異姓兄弟といふものが初めて現はれた。

三人の英雄は黒い犢と白い馬を犠牲にして天地神明に對して香燭を焚き、永久不變の誓ひを立て、同年同月同日に生まるゝに非ざるも、願くば、同年同月同日に死せんと言つた。後來所々に行はれる結幫の諸要素は、全くこの義の一字から出たもので、此處に至つて彼等は血族を認めない。即ち「上は父母に傳へず、下は妻子に語らず」——白蓮教

「真空家郷、無生父母」——八卦教林清の眞訣

などである。「忠義」といふのは、日本の忠義とちがふ。日本の忠義は君主に對する臣下の貞操である。支那の忠義は個々人が相互に盟約を嚴守することであり、さうしてこれは強固なる一種の法律的結束をなした。

「三國」は漢室を復興する目的を以て結幫は政治的に利用されたが、「水滸」は掠奪強盜を行ふべく、結幫は社會的に利用された。故に忠義水滸傳を讀むに及んで、我々の甚だ奇怪に感ぜられるのは、その目的が掠奪強盜にありながら、彼等は忠義を稱してゐるのである。日本の忠義は倫理的封建的であるが、彼等の忠義は反倫理的社會的である。一種の階級闘争には違ひないが、現在の階級闘争とは全くその性質を異にするものである。彼等は基礎を經濟に置かず、政治に置いてゐたのでその目的を達成すれば、矢張り封建的官僚主義に戻り、その工作は單に破壊作用をなすだけで、根本的には何の改革もない。

支那の社會は西洋と異り、經濟上の變革がなかつたので、封建的官僚政治の舊殻を脱することが出來ず、社會が疲弊のどん底に落ちると、いつも必ず眞天子の出現を翹望した。そこで結幫の寄生的存在が意義のあることになる。

明の遺臣は陽性の三國式を採らず、陰性の水滸式を採つた。彼等は結幫して復興を計つたが、大義の下には勝つことが出來ず、遂に社會の寄生的存在として、非合法的方面に發展し、賭博、密賣、強盜、誘拐、殺人請負等の地下的社會を結成した。可笑しなことには、水滸の小説がそのまま聖典となつたのである。水滸傳第七十一回忠義堂石碣學天文、梁山泊英雄排座次の一節に、

八方共域姓一家、天地顯_レ豈_レ斂_レ之精、人境合_レ傑_レ靈_レ之美、千里面朝夕相見、一寸心死生可_レ同、相貌語言、南北東西雖_レ各別、心情肝膽、忠誠信義並無_レ差、其人則有_レ帝子神孫、富貴將吏、並三教九流、乃至獵戶漁人屠兒劊_レ子、都一般兒兄弟稱呼、不分_レ貴賤、且又有同胞手足、捉對夫妻、與叔姪翁舅、以及跟隨主僕、爭鬪冤讐、皆一樣酒筵歡樂無_レ間、親疏、或精靈、或粗鹵、或村撲、或風流、何嘗相擬、果然識性同居、或筆舌、或刀槍、或奔馳、或偷騙、各有_レ偏長、眞隨_レ才器_レ使、可_レ恨_レ的是假文墨、沒奈何著一個聖手書生聊存_レ風雅、最_レ腦_レ的是大頭巾、幸喜得先殺_レ却_レ白衣秀士、洗_レ盡_レ酸_レ慳_レ、地方四五百里、英雄一百八人、昔時常說_レ江湖上聞名、似_レ古_レ樓_レ鐘_レ聲_レ傳播、今日始_レ知_レ星辰中列姓、如_レ念_レ珠子_レ個個連牽、在_レ晁_レ蓋、恐_レ托_レ膽_レ稱_レ王、歸_レ天_レ及_レ早、惟_レ宋_レ江_レ肯_レ呼_レ群_レ保_レ義_レ把_レ案_レ爲_レ頭、休_レ言_レ嘯_レ聚_レ山林、早_レ願_レ瞻_レ依_レ廊_レ廟、

かういふ思想の下に、天を父とし、地を母とし、星を兄弟とし、月を姉妹として、血を啜つて盟約した。天地會の名は實に此處に發したのである。

天地會又三合會と稱し、福建廣東地方を繩張内とする秘密結社で、此種のものでは最も舊く、江西の哥老會と血脈相通じてゐるのである。起原は福建浦田縣九連山に少林寺といふ寺があつた。此寺は團摩大師の創建に成るものと言はれ、寺僧は大師相傳の武藝に秀で全國に名高く、學習する者はみな此處に集つてゐるが、康熙年間西藏王が反旗を掲げ邊境を冒した時、官軍は大敗したので、清帝は賞を懸けて征討の士を募つた。その時、少林寺の衆徒中に鄭君達といふ者があつて、百廿八人の僧を引連れて上京し之に應じた。清帝は大に喜び彼を總兵に任じて征討の全權を委ね、「京后日山」の四字を刻した寶劍を賜り進軍を許した。僧軍は一兵も損せずして西藏を征服し、未だ二個月ならずして凱旋した。鄭君達等は非常な歓迎を受けて盛大なる酒宴を賜はり、「聖澤無疆」の扁額と「英雄居第一、豪傑定無双、不用文章朝聖主、全憑武藝見君王、出門朝見君王面、入寺方知古佛心」の對聯を賜り、僧軍は非常な面目を施して歸山した。ところがまもなく陳文耀等の讒言に依て、少林寺は焼打に遭ひ、鄭君達を初め僧侶の死する者甚だ多く、僅に十八名が身を以て火災の中より脱出し、沙灣口まで逃げ延びた。此時彼等の怒は絶頂に達し、「天の長きが如く、地の久しきが如く、千萬年を経ても、必ず此仇を報ぜん」と指を咬んで誓ひ結黨して天地會と名づけ、やうやく黃村に達した時、追手の爲に更に十三名殺され、蔡德忠、方大洪、馬超興、胡德帝、李開式の五名の僧が生き残つた。五名は丁山

へ行つて鄭君達の妻子に面會し、墓前に團祭を行つたが、清兵の追撃止まず、鄭の妻郭英秀は墓後に一口の桃劍を拾つて之を禦ぎ、一同やうやく險を脱したが、英秀は到底逃れ難きを知り、桃劍を二子（鄭道德、鄭道芳）に授け、天地滅びざれば會合の期あるべきことを告げ、諸人を去なして、己れは鄭玉蘭と共に其場に止り、後ち三合河に投じて死んだ。五僧は殆んど危かつたが、幸に吳天成、洪太歳、姚必達、李式地、林永超等の五勇士に救はれ、追究を免れ、そこで初めて五僧を前五祖と稱し、五勇士を後五祖或は五虎と稱して長く會中に尊まれるに至つた。翰林院學士陳近南は少林寺を焼くに當り、清帝を諫めたが容れられず、且つ漢人に對する迫害を憤り、職を辭して賣卜者となり、江湖に周游中、五僧五勇士等に廻り遇ひ、郭英秀の屍を葬つて復仇の相談なし、衆人は陳近南を奉じて謀主となし、紅花亭を根據地として各地に分赴し同志を糾合して清朝の顛覆を計り、少林寺焚殺の仇を報ぜんと志した。天地會成立後、數千人の會員を得、屢々暴動を起したが餘り成功はしてゐない。さうして辛亥革命後は全く意義を失ひ、ひたすら暗黒方面に身を入れ、賭場開帳、阿片密賣、婦女誘拐、殺人請負等、萬惡なさざるなしといふ有様である。

江彪部——旗は黒色。前祖蔡德忠、後祖吳天成の名を書し、印は菱形。青蓮堂、鳳凰群の字を刻し、福建江蘇を統領す。

洪龍部——旗は紅色。前祖方大洪、後祖洪太歳の名を書し、印は三角形。洪順堂、金蘭群の字を刻